

# 川柳塔

平成十九年五月一日発行 毎月一日発行  
創刊大正十三年 通卷九六〇号



日川協加盟

No. 960

五月号

## 暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会(川柳会)のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口1/6頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④二頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル 202号室

TEL 06-6629-6914

川柳塔社

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた  
手洗いのごま加工・販売  
から50年。

オニザキでは、手作りの  
風味にこだわり、独自に  
開発した製法で、ごまの  
香りと味わいを最大限  
に引き出し、美味しい  
すりごまを作り続けて  
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ

〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 06-0120-30-5050

# 水上のアスリート

河内 天笑

中央アメリカに生息する「バシリスク」というイグアナ科の背びれトカゲは後ろ足を使って水上を疾走する。水生昆虫を常食として水辺に暮らす彼等には鰭という天敵がいてゆっくり泳いでも居れずに水上を走る様に進化した様だ。実際に水上を走る様子を捉えんとNHKはウルトラ・ハイスピードカメラで撮影したものをテレビで放映。一秒百コマで撮られた超超スローの映像には池面を走って渡るバシリスクがまるで時間が止まったかのように歩いて見えるではないか。目を疑いたくなるこの実態の謎はこのトカゲが一秒に二十回も左右の後足を動かせるから沈まず水面を走れるのだと言う。○・二五秒で五歩という早さは百メートルを十秒で走る人間のトップアスリートが一秒で約五歩前後というのに比べて、約四倍のスピードで足を運ばせる故に水上を疾走出来るのだそう。因みに百メートルを十秒で走るのを時速に直せば三十六キロ。人間が水上を走るとすれば時速百八キロ以上でないと理論上走れないと同番組は報じている。男子マラソンのトップランナー達は四十二・一九五キロを二時間六分台で走っている。これは一キロを三分、つまり百メートルに直せば十八秒で全コースを走り続ける訳だ。

先日、近所のバス停にいるバスに後方から手を振って待つてもらい約三十メートル程ダッシュしたが、バスがJRの駅に着くまでの十二分間ほど心臓がばくばくした。マラソンランナーは偉い。

単純計算が脳の活性化を促すというので、とかげの水上を走る映像からいろいろと簡単な数字を並べたが、年末に妻とスーパーへ行つた際に買い物をしたレシートを全部足した数と、レジの合計額が一致したので溜飲を下げたことがある。

単純計算よし、日めくりカレンダーの音読よし、アカペラの合唱（カラオケは勿論の事）よしと東北大学教授で脳神経のオースリティー川島隆太先生の仰るままに実行し、更にいろいろと好奇心のアンテナを張って、やつの事で現状を維持している。

イメージの風呂敷をうーんと広げた脳みその海に釣糸を垂らして、何かひとつアイデアが引っつかかれば「それ！」とばかりに蠶螂が獲物を捕まえる時の様に、集中力を発揮して、あなたも一句を物にして下さい。

## 自選句

にんげんに汚されていくけもの道

天笑

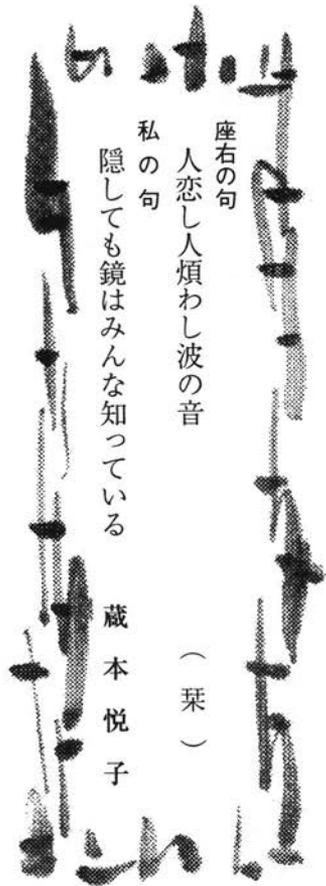
もう森に住めんと熊が言いに来た

間伐をする後継ぎは町へ逃げ

つくるのに半日食うのに半時間

ライオンの牡堂堂と怠けてる

天笑  
天笑  
天笑  
天笑



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

隠しても鏡はみんな知っている

蔵本悦子

(葉)

## 川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「丹波布を織る」

■巻頭言 水上のアスリート	河内 天笑	……	(1)
それも縁 これも縁	奥田みつ子	……	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	……	(4)
温故知新	……	……	(50)
川柳塔の川柳讃歌(29)	木津川 計	……	(51)
自選集	……	……	(52)
水煙抄	奥田みつ子選	……	(56)
愛染帖	新家完司選	……	(80)
誹風柳多留二一篇研究	……	……	21
檸檬抄「吸 う」	川上大輪・松本文子共選	……	(86)

それも縁 これも縁

奥田みつ子

「何故こんなことになったのか?」と思われることがよくある。数え上げれば切りがないが昨年、対談二回と鼎談一回の思いがけない体験をしたこともその一つである。

橋高薫風先生が平成十七年四月二十四日に逝去され、何故か、その直後の五月から東京の或る出版社から、いろいろな話が持ちこまれた。

はじめの間は軽く対応していたが、十七年十月に東京の青山表参道で開催の青山芸術祭・ポストカフェに、一句を入れた絵葉書を出品させて欲しいと言われて承諾したものの、短歌はすぐ分かるが、同じ十七音字の俳句と川柳は粉らわしいから、はつきり川柳と入れるように念を押した。出来上がったのを見ると奥田みつ子(川柳作家)となっていた。私は趣味でしているのに川柳作家は鳥哥がましい限りだが後の祭。

年が明けて十八年一月十九日に銀座の吉兆庵で日本情報文化学会会長・遠藤千舟氏と対談した。その時、私が一番強調したかったことは、世間一般の人々には川柳とは駄洒落や語呂合わせの言葉遊び・くすぐりだけと思われている。サラリーマン川柳はサラリーマンの悲哀を詠ん

一路集 (一) 「連休」…………… 鴨谷瑠美子選 …… (88)  
                  (二) 「貸す」…………… 夏目一粹選 …… (88)  
                  (三) 「マンシヨン」…………… 江見見清選 …… (89)

初歩教室 「アリバイ」…………… 三宅保州 …… (90)  
                  「同人吟」…………… 仁部四郎 …… (92)

秀句鑑賞 「同人吟」…………… 田中みね …… (94)  
                  「水煙抄」…………… 小寺花峯 …… (95)

■各地句会だより 川柳塔みちのく…………… 浅野房子 …… (96)  
門谷たず子さんを偲んで…………… 早川清生 …… (97)

■エッセー 昔の名前に戻ります…………… 山口光久 …… (98)  
川柳雑誌400号特集を読んで…………… 山口光久 …… (98)

四月本社句会…………… (100)  
各地柳壇 (佳句地十選/市丸晴翠)…………… (104)

柳界展望…………… (119)  
五月各地句会案内…………… (120)  
■編集後記 (ひとこと/小川注湖)…………… 希久子・恵子 …… (122)

座右の句

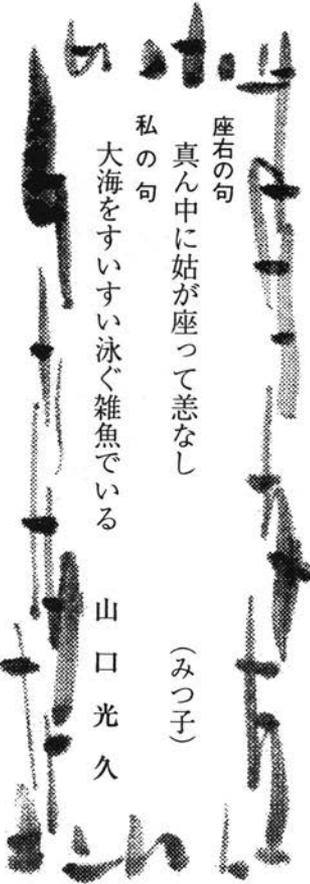
真ん中に姑が座って恙なし

(みつ子)

私の句

大海をすいすい泳ぐ雑魚でいる

山口光久



でマスコミによく取り上げられるが、庶民の日常生活の喜怒哀楽を穿っている私達の普通の川柳は一般の人達の目には触れず、川柳の良さが認められないのが残念ということであった。麻生路郎先生も橘高薫先生も情熱を傾けられた川柳、皆さんが愛してやまない川柳が駄洒落・くすぐりと誤解されたままでは不本意だから。……  
……  
秋になって十月四日、吉兆庵で復本一郎神奈川大学教授と、やすみりえさんの三人で「川柳と小倉百人一首」を話し合った。百人一首に因んだ古川柳のお話を復本先生から伺い、その深さ面白さに夜の更けるのも忘れてしまった。その三回とも「何故私？」と思いつながら何か一本の絆に手繰られるように次々と会に臨んだ。  
この御縁で復本先生と往復書簡を交わす羽目になり、先生の著書「俳句と川柳」に俳句と川柳の違いは切れの有無との説についてお尋ねしたら、先生から「一研究者としてこの本で俳人川柳作家の方々に申し上げたかったことは、それぞれが携わるジャンルに誇りを持って作句していただきたいということだったのです」とのお返事を頂いた。それも縁、これも縁。



河内天笑選

羽曳野市 徳山みつこ

春風に頬をゆるめた鬼瓦

錯覚のままに走った現在地

春霞私の座標決まらない

朝の光へ祈る形の深呼吸

うぬばれ鏡だけを信じて生きてきた

無責任なこととしてくれる多数決

海南市 三宅保州

生きるとや赤信号も幾度ぞ

効いてるか試しに葉やめてみる

何でもないと言うから余計気にかかる

ロボットよ愛という字が読めるかい

お名刺に似顔絵を描く初対面

欠席と書いて理由を考える

鳥取市 倉益一瑤

メールなら十八歳にだつてなれ

欲望のハードル高くして疲れ

疑えば薬も毒に見えてくる

税務署に舌を巻かせてみたいもの

生きてゆく答は波乱から生まれ

欠点を出して仲間にしてもらう

西宮市 西口いわゑ

二番にいと前後がよく見える

テーブルにグラスが二つ仲間おり

チグハグな気持をほぐす熱い酒

花たちがエールをくれる朝の窓

それぞれに違うからこそ仲がいい

ほどいては結びなおして夫婦なり

宇部市 平田実男

問診で財布の中身まで探り

赤い糸予備を持つたのはおんな

ちよい悪のほうがお先に課長の座

気分だけ美人にさせた美人の湯

医は算術白衣は仮面かも知れぬ

欲のかたまりを餌食にしてる詐欺

香芝市 大内朝子

誕生日また一年の始発駅  
旅立ちへ夢のたまごを抱いている  
妄想の恋だと悟る五月間

死ぬことの恐怖やわらく千の風  
だんだんに鏡が怖くなってくる  
萎えそうな心ときどき平手打ち

弘前市 高橋岳水

体験がなくて建前論ばかり  
ライバルを見定めておく射程距離  
献盃の上に注ぎ足す修飾語  
凍てついた心に温い国訛り

馬鹿なこと言いそうだから距離を置く  
春の絵の真ん中を行くランドセル

和歌山市 堀畑靖子

里山の四季をたのしむゆとりあり  
漁火に愁いの深くなった宿  
宝石はなくても光る星がある  
ホームレス呼び名変っただけの世を  
ギリギリの生活知恵がわいてくる  
負け犬の仲間と集う花の下

砂川市 大橋政良

一握りの泡と流れゆく詩囊  
高慢な鼻で鏡の中歩く  
胸襟をひらき巻き込む乱気流

一輪の梅と楽しむ雛まつり  
春の陽の中で私の丸洗い  
支え合う相手をさがす豆のつる

大阪市 星野きらり

身の程という物差しを忘れない  
死ぬ話生きる話へパンを焼く  
人ひとりを愛すほとけの掌で  
ストレスは溜めず優しい顔を持ち

老木も若芽に託すその未来  
春の香へ小出しに使うエネルギー

東大阪市 谷口 義

小銭入れくわしいことは知りません  
高いところから小さな事を言っている  
親分が小さな声で凄んでる  
キオスクで買った咳止め効いてくる  
弁解をしない男と風の駅  
いつまでも首の座らぬ男なり

羽曳野市 安芸田 泰子

合格をすれば素通りする神社  
急がない身が信号を駆け抜ける  
子の夢へ割り込んでいる親の夢  
疎まれていること知らぬお節介  
咲くがよし散るもまたよし四月の絵  
一日が長く一年直ぐに過ぎ

暖冬に眠る蛙を起す鯨

富山市 島

ひかる

同じ種詩いているのに出来不出来  
潰すのは止めた明日は蝶になる  
ブレイキの効かない口を目で叱り  
うなずいて聞いた話をすぐ忘れ

可児市 板山 まみ子

生き方は干渉せずに好きな道  
大方は忘れてしまふ聞いたこと  
四百年生きて古梅の誇る枝  
吹きすさぶ風につわもの偲ぶ城  
極楽も地獄も一度見たいもの

可児市 鶴留 百合

三人目嫁の快挙へありがとう  
連れて行く二歳の孫もパスポート  
コート脱ぐ決意は無用この陽気  
膝に乗り二歳が真似るナンマイダ  
開花時読めぬ陽気と真冬日と

静岡県 菌田 猿 杏

一生を保証しますとコマーシャル  
高配当リスクの事は小さな字で  
赴任した僻地の水のうまさ知る  
村おこしSL走らすローカル線  
凶らずも鉄道と生く定年後

冗談の中で優しい心知り

大山市 吉田 幸子

知恵貸してもらい一句が様になり  
からむ足引き散歩へと弾む犬(マル19歳)  
傷口は洗い流してからの処置  
真つ先に根を張る草が引き抜かれ

犬山市 関本 かつ子

開花日をのらりくらりと焦らす空  
横からも見てやめにした試着室  
厳しさが足らぬオープン戦の顔  
家中の最後の風邪は母が締め  
ルパンより鮮やか鋼盗む業

犬山市 金子 美千代

南国の海感嘆詞並べたて  
三線に合わせ水牛尻尾振り  
台風がなければ住んでみたい島  
紫外線気になりだした春帽子  
ドングリが揃い結論出ないまま

愛知県 早川 盛夫

六月になったらそうだ尾瀬へ行こ  
まっ白なドレスに包む暗い過去  
ネジ一本二本と弛む定年後  
コップ酒この世に怖いものは無い  
洋食のマナーを知らぬ爪楊枝

大津市 中 宗 明

アドレスをこつこつ整理徐々に減り

開運の鍵を握るは年男

握手するポーズで決める仲の良さ

浮気ばれ夫婦波乱の危機が増す

モラル説くすぐその後にはポイ捨てる

京都市 高 島 啓 子

要介護小柄な方が良いだろう

分母は同じ小まめ小ざれい小ざつぱり

ザイルは結んだハーケンが甘かった

車間距離ひらき疎遠になつてくる

終着駅に抗つた跡がある

京都市 榊 本 宏 子

若い子の会話の中で浮くわたし

超美人料理上手に負けた恋

思い出はセピア色した風呂敷に

おしゃべりに反論もあり盛り上がる

棚作り器用な母が引き受ける

亀岡市 井 上 森 生

物好きなまだまだ開く門がある

年毎に命の芯を確かめる

高齢の席で青雲の夢を見る

ウェブ上で孫合格を知る動悸

敬うも敬われるも遠くなる

長岡京市 山 田 葉 子

読み返し違う香りに包まれる

周平の世界明治の祖父がいる

上品なマナー年季もいるらしい

隠し味に恋のスパイスきいている

見守られているうち自信湧いてくる

京都市 結 城 君 子

梅さくら同時に咲いたらどないしょ

春のゆめとことん歩く足を撫で

こわいもの見たさでのぞく二歳の眼

さくらんぼだけは見逃せ虫たちよ

怖いものなんにもないと言うこわさ

大阪市 神 夏 磯 典 子

保険満期元気で証書撫でている

相植を打って後悔しています

苔生えた石に嘘などつけません

アルプスの水で長生きするつもり

ほどほどが分からないので欲が出る

大阪市 前 たもつ

メル友の妻にハートの五十音

よく食べて丸ごと伸びる十五歳

爺ちゃんをどう見ているのか掴めない

志望校合格したと電話来る

朗報に花粉症までふっ飛ばす

大阪市 川 端 一 步

ふんわりと越えたつもりの水たまり

招かざる客が来ました花のころ

坂道はゆつくりにぎりめし食べて

勉強の嫌いが古い辞書を買う

貧乏をしつかり見ると無駄がない

大阪市 川 久 保 睦 子

十指みな伸び伸びしてる嫁の留守

どちらにもとれる微笑を読みあぐむ

錯覚で終った愛のシンフォニー

異常気象わたしにもある狂い咲き

それぞれがとぼけ上手に丸く生き

大阪市 板 東 倫 子

受験の子飢えたけもの眼をしてる

ミステリーニートの部屋にぬいぐるみ

千の風のおまわりさんに泣きました

最近の詐欺は何億何千萬

馬鹿丸出し企業のお詫びセレモニー

大阪市 古 今 堂 蕉 子

危ないよ孫と遊んだ日の寝言

人間の領域越えた医の進歩

関心も愛もあるからうるさいの

複雑な脳波の妻と住んでいる

いさぎよく謝る勇気持ちなさい

大阪市 岡 本 久 峰

働ける倅せ富に勝りけり

死ぬまではもつてくれよとさする足

即効のクスリの裏にある怖さ

やすやすとテレビ宣伝うのみする

あれ以来やもめ暮らしに慣らされる

大阪市 熊 代 菜 月

自画像に涙ひとつぶ書き入れる

春の月恋猫たちがかけ回り

病む身でも明日への夢を追っている

三月月の鎌で刈りたいウツの草

面差しの似ている人に足とまる

大阪市 井 丸 昌 紀

どんな花咲くかわくわく見知らぬ芽

路地の奥内緒にしてる店がある

義理チョコと解っていてもありがとう

びんずるさん所かまわず撫でておく

手料理はからきし駄目で栄養士

大阪市 川 原 章 久

看護師の剃刀痒い手術前

赤ランプ命の綱の手術室

片付けてまた探し物くり返す

惚れた女今惚けている明と暗

的を射る短い話巧い人

大阪市 大川 桃花

聞きとれぬ話に笑顔だけ返す  
好物に食べる前から目が笑う  
知らぬ間に出てた新芽がたくましい  
港には似合う日の出というめし屋  
打てば響く相手にちよつと身がまえる

大阪市 小泉 ひさ乃

リハビリも夢があるからがんばれる  
くじけずに鈍感力で切り抜ける  
生きるとは種類の痛みに耐えること  
潔い散り際を羨む造花  
合掌の手の中にある愛幾つ

大阪市 清水 絹子

元旦に合わせ異国の子の電話  
入試迫るのんびり孫も正念場  
通夜の席あの日この日の恩幾多  
天満宮これぞ由緒の盆梅展  
お供えのみかん仏の贈り物

大阪市 鶴田 遠野

男気で妻子泣かせる保証印  
酔い覚めてちぐはぐ話綻びる  
アルバムの初恋妻に覗かれる  
ほろ酔いで滑った口に泣いてます  
鳴らさずにマナーモードで慕う恋

大阪市 奥村 五月

地下タビで子供を送る無人駅  
輪になつて逆転誓う丸坊主  
春来ても暗いニュースが寒くする  
いじめなど習うことないランドセル  
教育の改革まずは大人から

大阪市 近藤 正

箕面の滝ポンプアップで間に合わず  
千の風に乗つて逝かれた史風さん(叶岡史風さんへの追悼吟)  
春よ来いくらし良くなれつくしんぼ  
星空がまだ生きている過疎の村  
勞せずに老人力がついてきた

大阪市 津守 なぎさ

無農薬手作り野菜届く幸  
OB会八十路の友が音頭とる  
雨予報ものもしないシニア旅  
日に青葉太公望へ鳥の声  
地下道に戦中覗く真田山

大阪市 松尾 柳右子

挨拶の声に機嫌が解る友  
お出掛けの服に迷うと急かす夫  
旅決まり心うきうき夢多し  
状差しに温い手紙と請求書  
三日月の光に白髪なお白し

大阪市 小糸 昭子

はい吸ってはい息止めてレントゲン  
困ったな言いたい事がたまってきた  
小心で人見知りして困ります  
明け方のひよどりの声悲鳴かな  
思うようにならないものは子と病

大阪市 岩崎 公誠

大げさな世辞に本気で酔っている  
美しい国で鉄銅盗まれる

ユニークな人と言われて恋終り

二拍子のリズム浮き浮き阿波おどり

砂糖抜きコーヒー好きで息が合い

大阪市 榎本 舞夢

遅いのでのぞきに行くと倒れてる  
厄除けの財布もらつてルンルンル  
いいたい事我慢してたら先越され  
響き合う心言葉はいりません  
星の数負けないほどの恩を受け

大阪市 榎本 日の出

結婚が就職だった若かった  
格好いい母でいてねと子の注文  
長生きはあかと貯金言ってます  
寸志です見栄は入っておりません  
はいチーズ作り笑いの顔揃い

大阪市 升成 好

好きなことする我慢なら苦にならず  
みずゞの詩渴く心に雫する  
年月が帳消しにする罪もある  
留守電はまるで原稿読むように  
飼う猫と連鎖反応大あくび

大阪市 津村 志華子

残り火を大切にして生活してる  
正直に生き清貧を憚らず  
晩学を支えてくれる友がいる  
大阪の地下空洞化する不安  
大和路に文化伝える番茶粥

大阪市 渡部 さと美

一時間切ると長針走りだす  
古希いうは大そうな歳思うたに  
家事に定年ないから女強くなる  
古武術のこけて怪我せぬ転び方  
五月晴青いブラウス着てゆこう

大阪市 中村 叡子

お水取り暖冬のなか凜と冷え  
この寒さ流石関西お水取り  
子供より犬猫の数殖える世に  
幼児ではないがCM大好きに  
偶然に食べたペンネが病み付きに

大阪市 福岡末吉

老いに耐え操る絆夫婦船

詫びしきり妻に凭れて喜寿が見え

卓袱台の片肘ついた亡母の影

楽しみは辛さ苦しみあつてこそ

お預けを食う蘊蓄の盛合せ

大阪市 池上清治

腹八分越えても口は辛抱せず

良識を越えた病気の腎移植

スクワットし過ぎてマッサージに通い

あした会う約束の友きのう逝き

背の高い友が僕より低くなり

大阪市 中村れんげ

ただ咲いてかけ引きもなく散つてゆく

きつかけをつかめばするり解けた謎

美の国をしかと見るまで生きてやる

五線譜にのつて来ました若葉風

主語抜きのアレソレホレで通じてる

大阪市 伊藤博仁

申告を終えて帰りの味気無さ

税務署が丁寧な丸振替日

にわたりの格好をして飲むくすり

プランタン陽を分けあつてふとん乾す

いやすのも傷つけるのも同じ口

池田市 栗田久子

納豆に罪はないよと食べる日々

とれたてを浜でたたきとする鱈

やすらぎは気の合う人とする会話

忘れぬ声が五月の風となる

面識はあるがご縁はないようで

和泉市 横山捷也

春眠をむさぼっている孫受験

広告の多さに迷う新世帯

認知症らしい噂が飛び火する

呆けたふりしたが妻には見破られ

白菜に虫へばりつき寒あける

和泉市 西岡洛醉

一日をピエロとなつた今日の僕

まだ死ねぬ年金背な坂登る

凜として女と出逢う花の街

歳月を追う愛妻の笑い声

一合の酒にストレス飛んで行け

泉佐野市 山本蛙城

暖冬の向こうで鬼がほくそ笑む

卒業の涙も派手にタカラヅカ

こんな物までも捜せるのかネット

真つ直ぐに生きて美田のない誇り

後記から読んで納得飛ばし読み

茨木市 藤井正雄

抜擢の椅子に座ってからの風

単身赴任夢は子に触れ妻に触れ

足の爪手の爪若さ自己主張

学校と塾とピアノの三角形

ときめきにとまどいもある初対面

大阪狭山市 矢野 梓

古里の友の電話に春の声

主婦業は手抜きで出掛け春うらら

朝市で二人に余る野菜買う

初耳の顔して同じ話聞き

下げる事に慣れた頭になつてゐる

交野市 森本弘風

肝心の話忘れて切る電話

勇気出しオイと呼んでる夢の中

一万歩今日も歩いた誕生日

孫ほどの医者が説明する病氣

胃カメラの写真に納得した病氣

交野市 山川日出子

三猿と遊んで心丸くなる

心まで寒い事件が増えてきた

交替に姑は味噌汁嫁スープ

お花見のお供にカメラ花菓庵と

玄関の客にオウムがオリコーサン

交野市 田岡九好

風ぬくし冬は名のみの暖冬賦

天変か二月の末の雪柳

大臣は思ったとおり言っただけ

作戦は馬鹿正直という四文字

目を閉じて九条念仏たゆみなし

河内長野市 山岡 富美子

ばらばらの家族へ母の司令塔

ドクターもナースも家族闘病記

丁寧に咲いて命をくれないに

ほめられて花は散るのを忘れてる

チャンネルへ踊るあほうに見るあほう

河内長野市 村上直樹

腕白な風だスカート狙い撃ち

春雨が酒ならきつとロゼワイン

連れ添って破る許すの積み重ね

友の訃がきつかけ今日も一万歩

名案も逆立ちすれば悪だくみ

河内長野市 水谷正子

女子マラソン見ている丈でしんどなる

雨ですよ声かけたけどまた晴れた

横綱が負けて座蒲団雨あられ

縄のれん苦勞話に尾鰭付け

打ち上げに飲むつもりらしテクシーで

河内長野市 坂上淳司

早く来い偶数月の十五日

デビューする日を数えてるランドセル

骨酒で成仏しませ睨み鯛

商人の意地がなにわの屋台骨

テノールが骨身に沁みる千の風

河内長野市 井上喜醉

スタミナを目指す傘寿へ温める

コテコテの親子三代虎ファン

脳味噌がブレーキ落ちる記憶力

誰にでも合わす器用な二枚舌

うぐいすの声聞きながら母狩り

河内長野市 植村喜代

山一つ今日もブルドーザ走る

ローンと言えど建つたらすぐ入居

孫の手紙いつもなぞなぞおまけ付き

宿題だけ出来たらいいよ低学年

学歴社会は失う物も多し

岸和田市 井伊東吉

流感も格差があつてAとB

常連の柳友顔を見ぬ不安

お花見に俄然張り切る老人会

吸物に菜の花うれし今日の膳

宿題の無い春休み待つ子供

岸和田市 岩佐ダン吉

焦げできる炊飯器なら買うてみる

河渡るもう振り返りなどしない

熱いもの抱いてひとりの手を上げる

冷めた目で私を見つめ直したい

蹴られても私は生きる他はない

岸和田市 原 さよ子

花便りどこも歩いて行けぬとこ

花屋には春があふれて足を止め

自己紹介口下手ですとよく喋る

足り過ぎる言葉にふっと不快感

的を射る忠告だから胸にくる

岸和田市 小島笑司

年傘寿気持三十徒歩三里

妻紅茶私珈琲娘酒

睡眠時私無呼吸吸症候群

株上昇景気回復我無職

趣味多様株歌落語詰将棋

岸和田市 土橋房枝

カレンダーに我が家の予定記憶させ

私にだけ分かる記号の予定表

まだともううまく使つて古稀の母

独り居がみな寂しいとかぎらない

春の陽につい気を許す立ち話

岸和田市 森 元 ふみよ

約束を破つてからの蟹歩き

堺市 柿花和夫

名言があくびしている備忘録

退院後ドナー登録するつもり

体格は甲種合格フリーター

九条に迷彩服は似合わない

堺市 山本半銭

可愛がる孫の背丈はすぐ伸びる

花の寺尼僧の法話好ましく

ご苦労さま膝撫でている自愛かな

花の芽がふくらみドラマ幕切れに

白いシャツ森へ芽吹きの声聴きに

堺市 石堂潤子

お隣の芝生は青い方がいい

菜花の黄ぼつぽと開き無人売り

山羊の瞳の横一文字圍うらら

眼科医に泣かされに行く逆睫毛

暖冬のさくら慌てて花を見せ

堺市 志田千代

ゴチソーサマ自慢話とコーヒーと

笑われて以来アヒルは羽ばたかぬ

保護色にあきたか妻の春帽子

開けてよい父さん宛の手紙なら

うれしい日でもないけれど眠れない

団塊が日本脱出たくらんで

少女より女に目醒め初々し

自分史を五年あためたため未完成

契約書文字が極小読まれぬよう

昔なら御近所のことタバコ屋で

堺市 雪本珠子

未来図がずれてそれぞれ別の道

春なのに君と僕とに隙間風

猫までが気まずい空気察知する

春めいて浮気の虫が動きだす

挨拶もなくやって来た更年期

堺市 堤 楯代

人は人私早食い大好きよ

おしゃべりを聞くもしんどいことですよ

年を経て自分の名前好きになり

半鐘も召集でなく拉致された

薄味でやっぱり長く生きたいの

堺市 村上玄也

会いに来たくせに偶然会った振り

口下手が喋り誤解に輪をかける

喪が明けて女は晴れて蝶になる

暖冬に追いついて咲く桜

温暖化魚の住処にも異変

堺市 近藤 豊子

足音は小さいながら歩きだす  
玄関に小鳥のような靴そろえ  
母より小さなお口よう笑う

元気です全てトマトのおかけです  
富士山は眠っているまに飛んでゆき

堺市 加島 由一

飲む機会上手につくる寂しがり  
生き方を般若心経からもらう  
嫁ぐ娘が庭で燃やしている何か  
反骨に磨きがかかる老いてゆく  
霜焼けも青洩もみな死語となる

堺市 宮本 かりん

胸の隅整理出来ないものがあり  
駄目押しをされて二の足踏んでいる  
大切なところが抜けてる聞きかじり  
年を忘れてしつぺ返しのくるからだ  
こたえまだ出ぬまま今日も黄昏れる

堺市 和田 つづや

豚汁にたつぷりの葱唐からし  
貪欲で人間臭がなくならぬ  
しつかりと相づち打った他人事  
看護師の奉仕に妻を重ねみる  
朗らかな風でいてくれ娘たち

堺市 齋藤 さくら

平穏な暮らしときどき恐くなる  
手も足も年相応の答え出す  
せかせかと歩く癖まだ治らない  
宮崎がタレント知事で名を広め  
やじ馬になって見ている都知事選

堺市 西村 りつえ

プロ野球海の向こうが騒がしい  
人さくらだんだん狂う怖い世に  
世に誇る美しい国夢で見る  
すつぴんで避けているのに友と会い  
弱味つかれ口八丁も言い負ける

堺市 源田 八千代

居ながらに菜の花畑見る至福  
花よりも犬のファッション目に留まる  
今年こそ自己責任で申告書  
それぞれの尺度で測る満足度  
長生きをする気で励むストレッチ

堺市 奥 時雄

別嬪の会釈うしろの人だった  
錯覚もなしに結婚などできぬ  
辞表出すほど苛めた覚ええない  
神様によからぬことを祈願する  
おみくじは所詮気休めだとわかる

堺市 矢倉 五月

きっかけはどうあれ好きになりました

多数決言いたい事はまだあるが

以心伝心着たい背広が出してある

一日中家に居るのに髭を剃り

妻名義そんな口座は僕知らん

四條畷市 吉岡 修

洗っても八十年のしみ消えぬ

ふんわりとした人らしい決めました

信号を守るほどの暇はある

盗を伏せて男のけじめ言う

餌だけに少し反応する金魚

吹田市 早川 清生  
(棲世改め)

人を神欺きつづきぬ有史以後

多神教神みな芸達者におわす

民主教育です家事下手恋上手

ひとり一日生かす値妻といえるスーパー

薫風新子昭和の棺舁かせてよ

吹田市 瀬戸 まさよ

清廉の上司おこほれない社員

品定め高価な方を買えと夫

マンションも増えスーパリーの品も増え

雪山も緑の山も日本の美

玉ねぎは淡路と決めている頑固

吹田市 山本 希久子

歩き続けるつもり五月の風の中

ワンランク下げると呼吸楽になる

斜めから見ればスリムな影である

割り切れぬことばかりなり古稀を生き

逃げそうな夢自転車を追っかける

吹田市 穴吹 尚士

閃白の座にもう一度戻りたい

グリーン車に尻こそばゆいフルムーン

窓ガラス震わせ妻のアベマリア

外角の低め狙ってついた嘘

マニキュアの手に言い訳を抓られる

吹田市 大谷 篤子

時々は過去を優しく撫でてやる

いつからか薔薇のマニアになっている

河豚ほどでないがわたしにも毒がある

錯覚の絵画の街に迷い込む

きっかけはころんで知った痛さから

吹田市 太田 昭

辻褄を合わせる口が疲れ出す

蹙<sup>こむ</sup>の母を背負って春を聴く

踊り場でちよつとの嘘を言い交わす

円周を歩いて里は遠くなり

冬らしい寒さに会えてはつとずる

吹田市 野下之男

美しい国をいやがる事件事故

早すぎてはにかんでいる春の神

美味しいをお待ちしている妻の顔

発つ前に土産で悩む苦勞性

押し込まれ乗った電車が動かない

吹田市 須磨活恵

皮靴をぴかぴか磨き春本番

花を愛で人を信じて日々長閑か

愛情も水もたつぷり植木鉢

失敗をするたび落ちる脳のうろこ

二十年よく頑張った万歩計

吹田市 木下敏子

深呼吸白い木蓮目を覚ます

気持ちだけ衰えないで履いた靴

ほめられた手相で雑巾絞ってる

財政難老人力を振り絞る

美しく老いるに無理な面構え

高石市 浅野房子

ネガティブに生きて得るもの何もなし

コマーシャルにまみれたドラマ見せられる

風呂上がり心遣いをさりげなく

話が地に落ちたそろそろ別れどき

取り敢えず今日一日は無事でした

高槻市 指宿千枝子

思い立つとりゅつくに帽子靴はいて

誕生日先ずは外出バスに乗り

春風に花粉も乗ってバス発車

早春譜ハミングしてる二階バス

越されても自分の歩幅守るのみ

高槻市 執行稲子

フイーリング合うて嬉しい散歩道

幼さの天狗の鼻を叩かれる

肥り過ぎ大根空しいゴミの山

授かる木芽が出て拝むじいじばば

アイデアの記事大好きでファイナル癖

高槻市 瀧本きよし

癌ですぬいともあつさり言う主治医

まさか癌速回りして避けてたが

癌ですぬ閻魔小躍りやってくる

癌わかり地獄ツアアの夢を見る

癌手術避けて照射の方選ぶ

高槻市 生田義一

六者会日本一人が蚊屋の外

品のよさだけでは通じぬ永田町

五十年夫婦げんかも様変わり

病癒えお酒の量も徐々に増え

じじ馬鹿か孫にべつたり日々楽し

高槻市 富田美義

土壇場を越えて人間取り戻す  
清濁を飲んで幸せ捜して  
箱枕きつと頑固に似合うだろ  
欲だけは掘れば掘るほど止らない  
リベンジのための栄養溜めてある

高槻市 乙倉武史

八百長の疑惑国技が泣いている  
座布団が飛ぶ春場所の荒れ模様  
出直してペコちゃん笑顔取り戻す  
鈍感力だけは負けない自負がある  
期限切れ迫る順から平らげる

高槻市 大崎侑子

飛び越えた溝で短足思い知る  
ライバルを越えているのは目方だけ  
見回すと越せない壁が有りすぎて  
垣根越え隣の松が葉を落とし  
会えば愚痴こぼして友は気を晴らし

高槻市 西谷治三郎

もの言えば薬検査がまた増える  
電話あり初めて気付く忘れ物  
盗み酒泥棒してるわけやなし  
長電話背筋曲げたり伸ばしたり  
短めの経に喜ぶ関節痛

高槻市 傍島克治

賛成の拳手が欲しくて狩り出され  
待ち侘びる蛇の目気になる雨の駅  
冷静に戻ればあれはジョークかも  
確かめたくて伝説の池掻き回す  
父の言訳そっくり息子真似ている

高槻市 井上照子

CMのエステ今更鏡みる  
お彼岸に好きなおはぎを姑母さんに  
今朝もまた会えた散歩の老い二人  
教育の場の難しさ国憂う  
赫灼の兄も丸みの歳になる

高槻市 左右田泰雄

強情を張って居座るおじゃま虫  
端居して松風の音聞くゆとり  
水溜りまだ飛び越せる自信あり  
幕あいを軽い手品で楽しませ  
途中下車気ままな旅の無人駅

高槻市 杉本義昭

母さんの笑顔伝わる王子焼  
あいまいな返事の裏にある秘密  
人生の余白明日にとっておく  
すつきりとメールで別れ話する  
宝くじ美人売子の方で買い

高槻市 佐 甲 昭 二

リストラの男迎える固い椅子  
幼さをちりり覗かす自己主張  
追伸に小さな文字でねだられる  
普段着で付き合ひ嵬が邪魔になる  
上品な顔だが退屈させられる

高槻市 峯 村 勲 弘

愛犬の写真も飾り彼岸入り  
まだまだと気張れど足がついて来ぬ  
昼のバスほとんどの客無料パス  
年金に見合う背丈のマイライフ  
喧嘩四つ組んで人間味が出る

豊中市 安 藤 寿美子

春寒と言うには少し冷えすぎる  
入浴が長いと嫁がドアたたたく  
さよならをして仰いでる夕茜  
この駅は別れの記憶ばかりなり  
ちよい悪の気分で居酒屋をのぞく

豊中市 吉 田 あずき

同権の茶の間はいつも空つ風  
粘って来た心に風を入れる旅  
老舗の味覚えた舌が無理を言う  
取り越し苦労ばかり詰めてる旅バッグ  
春野菜盛って心に灯がともる

豊中市 藤 井 則 彦

旧友の祝辞が怖い披露宴  
テレビ消し孫と音読する夕べ  
無頓着な優越感という病  
マンネリの空気破ったフリーター  
声美人一度会いたい妻の友

豊中市 水 野 黒 兔

五線紙に春の芽を置くファンファーレ  
民と官どこかでいつも不整脈  
大国のエゴに凍土が溶け始め  
潮騒は宿の干物の隠し味  
フォアグラの後でお茶漬日本人

豊中市 江 見 見 清

誘われてみたい気持ちを見抜かれる  
嫁が来てパーゲンばかり行きにくい  
ボケてみるすぐツツこんでくれる友  
真に受けて誘いにのつた堅い人  
代替りまた児の遊ぶ裏通り

豊中市 岸 田 知香子

主婦業も機械動くと信じてる  
ロボットと交代したい主婦仕事  
家の事憶える気なし先険し  
日差し春軽いファツションガラス越し  
お水取り済むまで老いは気が抜けず

豊中市 山門タミ

富田林市 大橋鐘造

思い出が私の大事な宝物

逞しい障害者から勇氣受け

親子づれのりまきにぎり美味しそう

春が来た競って花の叫ぶ声

陽が昇るおはよう今日もよろしくね

富田林市 池 森子

見栄と義理春は臆にやって来る

どうにでも取れるジョークで擦り抜ける

春風が叫ぶと冬が散り急ぐ

雑踏の中で呼吸を整える

太陽へ月へ翔ばそうころぞし

富田林市 中井アキ

始まりはこぼれ種だという記憶

薔薇風呂でしばし女を取り戻す

補聴器で深夜放送聞いている

片恋のうなじを撫でる千の風

星空を仰いで来し方を糺す

富田林市 片岡智恵子

個人情報守り絵馬にも張るシール

ことば以上のことば空気が澄んでくる

ねばならないの世界を出ると楽になり

この先も各駅停車の旅をする

心配ごと溜って狂う胃の調子

任せとけ言えば早速くる無心

火柱を立てた記憶のある昔

ふり向けば他人ばかりの冬の町

もう来ない今日という日を大切に

期待され肩に重たい荷を背負う

富田林市 稲川恵勇

復活へノロシを抱いたコップ酒

繁昌亭浪花の文化よみがえり

晩学の夢築きます五七五

やりとりに手話も覚えてボランティア

復党の芝居支持率容赦せず

寝屋川市 江口度

ロボットが春だ春だと言いだした

隣からおでんをくれる春の宵

ストレスがあつて血圧高くなる

四人寄ればマージャンをはじめよう

家出たらしばらくポチが鳴きつづけ

寝屋川市 籠島恵子

鯉の絵に春の陽射しをあててやる

ラストチャンス花に見頃があるように

おしゃれにはうとい深爪割烹着

軽はずみに決めてしまった釘の位置

買物は歩く散歩をしたつもり

寝屋川市 平松 かすみ

本気かと言われたハウス出来ました

あっちこっちに乙女を映したい鏡

悔まれる所もあるが我がお城

プーさんが玄関番をしてくれる

利口には回らぬ舌をもて余し

寝屋川市 森 茜

テレビから木魚 わたしはお題目

手抜きするには恰好の昆布つゆ

さりげない心遣いがむつかしい

浮き雲よ私のうつも道づれに

再会のひとも小さく老いており

寝屋川市 太田 とし子

仮の世の心が寒い流し雛

大根に負けるエステが金を食い

まんまるい月に兎の影がない

年寄りの屯に町が寒くなる

好物をしつかり食べた丸儲け

寝屋川市 坂上 高栄

シャボン玉一つ一つに千の風

観覧車生まれ二人の小宇宙

脳梗塞老若男女の区別なし

病院で三食医者付きこの平和

人の道教えるカーナビほしいもの

寝屋川市 富山 ルイ子

悲しみの闇人の手を払いのけ

人の優しさを感じた言葉かけ

友からの褒め言葉聞き身をすくめ

仲直り時の氏神待つとする

チヨコレート思いの丈をそつと告げ

羽曳野市 吉川 寿美

鬼の霍乱どころでなかった救急車

この足もいで欲しい激痛走る

地獄の一夜明けて自分をとり戻す

いたわりがじんじん染みる車椅子

わたしからやる気失くせばゼロになる

羽曳野市 三好 専平

ベトナムで躓きイラクで味噌を挿り

管理職残業し過ぎ自殺する

カンとコツ機械の知らぬ人の知恵

アルバイトのはしごまでして子は自殺

捏造も改竄も古くからある字

羽曳野市 酒井 一壺

土壇場で気合い出て来るこの不思議

技に勝って気合い不足に悔い残る

聖書だけいつも肌身を離さない

いつの世も何より大山人作り

ところどころで言われて酔いが醒めて行く

阪南市 森村美花

煮えさらぬ男に心見せられぬ

椅子の前正義忘れている男

生姜湯に病んだ気持が溶けていく

セーターをピンクに変える風が吹く

大声で笑ってからの軽い足

東大阪市 笠井欣子

桜咲く頃は耳鼻科と仲良しに

健忘症酒飲むことは忘れぬ

吾が家の広告塔はおじいさん

知らぬふり忘れたふりも老いの知恵

ヘルパーを待ちますさつと片付けて

東大阪市 安永春

ページ開けば赤毛のアンの声がする

よく喋り大笑いするランチ組

運だめしやっぱり買おか宝くじ

じわじわと飲ませる魔女の思う壺

居眠りもできぬルールに船をこぎ

東大阪市 北村賢子

ほほえみを交わしてぬくい白い息

みんな居てぬくかったなあうさぎ小屋

ギンギラに飾って私ってセラレブ

錯覚が始まりだった凡夫婦

いじめっ子の方が心は病んでいる

東大阪市 中岡妙

足腰の骨まで撮って老化です

百均で足りるストレス解消法

浮雲に今日の懺悔を乗せておく

独り立ち親の思案は置いてかれ

子が巢立ち小さな鍋に替えました

東大阪市 佐々木満作

錯覚に陥り出口見失う

運のなさ嘆くな拾う神もある

青春は淡いレモンの遠い日々

おでこ撫で熱の具合を診る笑顔

温暖化生態系が様変わる

東大阪市 米田水昇

盆梅の古里を恋う梅古木

薔薇の風青春時代よみがえる

庶民にはいつまでも吹く不況風

セール品買って押入れあふれさせ

物忘れ部屋に探知機欲しくなる

枚方市 海老池洋

総中流を誰も言わなくした格差

妻の乱凍ったビール飲まされる

逃げるのが上手くて渦の外にいる

知る人は知るいたずらに争わず

忘れたらあかんと年忌やってくる

枚方市 寺川 弘一

ついたらら噛みつく亀を飼っている  
メンソレタム塗るパーパーで髭を剃る  
コスモスが揺れる畑でプロポーズ  
一本も薔薇をくれない人と添う  
スイートルーム一度も泊ったことがない

枚方市 宮川 珠笑

入院にうとうとの味教ええられ  
陽を集め友をあつめてサンルーム  
近所ではビーポー鳴らさず来て欲しい  
入院に家族の温み教ええられ  
元教師町内会でも嫌われる

枚方市 二宮 山久

寒暖の差はげしい日々も風邪ひかず  
花粉症俺には縁のない話  
お隣の嫁とくつろぐティータム  
コンクール全国制覇夢の中  
風呂敷を広げすぎたる我が人生

枚方市 伊達 郁夫

ポケットに王手のための歩を握る  
悪口を言われトイレが出られない  
聞き分けるために持つてる耳ふたつ  
凧になり風の形でひとり旅  
雑草を抜く手に残る根の匂い

枚方市 森本 節子

時間決め目を労わりつつ読書する  
暖冬で喜んでるとつげがくる  
半鐘が盗まれるという時勢なり  
三々五々梅描く人の中山寺  
予約しても一時間は待つ病院

枚方市 丹後屋 肇

スクリーンに涙を落とすポップコーン  
カーテンを巻いて鎮める感刺激  
姿見と睨み合いする外出着  
一錠を減らして医者に褒められる  
水平線入日の滾る音を聞く

藤井寺市 高田 美代子

ポケットが付いているので買った服  
壊れる時はほらねガラガラ音立てて  
シルエットが少し気になる花の闇  
花茗荷わすれきれない人がいる  
ヨン様を気にしたことのないわたし

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

桜咲くころふわりと身も軽い  
大声で話す内緒のない夫婦  
花畑妻の軍手はすぐ馴染む  
ファンタジー花屋の花にまどわされ  
頼り合う温さがあってついてゆく

藤井寺市 中島志洋

五月晴れ胸の小窓も開こうか  
味噌汁とスープが並ぶ三世代  
臍繰りが化した曾孫の鯉轢  
熱弁のわりに中味のない話  
いい人と言われ続けて平のまま

藤井寺市 楠 昭子

恥も見栄も捨てたら軽く生きられる  
久しぶりすぐにあだ名が出る故郷  
安全を心してたが事故に遭い  
それなりにがんばって来た人生だ  
思い通りにならないから知恵がつく

藤井寺市 太田扶美代

時々番狂わせもある命  
地味ながら自分の彩は決めている  
お人好し引き立て役に飽きてきた  
詰めるのも楽しからずや宅急便  
転んだら多分起こしてくれるやろ

藤井寺市 若松雅枝

バスポート欠伸したまま期限切れ  
しなやかに生きる命のある限り  
一坪の庭でも嬉し花一ぱい  
一人居て何だか恐い夜の電話  
千の風歌って亡夫に涙する

藤井寺市 鈴木 さお

体ごとはしゃいでみたい春だから  
ジョギングで減らしビールで元戻り  
足腰を欺して登る二上山  
自分へのハードル下げぬ古希の意気  
あまり欲出さぬ血圧上がるから

箕面市 出口セツ子

がんばっている子のパワーもらうTELL  
がまん強く無理をしすぎるから不安  
年金は頼りになれず春愁う  
足かせにならずに自立したい親  
兄弟の過労ハラハラしています

守口市 井上桂作

平等で敬語はいつか忘れられ  
温暖化地球の危機は目の前に  
人類が地球環境悪くする  
人間の活動今や負の遺産  
魂が空かけ巡る千の風

八尾市 高杉千歩

逗留がなくなりますが嫁のそば  
微笑みを交わすだけでも救われる  
意味なんて分からないまま朝の経  
老醜へうすく紅ひく花の宴  
往きはよいよい帰りが恐い救急車

八尾市 長谷川 春 蘭

日向ほここの身倅せかもしれぬ  
片づけてこんな物あり日の短か  
七草の小篋飾りて診療所  
あなどりて風邪引きて松すぎぬ  
寒の水ごくりごくりとのど仏

八尾市 吉村 一 風

新しい彩がほしくて輪をぬける  
幸せは明日の予定組んである  
定年のない人生の医者通い  
若い人真似て着メロ変えてみる  
花好きの妻の笑顔に癒やされる

八尾市 村上 ミツ子

春の風の翌日冬の風なり  
啓蟄へ松も腹巻き脱ぎ捨てる  
街中をマスク美人が闊歩する  
ストレスへ鈍感力を引き寄せる  
褒められてどんどん軽くなる財布

八尾市 生 嶋 ますみ

認知症のドラマは他人ごとでない  
検診の結果うれしい空の青  
扉越えて匂いが届く沈丁花  
独りでも隣に負けぬゴミを出す  
ただいまの声タコ焼きが待っている

八尾市 山本 宏 至

爽やかな会釈に気持ち軽くなり  
向かい風軽くかわして生きる知恵  
一本杉無口な父の姿だな  
骨休みの時間ばかりが長くなる  
酒も呑み仕事もしたが無理もした

大阪府 米澤 俣子

軽い罪視点変えれば許せそう  
慢心はきれいに洗い流さねば  
みくびった風邪も女も挺摺らす  
無視無言あれはジェラシーだよきつと  
ロボットに主婦のポストを譲りたい

大阪府 初山 隆 盛

ホワイトデー愛のノックへ応えたい  
賞罰なし天下の空気俺のもの  
姑と垣根外して午後のお茶  
母性愛いっぱい詰める哺乳瓶  
報酬の格差へじっと手を見つめ

大阪府 澤田 和 重

留守電へ溜め息ひとつ落しとく  
難題を連れて菓子折り畏まる  
職を得てサイフのカードよく弾む  
言い訳はしないでおこう下手だから  
ストレスが溜まるライブルできてから

大阪府 野田 栄 呼

和装には大和なでしこ住んでいる

どう刻む残り人生持ち時間

野良仕事できる幸せ生きる欲

刻戻し娘にかえり唄う歌

髪染めてお洒落心と春をゆく

大阪府 桑 田 ゆきの

裏方が本気を出した豪華膳

黄砂降り残留孤児に無情風

大きくさめ法話に羽根が生えた刻

山菜煮おふくろの味しみ渡る

彼岸寺善女の顔で畏まる

大阪府 西 川 更 紗

店仕舞い期待するほど安くない

深追いはよそう空しさのこるだけ

昨日今日命をつなぐ細い管

寒くても認知の母は外が好き

うぐいすに出迎えられて墓まいり

神戸市 山 口 美 穂

明日の風味方と信じ床に入る

腹の虫を押さえる深呼吸二つ

おはようへ老犬尻尾をチョット振る

同窓会病気話題で盛り上り

高齢化五十年前はみな二十歳

神戸市 山 口 光 久

五つ星への約束いまだ空手形

雑草も注目浴びる色で咲く

目標へ試行錯誤の舵を取る

白票は無効票より物申す

飲屋街路地の奥まで知り尽す

神戸市 田 中 章 子

岩盤浴あなたたまかせに汗を出す

宇宙から見ればちっけな悩み

ニッポンに恐竜がいたロマンだな

子を持って息子優しくなったこと

ウツ晴らす財布に響くお買物

神戸市 両 川 無 限

ひと波乱あつて絆が太くなる

目障りな女がそばにいて困る

物の無い頃は守っていたモラル

中卒の意地が社長の中にある

欲に目がくらんで的に当たらない

神戸市 伊 勢 田 毅

政治家の嘘に慣れてく身の怖さ

暖冬でさくら祭りが揺れ動く

予報見て外出思案花粉症

最下段小さな文字でお詫びする

不適切最敬礼で幕を引く

神戸市 山田 婦美子

横切りのりんごの中の万華鏡

信用を得て隣人との輪をつくる

甲斐性がないからいつも負けておく

啄木も見ただろう手をじっと見る

過ちをつつかず包む大きな手

尼崎市 春城 年代

白酒進上幼ら交わす雛あそび

筋道が立った話とお赤飯

下脛がむずかゆくなる花粉症

春野菜の優しい色とほろ苦さ

のら猫が定時にプロック塀通る

尼崎市 春城 武庫坊

喉仏にいかなごの春通過する

青い空雲が綺麗な絵を作る

水溜り越えた数言う皺の顔

怒鳴る気はないが心にある不満

啓蟄に気温下って庭静か

尼崎市 田辺 鹿太

退化した脳の肥やしになる漫画

ハンバーグ気になる子等の魚離れ

雑草が元気で困る温暖化

傘寿から米寿へ挑戦は続く

正論を吐いても嫌われる世相

尼崎市 軸丸 勝巳

見えてこぬ検査検査に重い足

点滴を連れたトイレにドアがある

空っぽの腸お待たせと粥啜る

裸木がえつさえつさと春を吸う

啓蟄に虫が引つ込む寒戻り

尼崎市 長浜 美籠

水仙が咲いた私の秘密基地

離れ住む娘から定時に来るメール

おばちゃんの日日プールエステなど

生活がそのまま顔に出ておとな

マグカップとりとめもない時という

尼崎市 林 昭三

ちよつとした事に里では小豆飯

七光だけで芽吹いたひ弱な子

母さんも立入禁止子供部屋

一緒だと言いつたが今ひとり

しんしんの四季はいずこに温暖化

相生市 中塚 礎石

風見鶏いつも尻尾は向きを変え

橋の下たき火は人が住んだ跡

暖冬へ合わぬ祖父母の農のメモ

ゆつたりと我が家の風呂で旅のあか

一杯の酒と決めてた縄のれん

芦屋市 黒田能子

三田市 北野哲男

許したり許されたりもして家族

輪がなごむ踊り上手な人がいる

青春の染みのついでる愛読書

悪筆で心をこめて書く札状

窓越しにのぞく平和な家族像

伊丹市 山崎君子

聖地めぐり高野山から春便り

老母の部屋明治の雛はふつくらと

切干しに里の温みと陽の匂い

コーヒーでパパに乾杯午後三時

救急車何台目かな終い風呂

川西市 西内朋月

穂の芽を肴に春を飲んでいる

恋の芽を枯らさぬように水をやり

年金の範囲で遊ぶありがたさ

ケセラセラ身辺整理子にまかす

火の気ない無人の家が待っている

川西市 米原雪子

仲直りすたと胸のつかえ落ち

仕方なく二股かけて見放され

私立へと格差に焦る親心

一言で煮つめたプラン壊す人

わいわいと騒いだ割に効果なし

大ジョッキ一気に胃まで滑り落ち

絵の餅と百も承知のマニフェスト

表札に名前並んで一人住む

遺影みな性善説の顔ばかり

開会のあいさつどこも新子の計

三田市 堀正和

還暦を過ぎてても美人まだもてる

親しみを感じてしまう誤字ひとつ

ロボットはいいぞニートなどおらぬ

ライバルも持ってた同じ虎の巻

そのうちにツキが巡ると言い聞かす

三田市 石原歳子

人並みに花見もしたい花粉症

うやむやを喜ぶ人と怒る人

わたくしもそうよと笑う老いの愚痴

厚い本斜め読みする癖がある

アルバムの父母がわたくしより若い

三田市 久保田千代

損得は抜きに絆があつたかい

拒否してるようには見えぬ足の向き

清濁を吞んで変らぬ海の色

向き合って丸テーブルに家族の和

木を植えるこの木の百年後想う

西宮市 山本 義子

百均で幸福感をふくろ詰め  
ひといきにお手紙書けた いい日です  
間違いは大笑いして包みこむ  
句読点のところどころで熱が出る  
格好よく生きるなんて無理 わたし

西宮市 牧 渕 富喜子

人の世話受けてそろそろだと思ふ  
タイミングパスが運よくこんな日も  
皮肉にもその後とつと春の雪  
春はいいレジのバイトが若くなる  
フランスパン抱えて帰る戻り寒

西宮市 坪井 孝一

団塊に頑固な意志は抱いたまま  
昭和の風どこへ吹くのか迷うてる  
ロボットが失業保険くれました  
まだ夢を昨日今日明日探す旅  
世渡りにいつも邪魔する掟の字

西宮市 片山 忠

きれいごと言うからあくび止まらない  
反対をされて自信が湧いてくる  
ありふれた毎日サンマでも焼くか  
だんだんとアリコの呪文にかかりそう  
健康オタクに嵌まってさあ大変

西宮市 秋元 てる

母米寿聞かれもしない年齢を言う  
小走りの癖何時か消え母米寿  
フルネームは病院だけに老い侘し  
交番の赤色灯よ子等は留守  
二人居た頃より増えた酒の量

西宮市 菊池 トミエ

萌え出づる生命の音を耳にする  
生きるもの皆いとおしい花吹雪  
顔よりも心ですよと言う美人  
だまされる方にもあつた欲ごころ  
気の迷い背中押されて吹っ切れる

西宮市 井上 松煙

ブランコの子供と遊ぶ春の風  
追い抜いて行く顔そつと見つめてる  
スランプも仲間があると越えられる  
趣味の友生きる力をもらつてる  
友なれば格差気にせず付き合える

西宮市 緒方 美津子

下積みの汗も乾いて日向ぼこ  
いつの世もまさかを越える恋心  
保育園雪トラックでやつてくる  
日帰りは嫌だといつも拗ねる猪口  
若葉風一ぱい吸えぬ花粉症

西宮市 亀岡哲子

早々とつくし誰の子二月の子  
モンゴルも暖冬らしい旅ごころ  
花粉症お辛いでしよう主治医さま  
わが本籍の上で銀行合併す  
祖母真似て京都言葉で雛祭り

姫路市 古川奮水

カリスマのカットが活きる春の風  
雪消えて響く棚田の耕耘機  
音程を加減儲けるカラオケ屋  
自販機を出た缶ビール泡元氣  
忘れ雪山に目映い陽が昇る

兵庫県 大谷幸次郎

高飛車な税にマナーを教えたい  
釣り上げる小鰻さらさら波止に春  
磯に春金波銀波がキラキラと  
ひと言の招く誤解に気付かない  
にぎやかな栄転組のお見送り

奈良市 米田恭昌

故郷捨てても故郷の駅弁自慢する  
女系家族さんいつも人柱  
やっと自立たつぷりかじる親の脛  
スチールより森で育った木の机  
土壇場に立ちまだ見栄を張る男

奈良市 天正千梢

やせ我慢悲しい時も笑みで受け  
地にふして童話語るか落椿  
僕なんか粗大ゴミだよすねている  
謙遜がすぎ誇りまでうしなつて  
車間距離うまくとつてる夫婦仲

生駒市 飛永ふりこ

白いシャツしゃきつと春が満ちてくる  
ちよい悪の笑顔がいやにガキつばい  
熟睡すると自分を取り戻す  
夫婦ゲンカ猫が察してど真ん中  
逆光のまぶしさ浴びる春の海

橿原市 安土理恵

やきもちもちゃんとやきますフライパン  
晩学へゆつくりひらくれんげ草  
ひっそりと咲こう遅蒔きだったから  
自動ドアひらいて闇に落ちていく  
体当り君が心をひらくまで

大和郡山市 坊農柳弘

爽やかな温顔雨上がりの羅漢  
葉桜の誘いで泳ぐ鯉のぼり  
無口から饒舌になるコップ酒  
ストレスに耐えた胃の腑が酒を恋う  
人恋ゆる笑顔ほんのり花菖蒲

奈良県 渡辺富子

再起の風ペコちゃんの頬甘く撫で  
その内にはあちゃんポストでできるかな  
上り坂の景気へ期待するニート  
夜桜へ妻の横顔美しい  
妻の愚痴BGMとして眠る

和歌山市 福本英子

日常茶飯お詫びぐらいに動じない  
拉致問題すむまで貸借合いません  
生きすぎて千の風では追いつかぬ  
母さんの勿体ないがぼろの山  
目覚しにぴりっと効かす生姜湯

和歌山市 木本朱夏

切り張りのさくら障子も春になる  
張りのある声だ自信があるらしい  
西高東低 銀河が美しい  
逃げて逃げて必死に逃げて夢の中  
盛り付けて木の芽で味の句読点

和歌山市 喜田准一

反応がないから会話疲れます  
雑談の所々で出す本音  
もういいと心の中で繰り返す  
澄んだ水うまい空気で食えぬ過疎  
こだわっているから視野が狭くなり

和歌山市 田中みね

役付へ椅子もあなたも反り返る  
姉からの電話短く一通話  
個人的には支援してます国原氏  
なにが内気結構しゃべる人と見た  
イケメンの歯科医で行くの苦にならぬ

和歌山市 古久保和子

言い訳の下手な男の腹話術  
スプーンで潰すイチゴもお喋りも  
模様替えするたび増える釘の数  
一滴の朱から始まる水の乱  
おぼろ月今宵化けねば悔いとなる

和歌山市 榎原公子

迂闊でした風に見られていたなんて  
他人ばかりの街でアメリカンコーヒー  
束の間の春を乳液たつぷりと  
手慰みなんぞではない農作業  
大根の終いを洗う水は春

和歌山市 楠見章子

定期便の電話の向こうでハーモニカ  
春風をたんとはらんでいる蕾  
懐かしいコロンをかいだ春の街  
コーヒーはブラック気取りすぎないか  
お宝の壺に小銭をためている

和歌山市 玉置当代

財布の中でひしめき合っているカード

自律神経掻き乱される春二番

遊ばれて遊んで孫と小半日

柳誌から友の安否を確かめる

御心労お察しします美智子さま

和歌山市 松原寿子

脳からの指令へゲームまだ続く

抜け出せぬ迷路靴底あわてだす

胸張って思い通りの夢に酔い

生き残るためチャレンジの門くぐる

耐えてなお心ひらいてする介護

和歌山市 上地登美代

脳みそへおかしい敬語こびりつく

じんわりと親の意見も冷酒も

喝采の手はライバルにある嫉妬

猫の恋に加勢しているトタン屋根

迷ったら元来た道へもどりゃよい

和歌山市 細川稚代

亡き姉の命日ひとり経をあけ

歩きなさい歌いなさいと春の風

置ゴタツまだはなせない雛の宵

ケアマナーいつもの質問これによし

歩数計買ったまんまでねむってる

和歌山市 武本碧

甘言に釣られた耳がこそばゆい

たんぼの嘘ならきつと憎めない

鍋奉行喧嘩の種もつまみ出す

失言の椅子へ揚げ足まといつく

棚はたを神の眼鏡は見逃さず

和歌山市 松尾和香

苦も楽も笑顔で話す趣味仲間

生かされて学ぶ余生に虹かかる

趣味仲間競い学びの場を広げ

根性を笑顔で包む丸い背

挑戦の一步にかける写経筆

和歌山市 宮本三喜夫

時勢です老舗デパート店を閉め

春闘を横目に見てる小企業

裏金をつまみ食いして首飛ばす

政治家の杜撰な経理呆れます

飛び歩く年寄りの事故多すぎる

鳥取市 岸本宏章

付きを呼ぶ技も力のうちだろう

知らぬ子へ声をかけると逃げられる

がらくたのような家宝を捨てられず

無記名のアンケートには嘘がない

大リーグ日本人が賑やかす

鳥取市 岸 本 孝 子

分相応知って満足する財布  
手を抜いた分だけ倍の手間とられ  
記憶力怪しくなつて行く不安  
リズムよく家事をこなせる有り難さ  
食べ物と着替えを詰めて火事見舞

鳥取市 富 山 檳榔樹

華やかに散って見せませす姥桜  
念仏で睡蓮の花咲かせてる  
縄のれん男の愚痴がこぼれてる  
紺のれん板長の味染みている  
下戸なのににぎやか好きな親父です

鳥取市 夏 日 一 粋

お月さま都会のネオン見て嘆く  
つまらない話が明日の糧となる  
ほどほどに吠えて笑って引きさがる  
席順を下げつつ生きる術もある  
許すこと覚えて千の風に乗る

鳥取市 中 村 金 祥

税使う身には厳しい世間の目  
六カ国協議何やら怪しいぞ  
資金ぐり二年前から指を折る  
メールでは素直にゴメン言えますね  
鉄くずが金になるから狂いだす

鳥取市 植 田 一 京

回り道ばかり重ねて歳をとり  
飼い猫とあくびしている春の午後  
生きているしるし年金貰つてる  
ほんのりと酔つて桜の美しい  
縄のれんくぐつて今日をしめくくる

鳥取市 春 木 圭 一 郎

身の丈に合った生き方しているか  
新年度やるべきことを変えてみる  
欲や見栄捨てればお金そう要らぬ  
理不尽な世の中なれど生きてやる  
現世はいい仲間いい日和

鳥取市 福 西 茶 子

アンマ機に今日いちにちの愚痴を吐く  
六カ国またジョンイルのひとり勝ち  
初恋の味は真水のようなもの  
禅体験してから僧が偉くみえ  
知らぬ間に過ぎてしまった更年期

鳥取市 録 沢 風 花

古い殻破る若さが小気味よい  
検査値がよくてお薬ひとつ減り  
オアシスの銀杏並木も芽吹きだす  
少しでも歩きたいからゴミ出しに  
これ以上縮まぬように陽を浴びる

鳥取市 有 沢 せつ子

母の日は義姉に感謝の日と決める  
いろいろなさよならを見る春の駅  
親戚に久し振り会う叔母の葬  
若者の春を先取りした薄着  
二人乗るバスの採算ふと思う

鳥取市 近 藤 佳 子

たんぼの綿毛よ私を連れてつて  
花八つ手母をだぶらす雪あかり  
大の字になるげんげの田にころぶよう  
思いがけなくこんなにも生かされる  
有難うの顔でお棺に入るべし

鳥取市 太 田 幸 枝

過敏性杉の花粉に悩まされ  
兄嫁が来てから兄がよく動く  
骨惜しみしない嫁です姑にもて  
長寿でも寝たきりだけはつまらない  
運勢は出合った人の良し悪しで

鳥取市 奥 谷 彩 子

唇を噛んでつらさに立ち向かう  
古希の坂自分探しの旅続く  
足鍛えなんなく越えた古希の坂  
太鼓たたくと笛吹く妻がいてくれる  
不揃いの糸撚り合わず夫婦布

鳥取市 福 田 登 美

美しく老いたし心穏やかに  
年輪にプラス思考の紅を引く  
明日のため今日を大事に生きている  
人情と義理の間を立ち泳ぎ  
優しさに触れて孤独が癒やされる

鳥取市 永 原 昌 鼓

退院の近い患者は賑やか  
退院の土産は葉どつさり  
ゲレンデにキャンセル続く雪不足  
暖冬で出番なかった雪女  
暖冬へしつべ返しは水不足

鳥取市 杉 本 孝 男

一番弟子破門覚悟の物申す  
輪の中でもがき続けている個性  
加齢現象ですと腰痛あしらわれ  
立ち止まる勇氣も欲しいいまっしぐら  
脱税のスリルはきつと付けがくる

鳥取市 福 島 庸 二

音読に前頭葉が目覚ます  
冬タイヤチェンジ惑わず寒気団  
いつまでも青春ごころ止らない  
琴線に触れて高鳴るピアノシモ  
猫の手も借りたい時の助け舟

鳥取市 宮 脇 道 子

儘ならぬ臓器増えます老いの日々  
老い同士しくじり話題盛り上がる  
沢山のポケットもって楽に生き  
山笑う麓の桜子等を待つ  
肩の荷を落しきらきら生きたいな

鳥取市 武 田 帆 雀

美しい日本で遊ぶ花の宴  
熱戦の火蓋切る前水を飲む  
冗談が得意で鬼を鎮めてる  
少子化へ子供御輿の出ぬ祭  
勝ち馬に乗って信号赤が無い

鳥取市 田 村 邦 昭

花粉症ところかまわずくしゃみせき  
貧乏と孤独ひきずりひとり旅  
手伝ったつもり実は邪魔ばかり  
知った振りしてあげた手がおろせない  
ゆるやかな道を選んで争わず

鳥取市 田 中 憧 子

体重の増加ある時期からは無視  
蕪食べて葉も花までも食べ尽くす  
顔を見て声かけられるシニア割  
老いてなど居られぬ父は母の世話  
好物のカレーもさすが三度まで

鳥取市 吉 田 弘 子

春ですね白いマスクとすれ違ふ  
昭和史を支えた団塊いぶし銀  
妻役と祖母役こなす古稀の顔  
本人は本気なのです夫婦ゲンカ  
歳かしら思い付いたら即行動

鳥取市 西 川 和 子

薄味を嫌い降圧剤を飲む  
何時からか過敏になってアレルギー  
百段のてすり頼りに寺詣で  
石段の横を車で寺参り  
塩分に過敏になつて来た味覚

鳥取市 加 藤 茶 人

貧乏も見方変えればまた楽し  
時は金半額シールまで粘る  
あり余る金が生んでる罪と罰  
棺おけに入るまで気になる子供  
財産がないので喧嘩せずすみ

鳥取市 平 尾 菜 美

自信へと守り続ける十八番  
阿修羅の矢受けて嘘つき大変身  
礎を支え続けて裏年表  
愛着の土に我慢を振り絞る  
上みたり下みたりして人の道

鳥取市 山本 益子

賞味期限なく女の婚期は永久に咲く

耳掃除ウグイスの声聴く準備

ホワイトデー大きな箱のもどかしさ

見直そう腸内美化へ先ず野菜

地産地消 宴の膳に自慢出る

鳥取市 土橋 睦子

老いたなと互いに認め従兄弟会

茶柱を信じて飲んだのは昔

反応がにぶくて早速動けない

梅林で機嫌よくなるワンカツプ

草萌えて遊び上手な爺と婆

鳥取市 土橋 はるお

病んで見りや頭がさがる事ばかり

たばこ止め手持ち無沙汰になりました

酒飲みになろうと努力しなかつた

難聴で嘘も内緒もばらしちゃう

パトカーに捕まり会社遅刻する

倉吉市 松本 よしえ

情報の疾さに右往左往する

疾患もチヨコチヨコあるがまあいいか

フィリピンの出稼ぎが来る介護園

あれこれと引かれ年金瘦せて着く

五十年柱時計が鳴る深夜

倉吉市 野口 節子

手卷ずし母の心が埋めてある

熱かんがお疲れ様と声かける

春帽子すっかり女らしくなる

玉ころがしに青春してるおじいさん

聖人も弱みの一つ二つあり

倉吉市 最上 和枝

花泥棒きょうは我慢をしておこう

朱書した評を一言欄の外

空欄を埋めるパズルが進まない

アルバムを捲れば母が声掛ける

唇を噛んだ悔しさバネにする

倉吉市 山中 康子

早速へもたもたしてる空模様

病んで知る家族ぐるみのエネルギー

携帯でヒット生れる世にはてな

一徹な石のお守りはちと辛い

賑やかな葬儀おのれをあてはめる

倉吉市 牧野 芳光

水張れば空はしずしず降りてくる

口下手な波が時々荒れている

あれもないこれもないけど我家なり

人生はみんな違ってみな正解

言い訳のよう木を植えるコマーシャル

倉吉市 山本 玲子

桜が咲いて放浪癖が目を覚ます  
地球儀をくるくる回す旅プラン  
口約束忘れることが多くなる  
どの部屋も時計と暦だけはある  
やわ肌に見える女の肝っ玉

倉吉市 猪川 由美子

必要とされる存在生き甲斐に  
完璧と真面目さ過ぎて病いへと  
風水で管理バッチリ幸掴む  
逆も真鈍感なのも必要だ  
国会中継良識の無さ晒け出す

倉吉市 米田 幸子

終着駅に疲れた貨車が眠りこけ  
私も山吹色がいっち好き  
何時何があってもおかしくない命  
おかしいと気付いたときは左前  
何時までも生きて憎まれ口叩く

米子市 政岡 日枝子

手をつなぐ知恵を持つてる老人会  
ずしんずしんと老いの肩にも税が乗る  
尻尾丸めて珈琲店の女たち  
いつまでも私を咲かす水を呑む  
弟の水は途中で枯れ果てた

米子市 光井 玲子

息災で力まず歩み夕ぐれる  
日々満足感謝しながら米を研ぐ  
急ぐ事もなくなりほんに間が抜けた  
時々呼吸が乱れ老いを知る  
油断すれば私は呆けになります

米子市 野坂 なみ

一年生まだ遅咲きでいいんだよ  
葉芽花芽だれも持つてる一年生  
暖冬の暗示魚も知っている  
一滴の金利値上げの目白押し  
駅弁もいけど母の手弁当

米子市 中井 ゆき

春が来るポテポテ落ちる雪の音  
なるようになるさと小石けりながら  
芽出しからやさしく話すチューリップ  
私を親と信じる犬といふ  
虫達は花粉まみれのキューピッド

米子市 門脇 晶子

借命を大事にしても先が見え  
呆け防止豊かな話題待っている  
乱れをみせぬ亡母の衿首ふと想う  
ふところにあなたかいた風抱いて春  
河の向こうにかすんで見える岸がある

米子市 白根ふみ

針千本イカが傷つき泣きじゃくる  
告白に隠し味ほど嘘を盛る

にぎやかに団塊送りつまされる

色づいた蕾に明日だあさつてだ

森にきてしみじみとする深呼吸

米子市 青戸田鶴

満足な一日過ごす花回廊

楼蘭のロマンたずねた旅だった

いたわりの言葉素直に受けとめる

白鳥が帰り淋しい公園に

談合も汚職もあきるほど聞いた

鳥取県 下田茂登子

過去の傷一つに不倫抱いている

葬儀屋が積立て金を取りに来る

タレントの知事が生まれてまた騒ぐ

八十路来て黄泉へ旅立つ資金ぐり

合併して過疎にはバスが来ぬまんま

鳥取県 蔵本悦子

赤い服着ちゃって春を跳んでいる

赤い紅引けば百まで生きれそう

何もかも許し大きな深呼吸

栄養を補い女返り咲く

許すたび女房の顔がでかくなる

鳥取県 深田俱久

邪魔だけはするな手伝いなどいらぬ

そうなると思えば夢も光り出す

パンチ力持つ嘘だから頂こう

啓蟄の雪大山が息を吹く

バレバレの嘘が雰囲気やわらげる

鳥取県 竹信照彦

ウォーキングで見つけた土筆孫と摘む

寒の戻り野菜の芯は立ったまま

雪チラチラ途中で止める畑仕事

ビール党残り御神酒は料理酒

紅梅を桃の代りに挿す節句

鳥取県 谷口次男

情報をゴミから拾う夜明け前

無果実が花を咲かすか温暖化

ありがとう一期一会という絆

殺人のニュースは避けてパツハ聴く

格差から俺の細道ゆく財布

鳥取県 盛田夢路

クーリングオフやつと今夜は眠られる

人間のせいだと地球吠えている

でたらめも世辞も舌から滑り落ち

バトンタッチ我が家は若い風が吹く

三段跳び冬を跨いで春が来た

鳥取県 山下節子

恥かいた数だけ自信ついてきた  
言い訳すると疑いふくれだす  
疑いがはれた後でも腹が立つ  
嫁姑孫の育児でぎくしゃくす  
妻つくる食事疑いなく食べる

鳥取県 石谷美恵子

頭ではわかるテンポが歌えない  
てのひらが乾いて句箋めくれない  
出不精な夫へ旅行の好きな妻  
五人分平等に切るむつかしさ  
価値観の差で平等が揉めている

鳥取県 佐伯やえ

春風にのってひよっこりごんたくん  
親孝行してるなごんたいい笑顔  
急行止めた時のごんたを忘れない  
ケイサツ署での土下座今では笑い話  
人思いやる人間らしさ秘めている

松江市 銭山昌枝

また二キロ減ったわたしが洞み出す  
一ヶ月先のわたしが覚えて来ぬ  
鳩時計からくり時計お静かに  
自転車漕ぐ練習も風呂の中  
伴侶とは何とやさしい響きだろ

松江市 三島淞丘

万物が萌えて五体の血が騒ぐ  
人の字で凭れあつてる若い二人  
年金へ積んでは崩す旅プラン  
お土産はないが旅情を持ち帰る  
旅を終えやつと寛ぐ出雲弁

松江市 佐野木みえ

スカーフが心地よい風誘っている  
もういいかい地下でつくしが呼んでいる  
パソコンをお供に春の里帰り  
椿の実ころころ出逢い待っている  
絵手紙の赤が一番先にきれ

松江市 小川注湖

退職金孫子殖やせぬ世に生きる  
手を出すまいほのぼのと見るそれでよい  
少子化に孫三人は鯉と雛  
神様に運の分け方あるようだ  
よその子を叱ってわたし叱られる

松江市 安食友子

無駄なんて言わないでくれ目移ろい  
万物も羨むだろうオーロラよ  
曾孫からアンパンマンの歌ならう  
モデル並み細くなつても寸足らず  
外出時点検箇所をとなえませ

松江市 松本 知恵子

一時の別れ白鳥北へ発つ

冗談が本気になった春のウツ

名譽欲捨てた男と話し込む

陽だまりに集まってゆく弱き者

欲のない顔が揃ったポランティア

松江市 津川 紫 晃

不器用に生きた同士の助け合い

積み過ぎた本音はかせているグラス

夕焼けの海でシナリオ泳がせる

もうないか税金控除の領収書

この橋を渡れば元に戻れない

松江市 川本 畔

夫婦の会話寿命には触れないで

大雑把小刻みにするわが身体

斜めから死角からみていい笑顔

まだまだ生きるそんな気のする交差点

タクシーは根掘り葉掘りと聞きたがり

出雲市 園山 多賀子

長生きの相老斑をいとおしむ

白地図に夢が描けない卒寿今

耳聡い女噂の種を蒔く

酸欠の部屋に溢れる春の風

雁首を並べて鳥合の衆と言う

出雲市 伊藤 玲子

俯いた水仙に逢い声かける

猫柳コートを脱いで春を待つ

亡き母の笑顔ちらつく桜餅

師や友をつぎつき神は召し給う

声出して胸のつかえを吐き出そう

出雲市 城 多喜

木枯しに乾いた心叩かれる

結構な話は耳を掠めただけ

きりきりと今日を戦う襷がけ

悲しみを零す手のひら薄くなる

ひとり膳目刺し二匹とお味噌汁

出雲市 富田 蘭水

生きるとは凡夫の肩に重すぎる

せめて夢咲く日余生の一ひらに

今生きる明日は知らない有難い

欲大事凡夫のさだめ命です

宅配に印つく瞬間子にかえり

出雲市 吉岡 きみえ

方言でしゃべるとかわいはずも弁

晩酌のちびりが美味いふきのとう

老体に鞭打つ鞭はゆるくする

人なんてみんな孤独だちぎれ雲

春の宵あまくせつない日記かく

出雲市 石倉 芙佐子

雲と雲の間に一直線の夕陽  
美しい夕日拝んで唯ひとり  
囂らずも冷たい素顔見た一瞬  
旅の果て泣いて笑うて八十路かな  
長々と見果てぬ夢のつづきなど

出雲市 小玉 満江

ハンモック揺らしてくる人がない  
詩吟派と演歌派それぞれ味競う  
うららかな公園弁当広げましょう  
こぼれ種春を忘れず笑い出す  
風邪ひくと玉子飲ませる母だった

出雲市 岸 桂子

花咲けば哀しいことも思い出す  
振り向けばよく飛び越した水たまり  
竿売りの声ゆつくりと移動する  
正直に馬鹿のつく血をもらい受け  
生きざまのままに飢えてる影法師

出雲市 森 茂美

暖冬に誘われ古い友が来る  
春草がもう伸びている庭の隅  
機械です油差さねば壊れます  
水槽の緋鯉は十二単衣です  
老いの坂破れた恋の懐かしく

出雲市 佐藤 治代

見て歩くだけにしておく春の服  
腰痛の腰を庇って立つ厨  
内科から整形泌尿器科はしご  
戻り寒ひらいた花も震えてる  
命とや三度のメスで生かされる

出雲市 多久和 敬子

ふる里に思い出眠るたまご飯  
充電を終えてちよつぱり背伸びする  
切干しがほど良く乾き今日の幸  
二三日晩酌止めて威張ってる  
マネキンの服うきうきと試着する

出雲市 小豆澤 歌子

仮の世の約束事はもう止そう  
ぬるま湯に浸り雑音避けている  
エステなどもう間に合ぬシワの数  
野菜煮を飽きずにつつく箸の先  
さらさらと本音を零す砂時計

出雲市 小白金 房子

読めぬ軸褒めて抹茶の香に和む  
荒れる日もお世話になった渡し舟  
説法へ誘われ春の寺まいり  
側に居る頃はよかつた子の笑顔  
一年を通す野良着の温かさ

出雲市 持田 多輝子

倉敷市 撰 喜子

禁煙で机上に灰皿置かぬ主義

リストラもストレスもなく農に生き

老醜を見られたくない露天風呂

一粒の種にも温い生命抱く

雪割草母の好みの彩で咲く

雲南市 毛利 幸

送別の言葉涙で絵にならず

なんとなくひそひそ話に耳が向く

目刺し焼く庶民の味に包まれる

欲出して掴む幸せ瓦解する

休日はあれやこれやと足が飛ぶ

島根県 伊藤 寿美

ポケットに入れた内緒が飛びたがる

継ぎ当てたところばかりを狙われる

似た者同士片割れ月が温かい

海馬に喝入れて指折る五七五

古里は独りのわたし包み込む

岡山市 井上 柳五郎

半生も罹るドクター廃業す

描くを消すいたちごっこの落書だ

仕舞う場所変えて忘れて探したもの

たった今話していたの失語症

我が家にもいのしし娘定年に

医者通い今日も元気に手をつなぎ

靴下の穴に安堵する私

好奇心むきだしに追うスキヤングル

点と点つなぎ自由に生きている

送り状持ち夏休み孫が来る

真庭市 国米 きくゑ

妻の歩で時に手を引く散歩道

一日の一步へしゃんと背を伸ばす

捻子ゆるむ五体にやさし春の風

春風に浮かれ音符が躍りだす

車椅子押す強い絆の夫婦道

真庭市 福嶋 智恵子

歳忘れルンルン気分車買う

新車にはシルバーマーク可哀想

慎重に掛けた保険の高いこと

車替え面映い気で友誘う

草草に選挙の匂う握手する

美作市 小林 妻子

写経千巻そなたやすいことでない

折り返し点はとづくに過ぎました

ゆらゆらと残り時間の指を折る

木蔭選る妻と棚田の昼ごはん

子や孫に美味い棚田の米作り

美作市 山本玉恵

狐こんと哭き野火走るあのあたり

お招きにあずかり妻のおちよほ口

思ひ出を一杯詰めた玉手箱

大切な話切り出せないままに

戻れない道です傘の半びらき

美作市 福原悦子

温かい手に溜めている花の種

なめらかな話術に酔うた落し穴

少し斜我が人生の舟を漕ぐ

人肌に触れると深い人間味

人生の余白で溜めた夢がある

美作市 大石 あすなろ

お手つきの多い舌をたしなめる

ジャンプして骨の悲鳴を耳にする

振り出しに戻って靴を買ひ替える

言い訳の山を築いていませんか

家計簿を少し粉飾してみるか

竹原市 岩本笑子

春の海今日も泳いでいる魚

三月の雪へ泣く人笑う人

開花予報桜の知ったことでなし

同い歳のガンをテレビで知らされる

真夜中の夫のいびきが止んでいる

竹原市 石原淑子

吉報の子感膨らむ電話口

春の陽へ花芽も孫も翔び跳ねる

ひとこと一言に母の愛滲む

ふたありに戻り夫に恋をする

心地佳い目覚め翠の風の中

竹原市 時広一路

背しゃんと伸ばそう五つ若くなる

片手では足りぬ病名にも負けぬ

目も耳も鼻まで僕に背き出す

神様もなされていそう四捨五入

何年になるやら職業欄無職

東広島市 福島万年

川柳を載せた教科書褒めましょう

三時には紅茶の香り妻の笑み

教壇を降りて次なる面を彫る

お念仏よりもあらたかお賽銭

どこにでもついて来る人ありがとう

美祿市 安平次弘道

達筆な筆で過去帳書いてます

病院の裏で挽歌を組み立てる

美しい過去は誰にもありません

水やって花の命をいとおしむ

取柄などないから先に死ねるのだ

東かがわ市 清川玲子

電線でデートしているカラス二羽

伸び過ぎた枝電線が顔しかめ

一杯の水に命がよみがえる

冬至にも水位落ち込むダムのうつ

今日の幕ひいて袖湯にひたる幸

東かがわ市 川崎ひかり

三月になると華やぐカレンダー

エイヤーとにらむ魚の首はねる

弥勒仏なんと優雅なもの想い

内心の怒り静める熱いお茶

大切にされて笑顔で咲いてます

東かがわ市 原賢

倅せのルーツは二人でかいた汗

もう少し歩こうきれいな夕茜

非常口見付けておいて席につく

意識なく母は十年生きつづけ

深追いをすればするほど落ちる穴

東かがわ市 池内かおり

玄米も雑穀も飽き白ごはん

夫の留守茶漬さらさらテレビ漬け

見えすぎると眼鏡はずして逢いに来て

金本さん負けたらあかん花粉症

人混みでたつぷり吸った排気ガス

東かがわ市 伊勢八重子

虫食いの野菜で安心お墨付き

ごめんねと一言言えば済んだ仲

度忘れを笑い飛ばして今日も暮れ

いい仲間心の窓は開けて待つ

恙無しおいしく食べてよく喋る

松山市 高橋宏臣

傷口へ遠慮をしない丁寧語

淋しさを埋める宛名のない手紙

裸婦の絵に少し質問したくなる

余命表指は折らないことにする

まな板を時々晒すそんな幸

松山市 古手川光

雪積るこの世を浄化するように

ランドセル見知らぬ顔へ貝になる

産児制限言うてた頃もある日本

終の地は故郷と決めてUターン

芋たこなんさんあの大坂がなつかしい

松山市 宮尾みのり

お見舞へ季の移ろいを見せぬ花

放つとかれてからは金魚も生きのびる

ポコちゃんも確か不二家に居ったはず

ペーターベンもシヨパンも睡魔連れて来る

妥協したとたん体の芯も萎え

大洲市 中居善信

お喋りの妻へふんふん言っている  
側に居るだけで楽しくなる人と  
肝心なところは惚けるはぐらかす  
ジャガイモの種を選ってる春二月  
ひよっとこの面は踊ってばかりいる

西予市 黒田茂代

暖冬の雪像汗をかいている  
結晶の阿寒の雪と戯れる  
木彫人形百態に会う阿寒の夜  
断食の裸木春を待っている  
猫だって言うこと理解してるんだ

高知市 小川てるみ

許し合う心ひとつがない波紋  
運命と軽い言葉を返される  
裸木にはなれぬ私の羞恥心  
時々狂う私の目分量  
お返しのためごっこが止められぬ

高知県 赤川菊野

朝刊へ悲しい記事が多すぎる  
夢を盛る器だんだん小さくなり  
もう少し此の世の旅をつづけます  
百までも生きたら私どないしよう  
十年がこんなに早いパスポート

高知県 小澤幸泉

しがらみを付けてかわいい老夫婦  
預金高母の涙が溢れだし  
愛憎の果て知り尽くし棺笑う  
胸痛に酒と他人を知らされる  
日溜まりのここだけにある青春の夢

唐津市 久保正剣

おむつからおむつで終る一代記  
大部屋で耐えているのは芸の虫  
ホワイトデー睨んで孫が福祉チョコ  
格式はいらぬ飯場の欠け茶碗  
いそいそと出かけすごすご帰る句座

唐津市 樋口輝夫

Vサインさせて傘寿の妻を撮る  
古写真、喜怒哀楽がよみがえる  
羽があるように諭吉が飛んで行き  
眼を閉じて羽ばたく気配ないニート  
子育てを果たしゆつくり翔んでます

唐津市 市丸晴翠

ラブレターにけじめをつける文供養  
もう八十まだ八十の峠茶屋  
祖母が出す鮎と鞭とで子が巣立ち  
アンテナが曲り善意が届かない  
エンドレスの愚痴が今夜の子守唄

唐津市 宗 水笑

遺伝子に感謝と不満身勝手に  
作者不詳だからなお良い千の風

野仏の慈顔を荒らす酸性雨  
路地裏で卦を見るさだめ占師

腹巻きの小銭が温い朝市女

唐津市 井上 勝 視

小遣いを僕の年金から貰う

財布だけは老妻に持たせて置けば良い

無言劇一日もたぬ老い夫婦

省略に馴れて阿吽の老妻という

知らんぷりで晩酌の量見てる老妻

唐津市 坂本 蜂 朗

子育てと同様犬もひん曲げる

貰い慣れ期待に変わる付け届け

頭なせられて先生好きになる

小言いう妻に背を向け涙をかむ

軒下に紫煙たなびく吹き溜り

唐津市 山口 高明

善根をつんで天国行くつもり

八頭身の美人の定義まだありや

腹が立つ百円ショップの消費税

鬼の面被った父が足挫く

先導の白バイオシッコしたくなる

熊本市 永田 俊子

こんにはと杖よろこばずランドセル  
何より怖い子供の人さし指

追いかけて心配してくれる忘れ物  
いい方に解釈をしまあいいか

背伸びして足踏み外したこと言わず

熊本県 高野 宵草

母性愛する重湯の塩加減

お笑いが消えたらウツな世に返り

パチンコもカラオケも好き庶民です

手術する説明ちよつと脅かされ

補聴器を外し思考の寂に入る

熊本県 岩切 康子

親切な友に感謝の習い初め

思い返せば亡母に沢山教わった

はるばると流し湯真昼のいい気分

足の裏いとおしんでる風呂上がり

早合点また反省をしています

シドニー 坂上 のり子

皆違うその違いこそ生かさねば

アリバイにならぬ誰にも会わない日

品のいい白髪の方に憧れる

髪染める染めない染める未だ迷う

軽やかに舞う夢を見て買った靴

平然を装うている年の功

黒石市 佐藤 古拙

雪のない津軽の冬を神に問う

少雪に首をかしげる古老たち

春のゆき親のかたきとばかり降る

最敬礼している方が偉いかた

黒石市 相馬 一花

ネクタイと背広で騙す古狸

不都合なことは伏字にする日記

うきうきの二人にかけ紙吹雪

宴から飲まずに逃げてくる勇氣

いそいそとあひる歩きの裾模様

十和田市 阿部 進

ありし日の母にそっくり我も古稀

何時の日かきつといい日がかかるだろう

子の笑顔見てほっとする老いの顔

手を振って見送る母はさびしそう

飛び出すと走る車がかみつくぞ

平川市 小寺 花峯

一所懸命生きるアクセル踏み続け

燃え尽きるマツチに余命問うてみる

まだ見えぬ未来を指でこじあける

ご近所の噂話をカラス食べ

財産のひとつになつて笑顏

不揃いの野菜他人と思えない

黙祷がない若者のクラス会

高齢化少子化自動車は減らず

栄枯盛衰敗者が群れる喫煙所

前向きな人と話すと疲れます

弘前市 福士 慕情

お見舞いへマスクも置いてある施設

病室のベッドぼつんと空いている

口唇を読もうとしても解らない

痩せ細った手足は骨の形して

別れ際一瞬くもる姉の顔

弘前市 今 愁女

良かったはずの暖冬なにや怖くなる

猿の群れもマスクがほしい花粉症

いい湯だな猿はちやつかり露天風呂

訳もなくいのち奪った癌の奴

夫子孫残し先立ついもうとよ

弘前市 岡本 花匠

春の匂苦味に鋭気貰い受け

日溜まりの庇護をよるこぶ老い二人

ひらめいた機運に乗せてペン走る

巣立つ子へ声援贈る津軽富士

ヒヨの来て花芯を覗く愛しい瞳

弘前市 須郷井蛙

さいたま市 八田敏

赤ちゃんをほめられに行く市場籠

止まるたび土産が増えるバス旅行

下請けを苦しめ利益一兆円

温暖化明日の空が怖くなる

バイキング腹八分目忘れさせ

弘前市 櫻庭順風

さいたま市 星野育子

えんぶりを心ゆくまで楽しんだ

リズム軽快引つ張られてゆくえんぶりが

一斉摺りに魅了されとけてゆく

かがりびの幻想的に浮く至福

舞踏の世に引き込まれゆくえびす舞

弘前市 宮崎ヒサ子

日高市 根岸方子

暖冬で街ゆく人も春を着て

ウインドーを見ながら直す前屈み

春の気分邪魔するように花粉飛ぶ

凧上げに熱中してるのは大人

春色のセーター今日も街へ出る

弘前市 相馬銀波

柏市 河野桃葉

春からの予定はいつも省力化

丸投げと丸抱えとか人は人

真冬日が三月だから身構える

歪に追憶語る顔が浮き

挑戦と言えないまでもストレッツチ

暖冬の土産にきつい春の風邪

診察券ばかりになった名刺入れ

この歳でまだ夢捨てず土いじる

評判の医者覚悟して受診する

頸椎の手術平気と痩せ我慢

さいたま市 星野育子

言い訳は前例無いと認めない

お仕事は好きか嫌いで拒否出来ぬ

口下手で無口が隠す爪を持つ

アナログとデジタルの間で右往左往

佳境に入れば続きは有料に

日高市 根岸方子

デパートで駅弁を買う妻の贅

借景が描き直させる設計図

純綿のシャツ春風に恋をする

バラ展の香にむせる倦怠期

見栄捨てた素のあなたから学ぶもの

柏市 河野桃葉

帰省した息子困んで夜が更ける

青春を捨てる想いで古着捨て

弱点を笑顔に包み生きている

我慢する強さを同居から学ぶ

嫁姑鬼も仏も棲んでいる

柏市 永峰 宣子

マラソンのゴールコーチに抱きつかれ

園芸の手順早める温暖化

私に買う瀬戸焼の内裏雛

歌麿の絵の紫に引き込まれ

無言劇そろそろ止める春の朝

佐倉市 岡井 やすお

五か国は頬かむりしていたい拉致

言い逃れ出来ぬ証拠を掴め拉致

ミサイルも呑み込んでくれ鯉のぼり

格差なくなったら困るのは議員

格差は進む爆発の日が怖い

国分寺市 野崎 勝

心臓が強くても出る不整脈

干し芋に日差しの香り咬んでいる

無事だった今日へザァーザァー湯をかぶる

また転び運動不足知らされる

生ゴミの収集日だと飛び起きる

八王子市 播本 充子

全快の目線がぐんと高くなる

数日を病んで重たいゴミ袋

おざなりを聞いているブランドのスーツ

不本意なスコアも本日の主役

しゃかりきになって冷たい視線浴び

武蔵野市 亀井 円女

日本語を正しく話す人が好き

おいメシフロじゃと一度は言うて見たかった

八十路でも口はまだまだ現役さ

ニコラデのギターねるまで雨止まず

車椅子心静かに春を待つ

東京都 岸野 あやめ

平均株価ちんぷんかんで御座います

愛と恋どうぞ錯覚されますな

給食費払わぬママのルイヴィトン

商店街シャッター閉める六時前

三姉妹順に嫁ぐと限らない

東京都 長谷川 康子

わたくしも定年ですと妻の乱

夕飯の支度遅らすミス터리

遺言書書き直すゾと祖父の乱

悪質が我が家の門扉まで狙う

花粉症泣き泣き駅に辿り着き

東京都 清原 悦子

ふる里の川の鮮度が空映す

慰めるつもりで聞いてもらい泣き

失敗をするたび思う今度こそ

押し入れの掃除をしたい五月晴れ

赤ちゃんに笑顔返され皆笑顔

東京都 小川 賀世子

花の旅京都にピント合わせてる

杉花粉か風邪かクシヤミがややこしい

春風に敏感なのは低い鼻

三回目の春東京もまたたのし

カタカナの花に埋もれてここは何処

横浜市 小野 句多留

霊峰よ十七年を有難う(山小屋売却)

売った金なんに使うの姦しい

初心者はマウス探してまず疲れ

笑うとこ違うと談志文句いう

都知事にもかげり選挙が面白い

横浜市 菊地 政勝

ネクタイを取って失う忠誠度

年金の枠で静かに生かされる

別嬪に撮つてと妻が無茶を言う

やさしさがいつもと違う下心

雲行きを怪しくさせる捨て台詞

### お知らせ

平成19年7月1日に同人名簿が発行されます。

住所・電話等変更のある方は至急事務所までお

知らせ下さい。

## 温故知新

尼崎市 水谷 鮎美

停年の間近に男の子が生れ

おんな病みながら桔梗の水を替え

横浜市 福田山雨楼

七十九不老長壽の大使なり

われ無理を愛したり身のおきどころ

大阪市 丸尾 潮花

金の世と悟れば愛もみずくさい

君と呼ぶひとあり死ねぬなど思い

「川柳雑誌」麻生路郎主催  
三一九号(昭和二十八年十二月)

## 特別常任理事会開催

日時 6月7日 13時〜16時

会場 アウイーナホテル3階 桔梗の間

案件 同人誌友の現状について・意見交流・その他

参与以上の役員は御出席ください。

# 川柳塔の

## 川柳讃歌

29

木津川 計

一秒の中に舞く金銀銅

池 森 子

水泳でタツチの差、競馬で鼻の差という瞬時の、刹那の早さで序列が決まります。早さは競われても遅さが争われることはありません。人の世は「早い者勝ち」で、国語辞典には「人より先に物事に手をつけた者が多くの利益を得ること」とあります。老人の出る幕ではないのです。厭な時代になりました。

僕はIT革命についていけず諦めて、滅びしものに安らぎを見出しています。「かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものとはなつかしきかな」(牧水)。森子さん、僕と歩調を合わせ、ポチポチ行きましょ。

背をのびし休める鋏に赤トンボ

長谷川 春 蘭

田園の長閑な風景です。なんの争い事もありません。赤トンボが長く休めるよう春蘭さんは身じろぎもしません。やさしいところが

赤トンボに伝わったことでしょう。

僕は野良仕事に憧れます。こころ優しい渡世人の沓掛時次郎が述懐します。「ばくち打ちの親分になって贅沢するよりも、鋏もつて五穀をつくるのが人間の本筋だ」と。同感です。その余り、今年の二月、念願の「一人語りの長谷川伸劇場」を旗揚げ(?)しました。懐しの駒形茂兵衛、番場の忠太郎、そして沓掛時次郎を語り始めたのです。

近頃は伊達や酔狂で生きている

谷 口 義

義さんの気随気儘な生き方です。普通は「伊達や酔狂で生きてるんじゃねえんだ」と否定するのですが、義さんは風の吹くままです。働き詰めに働いて、やつと辿りついた「伊達や酔狂」の境地です。同人諸賢に申し上げます。義さんの来し方に習うべく、只今の粋と風狂な生き方をこそ切に羨むべし、であります。さすれば僕の「長谷川伸劇場」も義さんのように道楽の極みとすべきかもしれません。

安売りも出来ず売れ残りのいのち

小 林 妻 子

哀しいけれど川柳らしい句です。買い物は男で女は売れ残るのです。そんな差別がいつまで許されるのか、妻子さんのつぶやきです。

こころは、値下げをしなかった妻子さん、あるいはミスXの気概こそ称えらるべきでありましょう。生涯の独り身は、しかし、因われざる自由人の生き方です。楽しみながらの人生です。

物に囲まれ生きている不幸せ

最上 和 枝

資本主義は不必要なものを必要と思わせ買わせるのです。欲望の絶えざる肥大化を促さねば倒れる経済システムです。和枝さんも不幸のどん底に突き落とされた犠牲者です。

宮沢賢治はいま甦らねばなりません。「欲ハナクノ決シテ曠ラスノイツモシツカニワラツテキルノ一日ニ玄米四合トノ味噌ト少シノ野菜ヲタベ」：昔から疑問でした。宮沢先生、玄米四合は多過ぎませんか。

自動ドア開いて一人広すぎる

高 橋 宏 臣

察するに宏臣さんは恐れ入って暮らしているのです。ゆったりと広い空間を肩をそびやかして入る人物もおれば、一人の僕にはもったいないと、むしろ肩をすはめて入る人もいます。世の中こんな方はかりなら、省エネは進み、持続可能な地球に近づくのですが、自動ドアにも人数を数えさせたいですね。

「上方芸能」誌代表

# 自選集

両川洋々

風と契つて天女が春を産み落とす  
天罰かわたしコロリとなど逝けぬ  
倦怠期愛の残高ゼロだろ  
核ボタン押すな平和のハトが死ぬ  
ああニート君のハートも春ですか

阿萬萬的

その話聞きあきましたと妻の愚痴  
年毎にだんだん妻は強くなる  
なるほどとうなずくばかりメカ音痴  
無記名でも見栄はっているアンケート  
風邪気味でさっぱり浮かばないヒント

板尾岳人

人間の視野を遮る女郎花  
落日へまだ付いてくる影法師  
竹槍を作っています護身術  
逢えるなら男結びで急ぎ足  
人間も豆腐もべらべらよく喋る

奥田みつ子

ひとり旅ローカル線のいい出会い  
傷ついて人の痛みを倍思う  
春雨に心の髪が深くなる  
風の噂聞きたくないが耳二つ  
てのひらに転がしている詩ごころ

河井庸佑

名刹の庭に心が癒される  
限界と覚り思案の老いの坂  
森林浴じつと聞き入る鳥の私語  
言い訳がますます立場悪くする  
落ち着かぬ眼に腹を見透かさされ

川上大輪

風向きが変わると誰もいなくなる  
すべて人生天国も地獄でも  
宝くじ当たった話ばかりする  
雨が降る過去がどんどん遠ざかる  
三步目で狂い始めてそのまんま

木村 あきら

芽出度さは皇居の空に鯉のほり  
出目金の視界は三百六十度  
霧雨に濡れて鮮やか花菖蒲  
来る年に備えて植えるコシヒカリ（早期種）  
神苑が緑に映える五十鈴川

小島 蘭 幸

退職後は白紙のままでもいいのです  
カウントダウン静かにお茶を飲んでいる  
赤バイクは僕の分身だったのか  
赤バイクが走る私は歩いている  
予定表トイレに貼っておきますか

小西 雄 々

暖冬へ思い出す人雪見酒  
鈍行の窓にも春の雲流れ  
ライバルへフエイントで勝ち食わせ者  
控え目に知恵を貸したいバイキング  
夕張と同じ暮らしへ日記書く

小林 由多香

同窓会招く恩師がもういない  
団塊の男に日本支えられ  
一つだけ残った菓子に手が出ない  
ふくらむ芽開花予想をはずませる  
何もかもさらさら春の陽を浴びて

斉藤 姦

友達に逢いたくなくてポストまで  
ひっそりと森で充電しています  
流されてだんだん艶の出る小石  
しつとりと語れば樹々も語り出す  
本当の笑顔赤ちゃんから貰う

塩満 敏

川柳に励めと路郎師の声がした  
暖冬で日課の散歩しています  
一歩ずつ歩く距離を伸ばしてる  
孫娘大きな夢に飛翔する  
九条を守る輪大きくなりました

新家 完 司

鐘が鳴るこころの丘の時計台  
タグボートに曳かれて春の船が来る  
日曜の海は日曜らしい顔  
ひとまわり一年 地球という時計  
時計より空見ることが多くなる

田中正坊

同病が多いと知った医療記事  
年賀状きつちりと出す友だった  
戦争と平和を生きた友が逝く  
再会を約し別れたのに何故か  
送る人送られる人 南無阿弥陀

玉置重人

自転車によたよた乗っている不安

チヨイワルに撞れている野球帽

好きなもん食べよう飲もう八十路坂

トラブルはごめん下さい願不同

金婚譜パントマイムでこと足りる

恒松町紅

満開の花に悪いが花粉症

愚痴などは捨てよう春の風が吹く

故里は昔話が生きている

学歴はないが生き甲斐ある特技

案外な人に出逢った過疎の街

津守柳伸

露天風呂雨のリズムを三度笠

それなりの努力で若い森光子

満開へ自然渋滞高速道

春彼岸去年はツクシ摘んだ哇

こだわりは備長炭のおもてなし

遠山可住

眼科歯科血圧老いは順調に

町長で負け県会へ打って出る

むつかしいニュース八十路をいじめられ

美容健康昔の知恵が生き返る

烈士暮年ふるさとの土夢新た

都倉求芽

温暖化の波に浮かんでいる寒さ

北極の氷が溶けてくる 寒さ

軍事費がどんどん増えてくる寒さ

凶悪化の街から逃げられぬ寒さ

監視カメラの中で暮らしている寒さ

土橋螢

仲よしが行ったり来たりする並木

死ぬるまで動く時計を嵌めている

煩惱に油断をさせて寺まいり

あっさりと言めて笑って済む話

平凡にひとの真似して生きのびる

西出楓楽

古傷を撫でると痛みぶり返す

自動ドア軋みたい日もあるだろう

言うなれば漢方薬のような人

三食をきっちり食べている自愛

温泉のもとと温泉似て非なる

仁部四郎

セメントの護岸汽水も忘れられ

言葉尻とらえ汽水の意味も知り

義理の酒彼と汽水をつくりあげ

審議拒否それでは汽水にもならず

前文に汽水だからのありがたさ

波多野 五楽庵

眠れない妻をいたわるオブラート  
しがらみの糸は切れない風車  
礼拝堂西日がそっと覗きこむ  
晩闇が淡く残って春の音  
死ぬまでは生きていたいと言う矛盾

林 瑞枝

ふくろうの森の靈気に触れ歩く  
触角を伸ばして初夏の身を護る  
たましいの断片虹を手のひらに  
ハイウエイバスで夢のドラマを追うている  
にんげんの自然治癒力素晴らしい

宮口 笛生

縄のれん常連皆勤つづけてる  
酒が出て一率になる俺お前  
めぐみさんの映画北鮮見て欲しい  
妻先に死んだら困ることになる  
どっこいしょ椅子に座るも立つのにも

宮西 弥生

絡み合う絆で火傷しない距離  
何もかも白に戻した日の別れ  
このレール戻れば故郷の始発点  
失敗も悔いも重ねて発火点  
とんがった口だ愚痴が好きらしい

森下 愛論

日に一升酒を飲んでる孤独感  
散りぎわを未練に木偶の酔うワイン  
世渡りの下手な奴からの申す  
うまい酒胃の壁におく不幸せ  
残り火を奏でる赤いワイン色

八十田 洞庵

オンブズマン渦の深さを許さない  
シナリオを持たぬ男の顔が好き  
人形の魅力黒子の手が助け  
日蔭の愛すつきりしない日が続く  
古い家並みにきわだつ屋号重く生き

第52回「全国川柳作家年鑑」  
作品応募要領

- 句 稿 応募用紙あり(申し付けてください)  
作品7句新旧可
- 応募費 3000円 ジュニア 1000円
- 刊 行 定額小為替か振替口座  
平成19年9月下旬予定  
(参加者に年鑑一冊送付)
- 締 切 6月20日(水)消印有効
- 投 句 〒673-0046  
明石市藤が丘1-24-12
- 送金先 上原 翔 宛 TEL078-922-5494
- 郵便振替 00960-2-269928  
ふあうすと川柳社
- 応募資格 どなたでも可
- その他 エッセー(原稿用紙2枚)  
カット(葉書大)以内  
(採用はご一任下さい)
- ふあうすと川柳社 主幹 赤井花城  
全国川柳作家年鑑 刊行委員一同  
(参加者住所は市区郡のみの掲載とします)

# 水煙抄

奥田みつ子選

大阪市 岩崎玲子

母の夢見た日いち日弾む頬  
悩む日は亡母好きだった寿司作り  
嫁姑天下とらずに逝った母  
夫婦仲良かった父母をお手本に  
三姉妹今も仲よし亡母の愛  
母の子に生まれ嬉しいありがたいとう

八尾市 松葉君江

転び方知らず育った子の悲劇  
手抜きするコピーに脳が退化する  
趣味広げ一人で生きる練習を  
気にしない事も病気の予防法  
物言わぬ自然界にもあるルール  
満たされて心貧しくなる日本

東京都 井上つよし

荒浪を潜った顔の黒光り  
一寸の光陰重くのし掛り  
趣味の舟寄る年波に乗って行き

妻騙す嘘には利かぬ再利用

仲裁役買って出たのに火に油

金釘の投書に市長腰を上げ

立川市 柏野遊花

センスオブワンダー触れる春の森

いのちってこんがらがって繋がって

流されてふと気がついてつかまる藻

同じ傷もって同心円の中

順番に咲くカサブランカの律儀

空抜ける心の靄も透けてくる

和歌山県 森下よりこ

家の中までとても明るい月夜です

木登りが子供の遊びだった頃

心経を書き穏やかな一日に

考えてるうちにライバル先を越す

クラス会少し安心して帰る

泉佐野市 稲葉 洋

春うらら柱時計も遅れがち  
油断した愚痴に老婆の耳聡し  
生い立ちの殻捨てきれぬ戦中派  
年波が負の想像を駆り立てる  
満一歳泣いて眠って無垢の態

府中市 藤岡 ヒデコ

グルメよりお湯が馳走と思う旅  
道草に花咲く春がおとずれる  
快い一期一会のときめきよ  
恋心抱いて暮らしに弾みつけ  
理想図を少し外れた現在地

大阪市 三浦 千津子

弱点をやんわり包む亡母だった  
スランプも自分見直す充電期  
生き様を記した日記温める  
物忘れ割り切る事で気が軽い  
悔しさを揺すると涙零れ落ち

堺市 大久保 伸子

非常袋気休めつめて枕もと  
あきらめた心の奥でまだもがき  
耐えがたい弱者きりすてもうやめて  
有難う毎日言える幸がある  
ここ一番女は強くたくましい

鳥取県 岩崎 和子

シクラメン摘んでコップに咲かせてる  
千の風歌うと心澄んで来る  
沈丁花遠い思い出蘇る  
アスパラの青さを包みハム食べる  
春風に美容院へと押され行く

岐阜市 平野 あずま

卒然と義兄を攫った春風  
呼び掛けに黙す遺影をじつと視る  
生き下手の足で傘寿に辿りつく  
正直に馬鹿がついてて敵がない  
ペンを置き明りを消して今日を閉じ

今治市 塩路 よしみ

雛あられ女を酔わす白い酒  
ひとり言へ寝ていた耳が返事する  
香煙立ち夕陽に映える廻路笠  
傷心へ沙羅の白さよ一会とは  
追伸に火種は燃えていると書く

札幌市 三浦 強一

久々の出合いへ酒の潤滑油  
のんびりと行こう人生九合目  
紆余屈折あつて夫婦の丸い背  
喜寿だものもつと増やそう笑い皺  
父と子のキャッチボールに血が通う

大阪府 神野 千恵子

関節がスローテンポにしてと言う

真相を歪めることもある鏡

雲ほどの創造力があつたなら

少しか自分の背を押してみる

内裏さま昔話をしませんか

和歌山市 たむら あきこ

リフォームをしながら生きている心

装いに少し語らず主義主張

考えた場所あたまではないらしい

積み上げてわたくし色のひとりの座

ジグザグに生きて背中は見せている

大阪市 森田 明子

春風にそそのかされて濃いルージュ

気紛れな虫など待たぬ風媒花

イエスマン欲しくて犬を飼っている

ゆっくりと悲しんでから立ち上がる

へらへらと媚びる自分を蹴つとばす

和歌山市 根田 よしこ

髪染めた夫に妻は知らぬ顔

愛なんて言葉わたしにや似合わない

七回忌老母はあくびしもう泣かず

まだまだと頑張る老母が切なくて

ケータイを買えば私も飛べるかな

大阪市 中井 萌

ピカソ展鏡見るのが苦にならず

今日からはいや明日からダイエツト

にんまりの顔に答えが書いてある

孫七つ前歯が抜けた恋はまだ

聞かぬ振り息子が嫁に叱られる

横浜市 川島 良子

ボーイフレンドできて更年期が終る

ジャンケンボンハイ会長に副会長

仏滅に拳式特典プレミアム

個性派が揃って笑い止まらない

仲良しごっこ僕も貴女も淋しがり

和歌山市 田中 すす

雰囲気に吞まれてからの不整脈

向き合おうと恨みつらみが出てしまう

一日の区切りに鐘の音が冴える

家族だと思えば山河越えられる

たつぷり食べてたつぷりと寝て職探し

昭島市 野口 忠

4Bで心の内を太く書き

ピアピイピユピエピヨまだまだ舌はよく回る

夜半の風眠れぬままに指を折り

久しぶり名前は出ぬが先ず握手

有夫恋自由奔放新子流

札幌市 小沢 淳

一日が足りない人と余す人  
ユーモアのつもりが肺腑ついでいた  
いろり端酒が昔を語らせる  
最善を尽した握手美しい  
核持たぬ平和を誰と話そうか

取手市 葛西 清

渡らねばならぬ橋あり遠回り  
悔むこと忘れて背伸び喜寿の春  
禁煙を言い触らしすぎ仕方なく  
うちとそと妻の弁慶早変わり  
金婚式母の形見で指飾る

日立市 加藤 権 悟

早苗饗を祝う蛙の応援歌  
メーデーの祭典旗に覇気がない  
ふるさとの川に心の駅がある  
山紫水明ちち母過疎の土に生き  
田の神がアワダチ草を見て黙り

横浜市 巖 田 かず枝

料理屋に出してもいいと煽てられ  
胎教に良いと花展に娘を誘い  
見守ってくれているんだ千の風  
塩漬けにされても桜主張する  
暖冬に熊も蛙もとまどって

横浜市 長島 亜希子

初節句雛を愛でるは大人だけ  
団塊ジュニア生まれた時期を嘆いてる  
使い捨て物もペットも人間も  
やり直しきくなら別の道歩く  
健診結果元氣印をへこませる

横浜市 金森 徳 三

忘れものばかりしていた孫教師  
孫たちが談合してるお小遣い  
百均が有って助かる小銭入れ  
忍び寄る老いと戦う五七五  
発泡酒ビールの違い分からない

横浜市 中尾 哲 代

散歩道気紛れが寄るカフェテラス  
七光演技力にはとどかない  
今あるは誰のおかげと子に頼る  
旨いもの知ってからです食べ歩き  
塾の子が帰らないパトカーの音

佐渡市 高野 不二

平均寿命今日から人の分を生き  
呑んだ時だけ女房の機嫌取る  
賞味期限今日までですと食わされる  
裏金は本の間にはさんどく  
年金を分けるもんかと仲直り

尾張旭市 三浦 きぬ

教え子の情け身にしむ医者通い

早く逝けよとばかり税を上げ

愛猫のチビ黒ボール箱が好き

我楽多の一つ一つにある歴史

川柳塔水煙抄で終わる我れ

北名古屋市 片岡 文男

この喫茶雑誌の量で客集め

物忘れ電話かけ合いホツとする

図書館のBGMも驚に

失言を救って児童救えない

旅帰り体重計は正直だ

京都市 清水 英旺

暖冬に帳尻合わす寒戻り

群衆の中で孤独にさいなまれ

ド忘れ一つ脳細胞が一つ消え

脳ミソをストレッツチして句を作る

鈍感力きたえて長生きすることに

京都市 西村 益子

気が緩む口から心ポンともれ

困ったな気持が顔に出たまんま

飲み込んだ怒り頭上に浮いたまま

スニーカー履いてゆつくり春の風

隣人と同じ着メロ鳴る車中

大阪市 原田 すみ子

この駅は泣き笑いした通過点

駅伝のタスキのような家訓あり

乗換えの見知らぬ駅にある旅情

親と子の希み揃わず片結び

埋み火は消えもしないが燃えもせず

大阪市 尾崎 黄紅

英霊が哭いた防衛省になり

お茶お花習いましたけれど知らず

浮動票きつとすっかり頼みます

どの家も過去はいっぱい持ったはる

逢いたい逢いたくもない老いのうつつ

大阪市 伏見 雅明

無事だった今日一日を笑い合う

年金の鎖を緩めグルメ旅

一病を後生大事に持ち続け

入れ替えたお茶きつかけに仲直り

子の便り肩の荷物を軽くする

大阪市 吉田 富美

世の中の荒波越えて傘寿来る

今語ろう昭和を生きた母達を

鉛筆を句帳にはさみ一呼吸

大きな目世の中見てる鯉のぼり

ちちははに五月の風を送りたい

大阪市 平嶋 美智子

病んでから身のいとおしざ知りました

カーテンの隙間に夜明け見る安堵

この段差気にしなかつた若かつた

古里に立ち星空にとけこんで

温かい言葉心に灯をともし

池田市 上嶋 幸雀

三月の時計は春の音で鳴る

早足の思わせ振りな春の音

大の字に寝ると聞える春の音

減り張りのつかない春に狼狽える

温室に育つて春を取り逃がす

池田市 北出 北朗

冬北斗汲めども尽きぬ闇を汲む

家計簿は置いてけぼりの好景気

よく笑う妻は百万ポルトです

晩成を信じて亀のマイペース

道半ば明日へ翔ぶ気の辞書を繰る

池田市 多田 契子

牡丹鍋干支の今年は食べにくい

端が好き奥へどうぞと言われても

ごまかしはきかぬ煮物の母の味

年金の話わいわい忘れ

やさしいと言われ眉間のシワのばす

泉佐野市 備後 三代子

申告を終えた今宵の缶ビール

カタカナに社名を変えた腹づもり

平穏な今日を感謝の一日暮れ

黄八丈袖競うて花衣

満開のさくらを抱いて母は逝き

茨木市 島田 誠一

湯どうふの音ぐつぐつと冷える晩

この先が最大の賭け披露宴

頂上は民の渴きも見えて来ず

ちぐはぐなやりとりも良し母白寿

遠回りして築くべき道もある

門真市 矢阪 英雄

粉を練る客の味覚をさがしあて

飛魚入れて浪速一番うどん味

旨さとはうどんに寄せる一念で

一番と評価されても心練る

成しとげた評価にうれし酒うまい

河内長野市 木太久 正一

愛犬の散歩日課を楽しむに

楽しみは孫と食事とトランプを

同窓の腕白見える喜寿の顔

ばらばらの兄弟揃う父母の忌に

閉山の町に涙のフラガール

岸和田市 中岡 香代

頭では理解身体が反比例

母からの戒め気づく母の死去

時経てば夫婦心は違う場所

引き算で生きずプラスで生きてます

迷う子の背をこっそり押してやり

岸和田市 坂口 英雄

ぶっ壊した党を再生する総理

嘘ひとつ混ぜると宴盛り上がる

めし風呂茶言えるだろうか退職後

長電話していると元氣よみがえる

安倍さんを褒める一句がまだ出来ぬ

堺市 萩野 像山

繁栄を築いて地球温暖化

渴き切った心を癒す母の胸

馴らされて鎖がないと頼りない

二世帯をつなぐ鎖は錆びやすい

三男に生れて古着気にしない

堺市 羽田野 洋介

年号をまだ覚えてるごろ合わせ

オレ流を平気でやれる年の功

拝むより花を訪ねる四季の古寺

約束を破ったあとの透き間風

聴きに行くその人柄に触れたくて

吹田市 二宮 栄子

チヨコに鯛釣っておいでと娘を送る

反省をしたりさせたりして夫婦

ありったけの声で主張の新生児

古里の駅に亡母さん待っている

新聞がちらしについてやって来る

吹田市 早泉 早人

逆風もそのうち止むとあせらない

目が合つてにっこり交わすご挨拶

世辞に乗りだんだん口が軽くなる

ボケ防止センター試験解いてみる

子が巣立ちやと叶えた時差の旅

吹田市 蔵田 光子

旅半ば乗り継ぐ駅をまちがえる

小春日にうかれ叶わぬ計を練る

小気味よい時事川柳に胸がすく

春を待つバラの新芽も天を向く

契約を結んでからはよく眠れ

高槻市 笠原 乃りこ

オカリナが拗ねているらし音が出ぬ

好きなことだけしていい歳になる

会計を任せられたためしなし

退職後百貨店から百均に

また一年再発もせず医者拜む

高槻市 安田 忠子

浮き沈みあつて人生面白い

添え書きに思い浮かべた里の冬

道標昭和の残る金物屋

真つ白な雲が好きです露店風呂

運転手無料バスにも頭下げ

寝屋川市 岡本 勲

堂々としてるが骨は粗鬆症

凍てたままいつ解けるのか拉致問題

いたずらのつもりで嘘で大火傷

朝起きて今日の自分に捻子を巻く

研いても光らぬ石が二つ居る

寝屋川市 小嶋 みさと

カテーテル入れ人並に暮せてる

若くして逝つたあの子が忘れぬ

温度差が激しく体ついてかぬ

あちこちで悲鳴をあげる温暖化

春近し予定で埋まるカレンダー

羽曳野市 森下 一知

七色に染まる噂が飛んでゆく

辛抱に赤い実が付く回り道

徘徊に詫びる悲しいドアチェーン

欠点をのぞく片目を許し合う

才能のけじめに迷う習い事

羽曳野市 吉村 久仁雄

ストレスを全部吐き切る大あくび

追い越せぬ明日だが今日を走り切る

裏読みへ耳そばだてる聞き上手

立呑み屋斜に構えてるのが礼儀

温もりも孤独も欲しいバーの隅

羽曳野市 永田 章司

脛に傷上司のお呼び口渴く

春気配犬に引かれてつい遠出

古希の日を祝ってくれる女がいる

ゼロの数ひとつ足りない貯金帳

春眠に縁遠くなる老いの朝

枚方市 二宮 紫鳳

ウオークするシューズの先に芽吹く春

梅の香をぬって風切るツーリング

沈丁花咲いて静かな自己主張

こだわりを感謝に変えて春日和

お隣の嫁と合作ちらし寿し

枚方市 小林 わこ

祝い日がまた一つ増え小豆煮る

手作りの雛を飾って娘と二人

雛あられ焼いてころころ祖母の味

春はすぐそこ少し待ってと雪が舞う

旅は楽しや知らぬ人にも声かけて

藤井寺市 俣野 登志子

戻れるならも一度亡母に甘えたい

入学式花の絨毯踏み締める

孫台風去つて三日で早く来い

家事分担提訴はしても却下され

想い出に涙こらえて形見分け

藤井寺市 増井 ヨシ枝

病気だと知れば宗教メジロ押し

ランドセル笑顔部屋中かけまわる

ギシギシの痛みを溶かす春日向

通りすぎふとふり返る沈丁花

アイラブユーと一度も言わず夫逝く

箕面市 寺井 柳 童

春一番空缶転ぶ歩道橋

格差論労使の主張噛み合わず

定年を迎える朝も自然体

二人三脚いまだちぐはぐ半世紀

息をすることも忘れてする写経

八尾市 脇 俊 子

手の平に言葉ころがし丸くする

老いという定規は不要風まかせ

退屈の虫が騒いでひとり旅

日溜りでペットと話す世の動き

忘れてたトゲが時折自己主張

八尾市 田邊 浩三

大掃除を古い日記が邪魔をする

花粉舞い美人の増える候になり

古希祝い赤いパジャマの贈り物

ひよつとして働き蜂がわが祖先

公園で子より元気なママの声

八尾市 赤木 妙子

褒めて叱って抱いて子育てした記憶

落款を押す瞬間に沸く鋭気

うしろ姿は女盛りというオーラ

すれ違う妊婦に広く道譲る

言い足りぬくらいでやめておくリクツ

八尾市 笹倉 ひろし

プラネットアース潰す活かすも地球人

お浄土へ行けると信じ正信偈

コーヒートの香り漂う老いの午後

出生から墓地までネットオンライン

生活の知恵で成り立つ老母のケチ

八尾市 前田 紀雄

感動の涙でかすむスクリーン

隠しても目が笑つてる嬉しい日

知恵しほり年金暮しパワフルに

春ウララ前頭葉が欠伸する

選挙カー花見の客が酔い切れず

八尾市 西川 義明

一日一句したため仕舞う日記帳  
裏金が出るわ出るわの大阪府  
苦勞して得た金無駄に使えない  
バイキング老いの胃袋しれたもの  
青い海平和な空よいつまでも

八尾市 中島 春江

新学期天神様もほっとして  
電車に乗りつくし探しに行く家族  
仏飯に菜飯さみどり湯気の立ち  
久しぶり兄と逢う墓お中日  
経を読む遍路マスクをしたまんま

八尾市 寺川 はじむ

子を当てに農事日記を埋め尽くす  
定年へ妻の鎖が待ち受ける  
職終えて錆びた鎖を磨き合う  
何事も無くていい日と書く日記  
たまらずに犬腰おろす立ち話

大阪府 若月 祐作

お茶席に招かれ膝が愚痴こぼす  
脳味噌が風邪を引いたかもつれ出す  
今朝もまた母の味噌汁あたたかい  
主婦業に定年ないと妻の愚痴  
年男猛進はせぬゆるり往く

大阪府 小栢 幹子

気まぐれな春に戸惑い風邪をひく  
する事の無い淋しさが身にしみる  
野暮なこと言わずに老いを凍と生き  
陽光に草活気付き闘志湧く  
刺激されさびた頭が活気づく

大阪府 高木 道子

風向きで聞えなくなる母傘寿  
花粉症デートの予定ままならず  
宝クジ夢買い続け待ち続け  
お野菜とスルメ大好き長寿箸  
片方の耳で甘言ばかり聞く

相生市 村木 信子

傷つかぬ距離で測っている打算  
キリストの死角で光る核ボタン  
農政へ野党シャープな味で切り  
肩書きが落ちると変る風流れ  
消しゴムで消せる世過ぎなら愉快

加東市 安達 厚

平年作でした苦勞も幸せも  
逃げないで遊んでいてよ庭雀  
無我求め八十路になって坐禪する  
今日もまた書くことのない日記帳  
明日は雨あれもこれもと畑仕事

篠山市 谷 田 多美子

一人泣きひとり笑って夕暮れる  
春の靴新調のまま風邪の床  
まだ女ちよつと着替えて買ひものに  
金はないけれど長生きしたくなり  
私のカルテ案じる夫はなく

三田市 阪 本 藤 朗

お土産を買えとばかりのバスツアー  
手のひらをまず暖める缶コーヒー  
傘一本春一番のいたずらに  
病窓へ世間の音が妬ましい  
メールより元気な声が聞きたくて

三田市 白 井 二 英

こんなでも今が一番いいのかも  
犬猫も人の笑顔が分かるらし  
魚心あるのにソツポ水心  
ノンマナー注意するにも要る勇氣  
光ってるレールは正に現役だ

三田市 辻 開 子

手紙好き時代はメール意地通す  
悩む時落ち着け亡母の声届く  
記念日はゆっくり二人酌み交わす  
ダンベルの効果みたくて休めない  
六十路坂金婚式へ夢繫ぐ

三田市 上 垣 キヨミ

荒れた手で涙を拭いてくれた母  
重責を爪先立ちで耐えている  
引力に逆らわないで生きている  
長風呂の母へ何度もノックする  
約束の孫の夢への犬を飼う

宝塚市 河 津 寅次郎

真つ直ぐに生きて心は丸い窓  
スローライフに慣れると庭が狭くなる  
あみだくじ辿った道に悔いは無い  
票入れた方も忘れたマニフェスト  
やるだけの事はやったとまだ言えぬ

宝塚市 丸 山 孔 一

人間ドック所見は夫婦別に聞き  
各局の天気予報士みな美人  
手品師の手よりも口でごまかされ  
焼鳥の煙襟首鷲掴み  
身を護る術も知らずに平和説き

西宮市 藤 本 直

入選句妻に見られて叱られて  
いい日なら心の時計ゆっくりと  
道端の花は小声で季節告げ  
苦さ知る人だけ分かる味がある  
花筏崩れて万葉仮名になり

西脇市 七反田 順子

合せ爪古都の音色によく似合う

春が来たのそりのそりと蝸牛

それぞれにきつと芽を出す子の育ち

春うららガーデニングに背伸びする

お気に入り絵本の熊を撫でている

奈良市 乾 春雄

山笑うたびに泣き出す花粉症

マラソンの孤独を癒やす旗の波

鶴を折る心配を折る指の冷え

万歩計持たぬ二人の散歩道

ほどほどを知らぬ風船はち切れる

奈良市 矢野 良一

奥深さ習ってわかる稽古事

今至福雨音聞いてする昼寝

春雨に風情を増した散歩道

朝靄に墨絵のような古都の塔

早い梅鶯の声きこえない

檀原市 藤 永 実千代

方便の嘘もつけずに付け込まれ

安売りへ走らないにも勇気いる

人情に走り過ぎるもDNA

病床の母を見話めて独り占め

ああ母よ善くぞあなたの子に生まれ

和歌山市 堀 富美子

秒針が追うた一日満ちている

息の合う友が元気でいる安堵

人違いしたがにっこりしてくれる

お墨付き検診あとに舞うグルメ

万歩計躍らせているスニーカー

和歌山市 柏原 夕胡

えらいねと頭を撫でてもらいたい

ジェラシーもちよっとだけなら愛される

鍋囲みはしゃいでみても二人きり

男の嘘をすべて許している乳房

未練など流そう星の降る夜に

和歌山市 土屋 起世子

お受験で知らぬママゴト鬼ごっこ

飽きもせず茶粥で今朝も幕があく

思い出をたどれば人の情ばかり

逆境をバネに手毬はよく弾む

春陽射しコートを椅子の背に預け

和歌山市 寒川 武

一生のお願い何度聞いたやら

ワハハと笑い飛ばせる損で済み

平然とプロですからと言う自信

不器用なくせに道具は買い揃え

肝心なことがはやける長電話

和歌山市 坂部 かずみ

春麗らメールの友も騒ぎだす  
春風で座敷わらしの戸が騒ぐ  
声援をかけた積りが励まされ  
暖冬で白菜たちが潰される  
啓蟄に同級生の声掛ける

和歌山市 山田 侃太

補修してさらに醜くなる退路  
温暖化海の背丈が伸びてきた  
桜咲く高野豆腐の甘い味  
前は川車線変更してごらん  
蛍光灯家族の亀裂知っている

岩出市 村中 悦男

表情も変えず流れる舟の雛  
食べあきぬ五十余年の妻の味  
バックしてやっと全体視野に入る  
おまかせの気持が湧いて楽になり  
病得て命の大事倍を知る

紀の川市 木村 徑子

森のシャワーで充電してるスニーカー  
おんおんと泣いて明日の糧にする  
十指みなどとも律儀なイエスマン  
残高と余命はじいて深呼吸  
呱呱の声長い旅路になる鼓動

紀の川市 宇野 幹子

溢れ出る情報咀嚼しきれない  
コンセント抜いて緑に癒される  
風呂敷に日本の心包み込む  
永久菌増えるたんびに憎くなる  
刻という魔法に驚が溶かされる

田辺市 大峠 可動

多情仏心癒えよ癒えよと鐘を打つ  
歳月の過去に未来に陽が二つ  
涙から生れた愛は華として  
天地人一体浮かれ花の季に  
心まで病んで戦は人を討つ

鳥取市 中宇地 秀四

激論を交わす平和な縄のれん  
琴線に響くあなたの思いやり  
偉い人父さん財布お母さん  
猫にだけ日頃の愚痴を打ち明ける  
幸せを神に裾分け宮参り

鳥取市 横田 春名

弟の柩ふんわり春の雪  
目礼にあなたの憂い受けとめる  
資金ぐり疲れ迷路を歩き出す  
川風に逆らい友の葬に行く  
宝箱開ける鍵とは気が付かぬ

倉吉市 酒井 美美子

手に職をつけた親ごに感謝する  
月末に遊びほうけのつげが来る  
面の皮厚くて足も手も出ない  
子の虐待親の心理が解らない  
財産が無くて争いなくて済む

境港市 遠藤 那珂子

おみやげに駅弁買って旅わかる  
駅弁が孤独な旅を楽しませ  
咲く梅が春を知らせる鳥を呼ぶ  
工夫した今夜のスープ受けがいい  
三姉妹身の丈に合う暮しする

米子市 小塩 智加恵

手足腰叱咤激励してる口  
電話代私のストレス解消代  
留守電のピーに上擦る声となる  
気の強い女が仕切る春の旅  
父親を親父と呼ぶ子中学生

米子市 猪森 スミエ

桜咲く孫の背丈もぐんと伸び  
駅弁のうまい線だと言うマニア  
寝たきりにならぬつもりの方歩計  
聞いて知るそして忘れてもとの鞘  
入れ知恵は時どき袋からもれる

鳥取県 橋谷 静江

絵手紙をくれる友達最高よ  
夢を持つ孫へ仕送りがかさな  
惚けに効く薬買う金貯めておく  
良い事があると鼻歌飛び出した  
花粉症などと突然いじめられ

鳥取県 岡村 孝明

リモコンが心安まる場を奪う  
難局を家族スクラム切り抜ける  
嫁迎え宝のけはい待っている  
趣味の会楽しく防ぐ痴呆症  
古希すぎてクラス会では愛称で

松江市 山根 邦代

ふるさとへ自然の声を聞きに行く  
日溜りで蓬の青に指染まる  
輪の中のはずんだ声が温かい  
地球儀で旅を楽しむことにする  
孫が来る嫌われぬよう背を伸ばす

松江市 柏井 日出子

怒りごとやわぬお人にみるゆとり  
優しさをもらえばペンが動き出す  
無意識の中でもわが名呼ぶ夫  
たしなみは忘れていない師への恩  
いろいろのご縁で未熟助けられ

出雲市 荒木英子

独り居に余生の運は風まかせ  
親譲り運を頂き今を生き  
お目出とう家族で祝うバースデー  
去った人淋しさ新一周忌  
夜明け前私呼んでる影法師

出雲市 川島和歌子

方言で楽しく語る親子酒  
閉じていた秘密が疼く春の宵  
ポケットの穴から漏れて飛ぶ噂  
立ち話つきぬ二人に夕陽落ち  
感激がうすれぬうちに手紙書く

雲南市 福岡博利

春の雨土手の桜もうごきだす  
シルバーの仕事元気をくれている  
好きですと一度も言ったことがない  
八十路坂一步一步を踏みしめて  
しゆくしゆくとおいを痛める永田町

雲南市 武島ちよえ

春うらら医者のはしごをして帰る  
駆け引きのないお付き合いしています  
足のツボ押さえて老いを遠ざける  
口約はいつしか春の風に舞い  
泣き笑うテレビドラマの中にいる

雲南市 菅田かつ子

ロスタイム昼寝がすこし長すぎた  
朝市の野菜素足で顔を見せ  
みんな来て急に楽しくなる茶の間  
勝手口明るい声で来る野菜  
たっぷりと飲んで父さん高軒

府中市 馬場利子

鳥の声朝のリズムに乗せる風  
好きな絵を描いて孤独を埋める春  
さよならの言葉が言えぬ里の駅  
春風に転びぐせつく古希の道  
口笛を合図に発車縄電車

宇部市 高山清子

テニヲハはどうあれうれし老母の文  
下積みの汗がチャンスを掴み取る  
いいかげんにしたらと聞いている噂  
知っていて知らない振りも和の一つ  
言訳はすまい傷口深くなる

今治市 渡邊伊津志

押し付けは無礼相談してみよう  
迷わずに歩けと風に背を押され  
透明な声にみんなが寄って来る  
恋こそは生きる力ぞ年取るな  
謙虚さを弁えている春の風

大洲市 花岡 順子

ライバルの姿に紅を引いている  
バー越える一瞬だけは目をつむる  
野次馬の方がのんきで性に合う  
我慢我慢が口ぐせらしい人と居る  
空を飛ぶのは蝶の姿になつてから

香南市 桑名 孝雄

松竹梅のしながき見栄が試される  
大法螺が吹けぬ回転寿司の客  
刻苦勉強また校門へ金次郎  
戦力外の通告否も応もない  
員数のひとりと自覚して参加

香南市 百田 幸

息切れも度々あつた夫婦坂  
ふところが寒い夫は楽天家  
器用さはないが真面目に生きた道  
恩返し墓に頭を下げるだけ  
忘れもの忘れたことも忘れてる

高知県 いの静草

早口も加担している世の乱れ  
稼がぬがバイクで事が足る暮らし  
墓への道今日の目当ては無人事  
禿頭に収斂したる過去全て  
有難し息整える時間あり

北九州市 岡田 幸生

頼まれた保証印から溝ができ  
ぼつかりと胸に穴あく喪のはがき  
どのくらい折れて出ようか仲直り  
一枚の辞令に狂いだす道路  
珈琲の香りに消えたわだかまり

メルボルン 藤原 ポン吉

不便さを楽しむ知恵と若さかな  
取り寄せたふた月かかり御用なし  
慣れませんキスでドギマギご挨拶  
バス電車七時過ぎるとガーラガラ  
おにぎりをほおばる子供人種なし

シドニー 三谷 たん吉

政治屋は一聞き二十知つたふり  
一を聞きひとつ解ければそれで良し  
今もなお頑固に続く反抗期  
善人がだまされるなら罪とせよ  
暗い冬越してお次はこわい春

シドニー 森本クックバラ

戦犯の名記す慰霊碑硫黄島  
投降を敵と味方で挟み撃ち  
舵取りが出来ぬ親方船沈む  
潔く恥を恥だとみとめたら  
胎児には戻れぬと知れ引き籠もり

寢屋川市 森 田 麗

千の風になっても私墓で泣く  
紅筆がハミングしてる旅の朝  
母だけは信じてくれた赤い糸  
胸キュンの恋を信じた若かった

枚方市 小 川 良 吉

浮き雲をながめて吐息敗戦記  
カラオケで唱歌唄って独り浮く  
浮かれてるとき気をつけと母の声  
サスペンスドラマ読むよう社会面

京都市 中 野 六 助

寝ぎなおす想いを切ってきたナイフ  
いつ起きていつ寝てるんやおかあちゃん  
棲みにくいこの世に慣れてゆく不安  
慣れた頃迎えに来たという寿命

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

美しい日本に弱者似合わない  
雑寿司を男ばかりで食べている  
社会から見捨てられゆくお年寄り  
しなやかな物腰にふと騙される

倉吉市 前 田 喜美子

小悪党ババを困らす三歳児  
人が皆怪しく見える悲しい世  
帰り道またねと交わす老いの旅  
陽炎や畑で草とるおばあさん

富田林市 古 田 千 華

春の雨ロマン搔立て人恋し  
スマイル咲く春の女神の足跡に  
童話から夢や冒険ほとばしる  
小半日病む母とゆく野草摘み

八尾市 田 中 トシエ

ふところに入った風を取り逃す  
夢というそんな一字に救われる  
真つ直ぐに歩いて友を見失い  
建前と本音の川を渡り切る

浜松市 杉 浦 恵 夢

仲良しのこつを知ってるおでんの具  
たくさんのキャベツを生んだ大地泣く  
引つ越しの箱にわたしを詰めたおす  
格差社会歯間ブラシが太くなる

寢屋川市 北 田 ただよし

対岸のジョークは消えた温暖化  
声帯を振り絞ってる痩せ蛙  
声変わり若さの理屈先走る  
好奇心まだまだ萎えぬ古希の坂

奈良県 阿 部 紀 子

底冷えに彼の靴音遠ざかる  
またひとつ友のドレス削除する  
ヨン様はほんのひそかな癒しです  
何しても中途半端な私です

豊中市 荒巻 夢

大阪市 寺井弘子

九条に込めたわたしの夢守る  
テレビの嘘見抜く目が出来つまらない  
立ち話日溜まり求め移動する  
ざわめきが通り抜けゆく登下校

尼崎市 河津正治

病む母に笑顔が滲む孫の声  
流行をよく御存知と買わされる  
口紅をつけて待ってた頃が良い  
ニューファッションニユースキヤスターから貰う

鳥取県 毎田信雄

割烹着の母に似合いの豆絞り  
民主主義乗り遅れまい豆知識  
凜として父は許すを口にせず  
知と情のはざま一隅照らす術

栃木市 岡野すみれ

温暖化やきもきさせて過ぎてゆく  
さすがプロ聴かせる声のコンサート  
飲み放題胃の腑に待ったかけられる  
食べ放題少しは遠慮せにやならぬ

大阪市 田浦實

種蒔いて夢が膨らむ野良が好き  
乱暴な口をきいてるのは女  
無い袖を振るから心寂しがり  
いい噂届けてくれた春の風

加東市 黒崎美紗子

字の忘れコンピュータに罪を着せ  
口コミの客が育てた路地の店  
住まないと急に老け込む里の家  
足下にそっと近寄る老いの坂

河内長野市 内海綾乃

ペンライト揺れて華やか歌謡シヨウ  
母の胸片方の手も乳探す  
賑やかな連休人出知るテレビ  
暖かい冬で野菜もののびのびと

鳥取市 山口千代子

暖冬で白菜巻かぬのびるのみ  
若者達常識知らず増えている  
ひとり住まい難に声かけ出掛けてる  
天神様皆の合格絵馬をかけ

鳥取市 谷岡清子

老夫婦助け慰め杖になり  
亡くなって気付いた夫の深い恩  
何時散ると知らずに欲をまたも盛る  
病んでから急に老いたと一人ごと

布団干しうつつさ消えた今日の幸  
存分に宇宙旅行の夢を見た  
老夫婦介護されるもするも修羅  
温い風母のふところ里の山

藤沢市 加藤 スズコ

臥す床に触れる言葉に夢つなく  
嫁ぐ娘に婚礼写真見せる母  
農に生き父が愛したコップ酒  
待ちわびた春だ風よ心して

浜松市 中田 尚

大の字になってみどりを一人占め  
新人もそろそろブルー五月病  
眼にしみるみどりも人を和ませる  
無人駅スローライフの始発駅

大阪市 吉川 弘泰

水しぶき虹あざやかな箕面滝  
合格点取っても母は灸をすえ  
新入社仕事始めは酒の席  
回り道いつの間にか花疲れ

大阪市 平井 露芳

安静にすると治らぬ我がやまい  
戦犯の孫だと日本けなす国  
三割から一割になり妻元氣  
富士さんの上でサミットして見たら

大阪市 吉内 福世

水取りに温さに引かれ花手桶  
やあと咲く我がもの顔の孔雀草  
好きな事させて貰える時が花  
噂だけ景氣のよさが盛れぬ膳

大阪市 澤田 定子

歯の浮くごとお世辞ならべて頼みごと  
浴槽で森光子真似スクワット  
苦勞消え勝利監督宙に舞う  
大極拳念じるとき目線みる

泉大津市 助川 和美

払わない我が子いじめの給食費  
若いから毎日カレー平気です  
職場では私の名前パートさん  
デイサービス出かけた老母にホツとする

河内長野市 黒岩 靖博

思い出は遠くになりておぼろ月  
答弁をさらりと変える二枚舌  
妻の愚痴馬耳東風と豆をむく  
息を止めぐいと一押し印をつく

河内長野市 宮守 正博

空つばの頭かどうか叩いてみ  
腕白も裏に回れば泣いている  
解散で出番が近い福だるま  
花冷えに一人二合の爛をする

堺市 阪井 智之

逝った妻風と光に蘇れ  
ありがとういいえが醸すあたたかさ  
子犬来て新鮮になる夫婦仲  
よし賭けるこの上司なら悔いは無い

豊中市 源田啓生

ほどほどのラインが知ってる幸せ感

歯を磨く心を磨く暇がない

クラス会そんなこんなのお木に

プーメラン返る言葉が突き刺さる

豊中市 谷川勇治

悔しさを忘れてしまふ雪の朝

啓蟄を今年も迎え妻という

補聴器でやさしいことば拾います

気紛れに吐いた言葉が虹になる

豊中市 神野宇乃子

百均で鏡餅から祝い箸

百均の歪んだ湯呑み絵のモデル

百均に洗濯バサミ迷うほど

五六回使えば切れぬ紙バサミ

藤井寺市 津田シルク

過去ばらすゾ酔えば悪友口ぐせに

念願の重役椅子も軋みだし

この夏が勝負体重減らすゾエ

夫と娘に呆れ果てられメカオンチ

羽曳野市 松本静子

世界遺産高野の山に雪が降る

赤い実をつけた万年青を水盤に

今の世はにこにこばかりしてられず

何もかも春の嵐が舞い上げる

羽曳野市 仲谷真一

あの人が私をさける何かある

結婚の指輪失くした秘密です

相撲技堪能させる砂かぶり

大相撲横綱負けて座布が飛ぶ

箕面市 広島巴子

旅の日は鳥より早く起きました

草津の湯やはり歌ったいい湯だな

温泉にのぼせるほどの憂さ流す

つるつるとすべすべ競うお湯巡り

大阪府 西川冷子

雄大な黒部の御霊ダム守る

打ち寄せる波洗っている屏風岩

本建築紅白巻いた柱建つ

椅子取りのゲームのような老いの旅

大阪府 畑中節子

おしゃれ染めしてもかくせぬ首の皺

童心に還りいきいきエイジレス

二世帯のぐちも短詩の笑みの中

作物のリズムも狂う温暖化

大阪府 大屋敷 婦美子

あけぼのや木々の芽ぶきに力湧き

他の人のイライラ受けに私いる

やりくりにはけの予防と笑いあい

あしあとは孫十一人でつなぐ道

神戸市 武田 恵美子

花ふぶき孫といっしょのゆうえんち

雨女あつまる今日はなぜか晴れ

時間待ち老いも若きもけいたい

初めての女の子なの皆ピンク

尼崎市 桑原 東園

老いてなお淑やかな美を凜と持つ

雑草の強さ刈られてまた芽吹く

古里の訛り懐かし友と遇う

逆境を乗り越えてこそ強くなる

尼崎市 小池 幸子

振り返りしみじみ思う人の恩

麗らかな日に誘われて回り道

酷使した膝が弱音を吐き出した

よく食べて早寝早起き風邪引かぬ

尼崎市 古川 正子

紫陽花の新芽元気に顔そろえ

通学路子供見守る善意の目

マンションが建ち細い道広くなり

春一番よい名前でも恐いです

尼崎市 加川 靖真

ぬか床を持たせて味を娘に譲る

病名は天が休めというカルテ

魚の棚昼網の蛸散歩する

ありがとうと言える夫婦に辿りつき

加東市 岩本 美緒子

被り帽見つけてくれたはぐれ老い

絵の起伏好きが連れ立ち半世紀

思いつきの綴り語らすS画帖

求め彩感度の違う昨今よ

西宮市 石野 照代

地図を見て出好きの虫が目をさます

死火山と決めてた夫活火山

あれほどに誓った言葉がうろおほえ

発表会はじめてみんないいお顔

兵庫県 永井 かほる

マラソンの今日一日は都会並み

焚いた風呂骨の芯まであつたまる

黒豆のボン菓子作り宅急便

ボン菓子は昔思いつき出よみがえる

奈良市 尾畑 なを江

再会はしたい鏡とにらめっこ

人生の主役を生きてマイペース

団塊のパワーが世相変えるだろ

実現の夢を数えてありがとう

奈良市 岡 文香

こっそりと買い戻したい過去がある

三步ほど歩きましたと嫁電話

まだ五歳もう五歳だともめている

新庁舎他にないのか使い道

夏まつり夜店復活孫笑顔

生駒市 小西 稔

苦勞して信用築く手間仕事

武士たちは心で築く人と城

携帯でやりとりメール楽しそう

海南市 小谷 小雪

親を見る二人けんかの余裕なし

おひな様来年もまた会いましょね

ゴミを出す曜日知らないあなたです

いつもいつも君へアングル微調整

紀の川市 辻内 次根

豊かさを知った古本屋のはしご

日が射して忘れてしまふ嫌なこと

まだ明日があるから話合わしてる

額縁の中でゆれない樹を描く

鳥取市 岡田 信恵

古希の声まだまだ歩む趣味の会

子宝は光る玉ほど母の愛

語り継ぐ家系の歴史子に伝え

耐えて待つ我が人生に夢の道

境港市 遠藤 トミ子

水色のカーテンゆらく春の夜

人生はもつれてとけて明日がある

たっぷりの雨で夕焼絵の如く

谷ありと山あり歳をこえてきた

元氣だぜ医者のはしごが出来るから

境港市 中井 虎尾

大相撲法廷場所を特設す

負け組を国悪政しいじめてる

議事堂は永田劇場国の城

鳥取県 北村 稔

生きた蟹熱湯鍋に躊躇する

餓死思い出来過ぎ野菜廃棄する

腹いため生んだ子なんで殺せるの

じいばあに会うために死があるんだよ

鳥取県 飯野 菖子

シングルで生きる楽しみ長寿です

家族から生き生き響く声を聞く

風呂の中明日の元気を確かめて

ざりざりに生きているのも気付かない

鳥取県 岡本 幸枝

責任の胸に名札が生きている

同じ路ついて行きます半歩あと

奇跡の出会いから五十年星仰ぐ

先の夢見せてくれそう孫五人

松江市 松浦 登志子

嫁の夢希望通りに色直し

ポケットの紙確かめて謝辞の前

写真見る視線の先にまず自分

安心と口では言って口を出す

松江市 相見 柳 歩

カラダは燃えるが魂は残るよ  
ほろほろの涙手と手が離れない  
飼っていた猫は遠くへ行つたまま  
ぎりぎりの恋をロマンという男

安来市 原 煩惱児

リハビリに励み明日へ繋ぐ虹  
老いしかな孫に教わること数多  
脳からの指令動作に現われぬ  
おじいちゃん風邪ひかないで可愛い声

府中市 岩 本 雅 代

暖冬にあわてて鳴いたホウホケキョー  
爺ちゃんのメールではしゃぐ孫家族  
介護する心にしたれ梅の春  
初節句孫のひな段ひなあられ

尾道市 木 曾 一 徳

団塊の再チャレンジよ風光る  
いい汗が自給自足の鍬を打つ  
生涯の誤算を集め般若心経  
晩酌の五臓六腑に感謝する

香南市 近 森 功

アルバムで帰らぬ春を呼びもどす  
腹割って話す話は酒がいり  
ほどほどに降れば恵みの雨なのに  
押し問答やっぱりそうと妻に負け

唐津市 岩 崎 實

陽春の陽ざしに芽吹く木々の枝  
事成就力を抜いてからのこと  
頑張れはいらぬふだんのままでいい  
疑わぬ葉をのんできいてくる

山鹿市、米加田 恭 代

どこだって欲しくはないよ核のゴミ  
交渉の手段と化した核保有  
どこのだれ考え出した核抑止  
飼い猫に監視されてるやんちゃ大

山鹿市 寿 三 純 子

多忙でもせめて心は安穩に  
川柳で近況知れる誌友あり  
良かったな平和日本に生まれ落ち  
五十肩夫の手借り帯結び

## 第百回記念 大阪川柳の会

日時 6月1日(金) 16時開場・17時締切り  
会場 大阪駅前第2ビル 5階 第一研修室

お話 磯野いさむ  
宿題 ○読む 赤井花城 ○雨 平山繁夫  
○中 天根夢草 ○重ねる 前田咲二  
○毒 板野美子 ○ひらひら 板尾岳人

欠席投句 5月30日到着分まで。(会員に限る)  
各題2句・席題なし・会費千円

〒532-0025 淀川区新北野1-3-4-706

本 田 智 彦

# 第22回 国民文化祭・とくしま2007

～ 渦 藍 踊り 文化ふれあう阿波の里 ～

応募受付 平成19年4月1日(日)～6月30日(土)

(当日消印有効)

作品 未発表作品 一人各題二句

応募料 一人千円

●但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料

応募先 〒770-8571 徳島市幸町2-5

徳島市文化振興課内

第22回国民文化祭 文化祭「川柳」係

郵便振込口座 01690-5-93369

加入者名 第22回国民文化祭徳島市実行委員会

応募方法

●所定の応募用紙に必要事項を記入

●郵便振替払込受領証又はその写しを添えて応募してください。

ください。

(事前投句の部)

(高校生・一般の部)

「未 来」長谷川酔月 「渦」板尾 岳人

「眉」久崎 田甫 「やすらぎ」萩原美和子

(小・中学生の部)

「未 来」赤井 花城 「たぬき」駒木 一枝

「自由吟」堀井 勉

大会日時 平成19年10月28日(日) 10時30分～16時  
会場 徳島県教育会館大ホール

(当日投句の部) (未発表作品 一人各題二句)

「遍路」平田 朝子 「徳」進藤すぎの

「わくわく」島田 駱舟

第二次選者

磯野いさむ 今川 乱魚 定本 広文

西出 楓楽 山倉 洋子

賞 (予定)

文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞

徳島県知事賞 他

発表

入選作品は作品集として刊行し、応募者全員に無料

配布します。(小・中・高校生は入選者)

問い合わせ先と募集要項依頼先

〒770-8571 徳島市幸町2-5

徳島市文化振興課内

第22回国民文化祭実行委員会事務局宛

TEL 〇八八-六二一-五二七八

FAX 〇八八-六二四-一二八一

主催者 文化庁・徳島県・徳島県教育委員会・徳島市・

(社)全日本川柳協会・徳島県川柳作家連盟 他

# 愛染帖

新家 完司 選

和歌山市 たむらあきこ  
戒名へ人のランクがまだ続く

(評) 競争社会の俗世では、肩書きによって椅子の大きさも年収も異なるのはやむを得ない。が、ほとけになれば平等ではないのか。

唐津市 仁部 四郎  
診察も貯金もカードにぎりしめ

(評) 病院の受付も、小遣いを出すATMも、電車の改札も、高速道路もカード。もうすぐ、お寺や火葬場からカード登録を言ってくる。

東かがわ市 川崎ひかり  
猫はいいいつでも家を出てゆける

(評) 気が向いたときにフラリと出て行き、フラリと舞い戻る猫。あのように、誰に遠慮もなく、気ままに暮らしてみたいものだ。

熊本県 高野 宵草  
苦手だと思ふものから食べてみる

(評) おながが膨れると、苦手なものはますます食べ難くなる。何事も、逃げ腰にならず積極的に向かって行くと、展望が開けてくる。

尼崎市 春城武庫坊  
神の声聞こえそうなり冬の月

(評) 人々が「神」などと呼ぶもの。その存在の有無は何人も確認できないが、煌々と輝く月は、何やら暗示しているようにも見える。

東かがわ市 池内かおり  
サングラスなど似合わない凡夫婦  
へそくりも出来なくなつて干涸びる

豊中市 谷川 勇治  
年金のおいしめているめしを食う  
指さされ生簀の魚殺される

大坂府 米澤 俣子  
酒うまい河豚もうまいと生きている

豊中市 水野 黒鬼  
娘は嫁さふたりでお茶の難あられ  
素手で土すくえば土のあたたか味

和歌山市 榎原 公子  
山の端にほこりと月の上る春  
掠奪の歴史を並べ美術館

鳥取県 竹信 照彦  
ポリシーも思想も愛に敵わない  
施設にいる姑を忘れることがある

富田林市 中井 アキ  
どこにでもあるようで無い路の壘  
山菜採り去年の日記見て急ぐ

横浜市 金森 徳三  
誉められているのか耳がこそばゆい  
負けるのが嫌い争うのも嫌い

西宮市 牧瀬富喜子  
老い二人食後のくすりチエツクする  
水道水ボトルに入れて飲んでる

三田市 堀 正和  
玉ねぎの芽にうながされ励まされ  
女かと思う女によく出会う

三田市 堀 正和  
実感のないまま貰う無料バス  
時々目薬さして世間見る

豊中市 吉田あずき  
スカートに包みきれない春の足

(評) 重たい冬服に包まれ窒息しそうになつていた足。ようやく訪れた春の光を浴びて元氣ハツラツ。窮屈なスカートが破れそう。

和泉市 横山 捷也  
長電話咳をいたわり合っている

(評) 受話器の向こうから「ゴホッゴホン!」こちらも「ゴホ、ゴホッ!」。長電話のおしまいは咳と咳とのご挨拶。「おだいじに!」

大洲市 中居 善信  
冷めた目で人の流れを見て無職

(評) 職場や学校を目指して足早に通り過ぎる人たち。今の私には全く関係のない世界。気楽なような、寂しいような……

堺市 羽田野洋介  
出欠は冬眠中と書いて出す

(評) 裏方で苦勞している幹事をガツカリさせるのは、何のコメントも書いていない欠席。せめてこれぐらいのユーモアで応えたい。

古希過ぎてやつとまわりが見えてきた  
和歌山市 根田よしこ

幸せの香り漂う夕ごはん  
東大阪市 谷口 義

眼球疲労何をそんなに見てたのか  
樺原市 居谷眞理子

好きですと酒に頼ってしぼり出す  
鳥取県 石谷美恵子

すっぱんは自信あつてか諦めか  
西宮市 緒方美津子

バスは今走る広告塔となり  
和歌山市 木本 朱夏

風邪ですね言つてほしくて医者へ行く  
大阪府 前 たもつ

青空をひらく こんにちにはありがと  
大阪府 山下 節子

奥に座っているのが父ではにかみ屋  
鳥取県 村上 玄也

咳をする時とても役立つ腹の皮  
大阪府 村上 玄也

うつつ伏せ寝まねて涎を垂らしけり  
鳥取県 山下 節子

裏木戸をぎしぎし開けるこぜんさま  
樺原市 村上 玄也

現実には払っています消費税  
樺原市 村上 玄也

国境を無断で越えて来る黄砂  
樺原市 村上 玄也

女々しい男に猛々しい女  
樺原市 村上 玄也

背囊から愛国心を出してくる  
京都市 高島 啓子

一回にしようと思つている小言  
海南市 三宅 保州

一日の助走の如く髭を剃る  
米子市 小塩智加恵

それ以上言ううと埃が舞い上がる  
米子市 小塩智加恵

賞味期限切れたピーナツ鳥の餌  
大阪府 星野きらり

啓蟄に雪が舞つてる日本海  
大阪府 星野きらり

膝小僧ご機嫌とつてウォーキング  
鳥取市 岸本 安章

手のひらでにつこり笑う落ち椿  
鳥取市 岸本 安章

名産品産地の人は屑も食へ  
樺原市 安土 理恵

酒臭い息の小言は聞き流す  
樺原市 安土 理恵

あとはもう好きに生きます小豆煮る  
八王子市 川名 洋子

ブランドで固めています骨粗鬆  
吹田市 早泉 早人

春だからバステルカラー着なくなる  
吹田市 早泉 早人

好きなのに無駄口ばかり叩いてる  
大阪府 森田 明子

句が浮かび湯船とび出し書き留める  
西宮市 藤本 直

君の声耳に朝日が差す如く  
尼崎市 長浜 美龍

パンフレット見るだけでもう旅気分  
尼崎市 長浜 美龍

紀の川市 辻内 次根

まだ若い失敗すると汗が出る  
倉吉市 山中 康子

煽つても銭の有りかは言えませぬ  
吹田市 穴吹 尚士

仲間にも敵にもしたくない男  
吹田市 穴吹 尚士

欲しい物買つて来たのに食べ切れぬ  
藤井寺市 若松 雅枝

飲み足らぬ仲間集めて縄のれん  
松江市 三島 淑丘

ホスピスの友と静かな無の時間  
羽曳野市 吉川 寿美

硫黄島からの手紙が乾かない  
枚方市 伊達 郁夫

雪の日のガラス細工と話し込む  
堺市 山本 半鏡

アベックと僕とエレベーターの中  
鳥取市 武田 帆雀

恋成就真つ赤な林檎まるかじり  
柏市 河野 桃葉

ライバルも診察券を持っていた  
弘前市 高橋 岳水

うちのポチクラリネットに尻尾ふる  
交野市 山川日出子

税金は払っていると深呼吸  
米子市 中井 ゆき

金婚の妻に贈ろう我慢賞  
藤井寺市 中島 志洋

君と逢う心ばかりが急いでいる  
松江市 相見 柳歩

天職であるかのように毒を吐く  
八王子市 播本 充子

体調は悪いが寝てもいられない  
弘前市 福士 慕情

美しく老いたいなんで無理らしい  
香芝市 大内 朝子

アイデアが枯れてボクだけ浮く会議  
大阪市 岩崎 公誠

歩きながら物を食べてもいい時代  
和歌山市 古久保和子

腹いっぱい食べて頭の血を下げる  
八尾市 山本 宏至

千の風亡き人に会う空仰ぐ  
鳥取市 岸本 孝子

千の風万の心に吹きわたる  
岸和田市 井伊 東吉

げんげ田に寝転んだ日を懐かしむ  
大阪府 桑田ゆきの

良い姑とやさしい嫁で同居せず  
三田市 北野 哲男

いつからか嫁の傘下に入っていた  
倉吉市 野口 節子

淋しいと言わずげんまんして別れ  
紀の川市 木村 徑子

春はいい花も女も匂いたつ  
大和高田市 鍛原 千里

円やかに地酒育てた天地人  
池田市 北出 北朗

有料化ゴミのはなしに花が咲く  
米子市 政岡日枝子

命を賭けてわたくしを慈しむ  
鳥取市 土橋 螢

一合発起国境越えるほど歩く  
大洲市 花岡 順子

類人猿に近い私の頭蓋骨  
堺市 加島 由一

損得を考え土産買って来る  
大阪市 小柏こずえ

超高値付いても誰か買うダイヤ  
八尾市 西川 義明

てくてくと歩く一本の足がある  
倉吉市 米田 幸子

名も成さず貸し借りもなく悔いもなく  
河内長野市 村上 直樹

真っ直ぐなひとの隣ですべならぬ  
藤井寺市 鴨谷瑠美子

禁の字が反抗心を駆り立てる  
高槻市 傍島 克治

あっさりと負けてリベンジ考える  
羽曳野市 徳山みつこ

老人性と冷たいことをいうカルテ  
枚方市 海老池 洋

チョコの礼ホワイトデーも義理ですね  
箕面市 広島 巴子

年寄りの笑顔の多い島の町  
八尾市 吉村 一風

負けたって拍手をもらう高見盛  
篠山市 円増 純子

観光地グルメの猿が右左左左  
鳥取市 吉田 弘子

火事見舞い愛一杯の大きい荷  
寝屋川市 富山ルイ子

エスカレーターの手摺りが少しねばっこい  
唐津市 久保 正剣

微笑ではほこ感をくれるひと  
堺市 和田つづや

恋人にしたいタイプの男居る  
豊中市 安藤寿美子

満月に心うきうき散歩する  
大阪市 松尾柳石子

喜寿の日もひとり体操して眠る  
米子市 白根 ふみ

参ったなあ お年寄りです朝鏡  
八尾市 高杉 千歩

参ったな初めて席を譲られた  
八尾市 田邊 造三

独り言ぶつぶつ水炊きの豆腐  
大和郡山市 坊農 柳弘

鳥取市 録沢 風花  
ランドセル守る黄色い旗を振る

和歌山市 田中 すず  
平穩無事毎日玉子割っている

尼崎市 春城 年代  
穴あきのジーパンはいて婿が来た

高槻市 乙倉 武史  
酔わされて年甲斐もなき恋の唄

高知市 小川てるみ  
仏壇へ春の匂いの桜餅

大阪府 畑中 節子  
草餅を焼いてほんわか母の味

和歌山市 寒川 武  
外部から人事異動が洩れてくる

鳥取県 岡本 幸枝  
リハビリに足の指でもグーチヨキパー

大阪市 津守 柳伸  
ひとりには一人の予定風みどり

大阪市 三浦千津子  
人間が好きで困いのない暮らし

大阪府 澤田 和重  
臨月のお腹と出会う久し振り

鳥取市 倉益 一瑠  
亡父に似た仁王あんだも酒好きか

三田市 阪本 藤朗  
円高も暴落もああそうですか

富田林市 片岡知恵子  
グルメグルメおふくろの味もう忘れ

シドニー 森本クックバラ  
わたくしとハーバプリτζ同い年

大阪市 榎本 舞夢  
コマージュル毎に立ち出す老い二人

鳥取市 土橋はるお  
皆さんに押し潰されて得た自信

大阪市 津村志華子  
いい人と言われて自分見失う

松江市 川本 畔  
狂いそうだから洗濯機を回す

鳥取市 夏目 一粋  
タバコの火このマッチ棒なつかしい

大阪市 小泉ひさ乃  
今日もまた私ひとりのフライパン

尼崎市 山田 耕治  
うっとりとしてる赤子と風呂の中

神戸市 田中 章子  
三時間あつたらやはり映画館

美祿市 安立次弘道  
秒針に押されて朝の靴をはき

唐津市 市丸 晴翠  
段取りは他人任せの旅晩

和泉市 西岡 洛酔  
久方の小さな旅へ老い二人

羽曳野市 酒井 一壺  
文庫本一冊ほどの旅をする

鳥取市 有沢せつ子  
弟が亡父に似ている酒の席

岡山市 井上柳五郎  
年一度遠い友からたより来る

鹿児島市 五反田柁子  
逆さまに貼った切手にあわてだす

寝屋川市 坂上 高栄  
ハナハトの話も弾むケアハウス

富田林市 大橋 鐘造  
今日忘れ明日を夢見て床につく

大阪市 板東 倫子  
御節介と御親切とは紙一重

鳥取県 佐伯 やえ  
いい仲間うばっていった春風

鳥取市 中宇地秀四  
絵馬の誤字これで大学行くつもり

寝屋川市 森 茜  
胃袋は七分位で蓋をする

西脇市 七反田順子  
新札の論吉を撫でてポチ袋

和歌山市 武本 碧  
マイペース明日があるさと言っゆとり

岩出市 村中 悦男  
血圧計今日のやる気の数字出す

三田市 上垣キヨミ  
マイバッグ持って地球を慰める

大阪市 吉内 福世  
立ち話つきぬはずです喜寿どうし

鳥取県 毎田 信雄  
おほる月心の窓で伏し拝む

# 誹風柳多留一篇研究 21

増田 忠彦・山口 由昭

小栗 清吾・伊吹和男

山田 昭夫

清 博美

137 ひよんな事姫しやうかんで坊主也

増田 「ひよんな」は、予期に反して不都合なこと、異様なことについていう。思いがけない。意外な。また、妙な。「しやうかん」は、傷寒。昔の高熱を伴う疾患。熱病。いまのチフスの類。(日国)  
きれいな黒髪だった若奥さんが、熱病にかかって尼さんのようなへんてこなことになってしまった。

山口 毛が抜けてしまったのでしよう。

小栗 賛。確かにひよんな事ではあるか、何が面白いかわからない。

伊吹 賛。気の毒ではあるが、僧体でない坊主頭が異様。

山田 賛。想像するだに面白い。まこと仏門

に入ったような気分でしょう。

清 賛。

138 もてた事四ツ手とはなすはしたなざ

増田 遊所でもてたことを、町駕籠の担ぎ人を相手に自慢するとは、なんともはしたないことだ、の意。粋をむねとする江戸っ子の美意識の一つ。

山口 賛。言いたいんでしようね。

清 賛。

139 銀ぎせる奈川をのむつらい事

増田 松川は下等煙草の一。(「江戸語の辞典」)

遊び人の見栄の小道具でもある銀のキセルで安物の松川をのむとは、何ともつらいことだ、の意。貧乏人の見栄つ張りも洒落本の主人公の一つ。

式百十文か松かわおやじかい 安七信3

山口 賛。かつこう付けだけ。

小栗「銀ぎせる」は買えたが、「国府」を買う金はなく「松川」ですませているという設定はあまり現実的ではないと思っ。

この句のキーワードは「つらい事」「つらい事」という状況設定がまずあって、その説明が「銀ぎせるに松川」だと思っ。これは勘当息子が、銚子で嘆いている姿だと思っのだから如何。

山田 同右。

てうしへの路ぎんに払ふ銀ぎせる 五42

清 松川は陸奥の白川地方で産出する煙草。小栗説同様、小生も銚子説。つらいのは銚子に居るその境遇と解している。

なお、礎稿引用の「松かわ」の句は、「杉かわ」の誤りではないかと思っ。テキストも確かに「松かわ」となっているが、句は、二百十日の風に屋根が吹き飛ばされたので、その修理のために杉皮を買ったという意。二百十文は二百十日の利かせである。軽々しくテキストを誤りとするのは危険であるが、本句

に限つては、今説明した通りの誤りと断定していいと思う。原本の誤りか、テキスト作成時の校正ミスかは、手元に資料がないため何とも判断しかねる。

140 けいせいを夜ぶかにおこすみぐるしさ

増田 同衾の遊女を、眠入つたのちの夜更けに揺り起こすとは、風上に置けぬ見苦しい仕様だ、の意。こくさっぱりと遊ぶのが江戸つ子の粋で、執着の強いしつこさは野暮とする。一チ番じやもてた内へハ入らぬなり

安八宮3

山口 賛。腎張りは嫌われる。

小栗 賛。「振られ客」とする説も捨て難い。

伊吹 賛。やはり、腎張りか。

山田 もてぬ客であろう。礎稿引用句のように「一チ番じやもてた内へハ入らぬなり」。そこで「けいせいを夜ぶかに起こ」そうとしたのだが、もてぬ客は、

ゆりおこす手をた、かれるあぢきなさ

七13

むりにしにか、ると虫がかぶりんす

末四1

となるのだから「みぐるしさ」と評されるのである。傾城としても、

かたづけてやるはとまたをやつとあけ

末15

だったのだから、応ずるワケはないのだ。清 賛。

141 おとなしい娘男を度くつぶし

増田 はすっぱな色娘とは対極のおとなしいまじめ娘は、軽薄男のモーションをはねつける。男をつぶす、顔をつぶすのも度々である。かたい後家男をたて、やらぬ也 一二7 出来ぬやつおよしなさいとかたくいひ

三41

山口 賛。逆もあるから女は悪い。

清 賛。

142 なんぼじやときげば鯉の直ハ出来す

増田 「なんぼじや」と関西弁で初カツオの値段を聞くようでは、商談は成り立たない。とびきり高価な初カツオは無鉄砲な江戸つ子が食するもので、しわく現実的な関西人の買物ではないとする。

なんもんめするじやあ出来ぬ初かつほ

寛元誠1

山口 賛。伊勢屋でしようか。

小栗 賛。

初茶魚直を聞てかう物でなし 二五7

と同意と思つていたが、なるほど関西弁がポイントか。

伊吹 賛。今でも「なんぼした？」が関西人の口癖。

山田 同。引用句の「何処」は銀で、関西の通貨。

清 同。江戸つ子ではないという面白さ。

143 元ト船て大の男の針仕事

増田 元船・本船は、伝馬船など付属の小船に對して、それを持つ大船をいう。(日国) 遠洋に出るような大船では、女手がないから繕い物などの針仕事も大の男がすることとなる。

親船は女房のなはいはかりなり 武二八9

はぜ釣りハ元ト舟迄かきついミそ 明六宮2

小栗 賛。それだけの句のようである。例句

①と同じことを詠んだものと思う。なお、

元船の不足は女房無イ斗り 二三四10

と焼き直しの句がある。

山田 同。男世帯では、何でもやらなければ

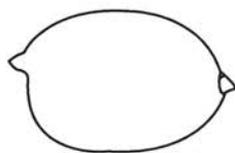
ならない。

清 賛。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



κ. κ

「吸う」 川上大輪選

税かからぬ空気たつぷり今のうち  
札束に吸収された正義感  
吸いすぎに注意の文字は伏せてある  
何となく匂いで分かる同業者  
掃除機に吸わせてる嫁さんの愚痴  
てっぺんの空気はきつと蜜の味  
好奇心つよく何でも吸うてみる  
定年も都会で空気吸うていた  
映画館で昭和の空気吸ってくる  
掃除機が吸っていましたイヤリング  
禁煙十日もう吸いたくて吸いたくて  
百年後吸える空気はあるのかな  
掃除機がストレス吸って動かない  
アスベストデートの度に吸っていた  
深呼吸してお嬢さんをください  
禁煙のポスターを背に吸っている

大阪府 前 たもつ  
大阪府 高木 道子  
和歌山市 田中 すず  
和歌山市 有本 孝義  
大阪市 神夏磯典子  
大阪市 籠島 恵子  
大和高田市 鍛原 千里  
富山県 富山ルイ子  
大阪市 森田 明子  
横濱市 中尾 哲代  
大洲市 中居 善信  
高槻市 瀧本きよし  
出雲市 多久和敏子  
愛知県 早川 盛夫  
東大阪市 北村 賢子  
砂川市 大橋 政良

「吸う」 松本文子選

気がねなく吸えばどんなに美味かろう  
古里で私にかえる深呼吸  
争いを避けるひと息吸うてみる  
深呼吸してもポリシー曲げられぬ  
アスベストも吸った本気で働いた  
魂を吸いとる音だ瀧落ちる  
大空をいっぱい吸って脱皮する  
ありがとうも言わずに空気吸っている  
線香の煙 嫌煙権はない  
映画館で昭和の空気吸ってくる  
一世紀前の空気を吸った亀  
四季の風吸うて日本に生きている  
かなしい人のかなしさを吸う千の風  
爪に火を点した汗を吸いとられ  
禁煙のポスターを背に吸っている  
孫九人みんな母乳で育った子

出雲市 吉岡きみえ  
箕面市 出口セツ子  
枚方市 海老池 洋  
和歌山市 榎原 公子  
高槻市 富田 美義  
四條畷市 吉岡 修  
八尾市 宮西 弥生  
池田市 上嶋 幸雀  
堺市 志田 千代  
大阪市 森田 明子  
海南市 三宅 保州  
西宮市 亀岡 哲子  
島根県 伊藤 寿美  
篠山市 遠山 可住  
砂川市 大橋 政良  
東京都 岸野あやめ

ストローが二本カップの中は愛

ポケットの辞表静かに深呼吸

蟻んこも同じ空気を吸う仲間

幸せに少し足りない息を吸う

鍵っ子のさみしき吸っている絵本

反論も吸って私を強くする

深呼吸吸やつと向こうの岸が見え

弱点を晒すと軽くなる呼吸

あの女が吐いた空気を僕が吸う

本心は吸取紙の中にある

陽を吸って幸せ色になる布団

吸っている方がおたくのお嬢様

人間を吸いこむつもりマンホール

サヨナラは海の匂いを吸うてから

私を幾度押さえる深呼吸

残り香を吸って別れの時を知る

新緑を吸うて私も新しい

うつの日は空が私を吸いにくる

大空をいっぱい吸って脱皮する

吸取紙ほどの素直さがほしい

別々の空気を吸っている夫婦

一世紀前の空気を吸うた亀

軸吟

耳を澄ませばモナリザの呼吸音

藤井寺市 高田美代子

松原市 玉置 重人

尼崎市 田辺 鹿太

池田市 多田 契子

羽曳野市 安芸田泰子

和歌山市 牛尾 緑良

米子市 青戸 田鶴

堺市 村上 玄也

大阪市 井丸 昌紀

大阪府 神野千恵子

大山市 金子美千代

西宮市 片山 忠

和歌山市 古久保和子

橿原市 居谷真理子

米子市 政岡日枝子

宝塚市 丸山 孔一

羽曳野市 徳山みつこ

西宮市 緒方美津子

八尾市 宮西 弥生

河内長野市 植村 喜代

奈良県 渡辺 富子

海南市 三宅 保州

吸い殻に男の策が置いてある

深呼吸吸やつと向こうの岸が見え

言われたらもつと吸いたくなる煙草

ひと呼吸置けば優しくなる答

生きている今日という日に深呼吸

ストローも好きなお方に吸われない

雑音を吸ったマイクが乱れたす

母乳吸うことがこの世の初仕事

鍵っ子のさみしき吸っている絵本

富士山の吸引力に敵わない

逢いたくて千の風吸う広い空

深呼吸吸してから愚痴を聞いてやる

掃除機がストレス吸って動かない

パーティーの賑わい吸った換気扇

ホームステイ異国の文化吸うてくる

向き合えば笑ってしまう深呼吸

深呼吸吸まだまだ青い空がある

反論も吸って私を強くする

千の風吸うてあなたを抱きしめる

深呼吸吸して銀行の前にいる

サヨナラは海の匂いを吸うてから

私を幾度押さえる深呼吸

軸吟

吸い込まれたらしい出口が見つからぬ

出雲市 小白金房子

米子市 青戸 田鶴

八尾市 生嶋ますみ

和歌山市 上地登美代

大阪府 米澤 徹子

熊本県 高野 宵草

出雲市 伊藤 玲子

鳥取市 岸本 孝子

羽曳野市 安芸田泰子

八王子市 播本 充子

米子市 小塩智加恵

鳥取市 福西 茶子

出雲市 多久和敬子

和歌山市 土屋起世子

西予市 黒田 茂代

和歌山市 福本 英子

鳥取県 羽津川公乃

和歌山市 牛尾 緑良

香芝市 大内 朝子

弘前市 高瀬 霜石

橿原市 居谷真理子

米子市 政岡日枝子

連 休

鴨谷瑠美子選



幸せな人よ連休家に居る  
 連休を避けた無職のバスボート  
 子報士も笑顔連休晴れマーク  
 連休の一日当てる休息日  
 風薫る連休五月病になる  
 連休の市民菜園にぎやか  
 お隣は新車買いはる五連休  
 連休を避けて二人で花の寺  
 ひとり身の連休なにもおこらない  
 連休は癒やしの里に身を置いて  
 帰省する子らが連休取り上げる  
 連休で昼寝の父を子が誘う  
 渋滞が続くふる里への道路  
 連休は車に酔って人に酔い  
 連休に咲かず花壇の苦心談  
 美しい国を車が埋め尽くす  
 連休だ遊べあそべと騒がしい  
 飲むことは連休なんてありません  
 連休に行かず仕舞いの旅ころ  
 連休はどっかり夫動かない  
 連休もそれぞれ丈夫留守が良い  
 ゴールデンウィーク主演医までも留守

(編) 洋 房 枝 志 華 子 水 笑 圭 一 郎 幸 雀 晴 翠 雅 明 慕 洋 志 野 英 旺 千 里 歳 子 孝 明 庸 佑 伊 津 志 重 人 かつ 子 庸 佑 千 代 (志)

連休に狙う全集読破する  
 薬局へ連休前に処方箋  
 連休を横目で見てる理髪店  
 ふるさどという連休の青い空  
 連休も待ってた頃は夢があり  
 物干竿がカラフルになる娘の帰省  
 連休の嵐が去った客布団  
 連休へネジを緩めて春の野へ  
 春うららはずむ連休軽い靴  
 連休はキャッチボールをしてやろう  
 山の幸ありがたく摘む連休日  
 連休がフランクになるスケジュール  
 人間に連休という骨休め  
 シャッターを覗く連休晴れ続く  
 死火山となって連休つづきだす

佳 働いて知る連休の有り難さ  
 連休だ行くぞ渋滞なんのその  
 はやばやと連休留守とメール来る  
 お祭りと法事連休ではないぞ  
 連休の旅ジバンクがいけずする  
 人 連休が蟻を怠惰にしてしまふ  
 地 連休をふやし内閣一つ去り  
 天 連休は藤沢周平と過こす  
 軸 連休はほっとひと息山つつじ

隆 盛 雄 々 雌 也 可 住 一 壺 恭 昌 美 千 代 愛 論 公 誠 蕉 子 花 匠 時 雄 洛 粹 一 粹 明 子 秀 四 ル イ 子 登 見 清 充 子 四 郎 高 瀬 霜 石

貸 借

夏目 一粹選



空き部屋を掃除の好きな人に貸す  
 俄雨見知らぬ人に傘を貸す  
 日本は貸したつもりの基地地だけ  
 貸すわけにいかぬ私の妻だから  
 人類に貸しはつかりと言う地球  
 ライバルへ手を貸すようなことはせぬ  
 株主へ貸し借りなしの試算表  
 ミリ程の段差へそつと貸す両手  
 人情を貸してもらった車椅子  
 遺言により貸しませんが金ハート  
 貸す時は多めに貸そう米と塩  
 知恵貸して子にやつぱりの父となり  
 頼まれもせぬに美人へ力貸す  
 貸せる身になって思わず涙する  
 ライバルに薬一本を貸しておく  
 胸を貸し俺に似ると子に教え  
 力貸す力になるか知らねども  
 手を貸して去る青年の背を拝む  
 飯の世に貸すより借るものばかり  
 借りた恩返せぬままに別れの日  
 糸通す母さんに目を貸してあげ  
 自販機の故障に百円貸しておく

歳 明 宗 和 正 四 秀 男 次 郎 圭 一 郎 脇 登 典 子 茶 子 四 郎 一 風 蜂 朗 ト ミ 子 強 一 檳 榔 樹 實 岳 水 照 彦 茂 代 藤 朗

反省は貸してしばらくして起きる  
貸し借りの出来ないものに靴がある  
貸した山松茸出たと聞く噂

悦男  
千代  
像山

日本の優れた頭脳すぐに貸す  
タバコの火貸し返された事がない  
少年の夢に優しく耳を貸す

孝一  
恭昌  
花匠

図書館ができたら消えた貸本屋  
八ちに軒タモに庭の木貸している  
思いっきり笑顔貸します返してね

時雄  
みつこ  
よしこ

手を貸して一緒に乗った泥の舟  
貸す方も火傷しそうな火の車  
忘れてた貸しを戻され拾いもの

輝夫  
たん吉  
幸雀

手を貸して天狗の鼻にさせた悔い  
畑に出て野菜の愚痴に耳を貸す  
大切な友にお金は貸しません

美義  
美津子

住

膝貸した猫へ身の上話など

幹子

出世払いほごげついた匂いする

蕉子

爪に火をともし知恵なら貸せませんが

久仁雄

頭下げ返してもらう貸した金

浜丘

貸す方も貸す方袋を握えられる

充子

貸し借りがあると目と目を避けたがる

猿杏

地

知らぬ間に国にお金を貸している

霜石

天

一本の藁だが友が息をつく

富士薫情

軸

人生の謎を貸し借りしませんか

マンシヨソソ

江見 見清選



ペランダの野菜に聞いてもらう愚痴  
壁隔て誰も気づかぬ孤老の死  
億シヨソソを金持ちそうに見て回り

深雪

億シヨソソじゃ隣のお菜わからない  
外孫にマンシヨソソサイズの鯉のぼり  
表札の無いマンシヨソソでひとり住み

柳弘

子と同居しよかマンシヨソソ借りようか  
マンシヨソソが狭くて会話しむ親子  
鳥たちの眼でマンシヨソソに住み慣れる

一風

ふるさとは遙かマンシヨソソ夕暮れる  
マンシヨソソで同居と呼べど来ない老母  
マンシヨソソが来てよみがえる無人駅

蜂朗

マンシヨソソの夜景最後はこと決め  
マンシヨソソも老母は矢張り煮ころがし  
ワンルームマンシヨソソという蚕棚

四郎

マンシヨソソのゴミ出し外出着に着替え  
億シヨソソに住んで東京弁になり  
娘が借りた豪華マンシヨソソ気にかかる

志華子

マンシヨソソに自殺禁止と貼つてある  
マンシヨソソの合鍵猫が銜えてる  
マンシヨソソのひとり暮しに淡い恋

霜石

マンシヨソソに花火のための友が居り  
マンシヨソソに馴染めぬ老母の失語症  
マンシヨソソに住んでタミフル飲みません

晴翠

マンシヨソソのどーんと建った谷に住む  
カーテンを開けて下世界の動き見る  
名医いせんかマンシヨソソ骨粗鬆

喜子  
のり子  
みつこ

マンシヨソソで暮らしてみたい養子取り  
マンシヨソソの暮らして慣れたスニーカー  
ペランダの花マンシヨソソに四季の彩

百合  
充子  
あずま

買えなかつたマンシヨソソの灯を眺めてる  
マンシヨソソの窓から飛ばす春のうつ  
マンシヨソソを揺らさぬように忍び足

洋子

マンシヨソソの家で出せないお葬式  
子等の声弾けマンシヨソソ昼の顔  
マンシヨソソはいいな草抜きああしんど

遠野

死後私骨マンシヨソソへ入居する  
マンシヨソソに朝日とられた陰に住む  
マンシヨソソの噂をつれたエレベーター

巴子  
美千代  
ばつは  
信子

住

マンシヨソソを踏み台にして雲が湧く  
マンシヨソソの最上階に住む宇宙  
マンシヨソソに馴染みましたかお仏壇

正和

マンシヨソソの噂チエーンの幅で聴く  
マンシヨソソのローンと余命見くらべる  
マンシヨソソの窓からもらう投げキッス

朝子  
とし子  
高明

マンシヨソソに馴染めぬ老母の失語症  
マンシヨソソに住んでタミフル飲みません

重人

マンシヨソソに馴染めぬ老母の失語症  
マンシヨソソに住んでタミフル飲みません

幹子  
藤朗

天

マンシヨソソに馴染めぬ老母の失語症  
マンシヨソソに住んでタミフル飲みません

安芸田泰子

# 初歩教室

題一 アリバイ

三宅 保州

私の川柳観から(三)

☆もう一つの三要素とは、ウィット(機知)  
ユーモア(良質な笑い) ベーソス(哀感)  
だと思ふ。

☆次の、川柳の3Sを心掛けた作句姿勢を持つことを提案したい。センス(感性)、スタイル(形)、スピリット(心)。

☆川柳の時間(作句、鑑賞、句会等)を毎日のリズムに習慣として採り入れること。そして、川柳に拘わらない日は気になって落ち着かぬようにならばしめたものである。

☆毎日、川柳を食べていないと飢餓感を覚えるようになればしめたものである。川柳を食べるとは、作句、鑑賞、句会出席等である。

☆作りすぎた句より、作り足りない句(余韻のある句)を心掛けるべきである。

☆説明のしすぎは、駄目押しで白無しになる。☆のめり込み過ぎた句は解り難い句になる。

## 【同想句】

多かつた同想句は、サスペンスと朝帰りに  
ついでのアリバイの句です。誰もが思い浮か  
ぶ発想を佳句にするのは難しいものです。

「サスペンスドラマのアリバイの句」

楽しみはアリバイ崩すサスペンス 智加恵

アリバイを疑って見るサスペンス 玲子

アリバイが見え隠れするサスペンス 美はる

出来過ぎのアリバイ崩すサスペンス 章司

アリバイを崩してドラマ大団円 文香

サスペンスアリバイの跡読めてくる 俊子

捜査官アリバイ崩し四苦八苦 靖博

アリバイを洗う刑事の靴の減り 弘子

アリバイに苦心のドラマジエンド 信雄

アリバイが崩れてドラマ終了し クツクバラ

次の句は同想でも発想がユニークです。

アリバイを解くまでトイレ我慢する(河)洋子

「朝帰りのアリバイの句」

アリバイを考えながら朝帰り 忠子

アリバイを自分で作る朝帰り ヒロ

独り身のアリバイ不要朝帰り(川)洋子

口紅がアリバイ崩す午前様 巴子

次の句は同想でも工夫が見られます。

アリバイを連れて帰宅の午前様 幸

【添削・批評句】  
原アリバイのはつきりしない人生さ たん吉

視点を少し変えてみませんか。

添アリバイの無い人生で面白い

原 残業をアリバイにして呑んで来る きぬ子

よくある発想すぎます。それを逆手にして。

添 残業という言い訳は古すぎる

原 アリバイがあるからこれで安心だ みさと

当たり前すぎるくらい。

添 アリバイを証言してくれぬ相手

原 女房からアリバイきかれ声でない

添 アリバイの追求容赦しない妻

原 アリバイを依頼の友が妻と会う

添 アリバイを頼んだ友が妻と会い 松風

原 親友がアリバイしない妻に託び

添 頼みの友がアリバイ嘘と妻に託び 孝明

原 アリバイを崩した時の妻の笑み

添 アリバイを崩した妻は満足け

原 アリバイを信じる妻を信じとく

添 アリバイを信じる妻を裏切れぬ

原 アリバイが崩ればバアの花名刺(中)信子

添 アリバイの崩れはバアの花名刺

原 アリバイに桜を連れて人酔わせ

添 アリバイを頼んだ友が酔い潰れ

原 証人はいつも決まりの悪友が

添 悪友の証言信じられますか 孝子

原 アリバイがメモ一枚で消えてゆく

添 一行のメモでアリバイ暴かれる 真一

原 悪事ではつくるアリバイすくばれる 稔  
 添 アリバイもいつかは崩れ去る悪事  
 原 アリバイが無いもう覚悟しなければ わこ  
 添 開き直りアリバイなんか無いと言う  
 原 アリバイの指紋無数にあつちこち 尚  
 無数とあつちこちが重言気味です。  
 添 アリバイも指紋一つに崩される  
 原 定年後アリバイづくり種が尽き 實  
 添 アリバイの種見つからぬ定年後  
 原 検問にあつて事件のあるを知り すみれ  
 「アリバイ」の句と言ひ切れぬのでは。  
 添 検問をアリバイにして言ひ逃れ  
 原 記念にと置いた切符がものを云う 冷子  
 添 アリバイに記念切手がものをいう 雅明  
 原 いざという時に必ず留守にする  
 添 いざというときにアリバイ消えていた  
 原 夕食は家族と共にアリバイを 弘泰  
 添 一家団欒いつもアリバイある夕餉  
 原 惚けぬよう時にアリバイ出してみる 勝久  
 添 アリバイを考えてみる呆け防止  
 原 休日には足跡も消し眠りこけ かずみ  
 添 休日にはアリバイもなく眠りこけ  
 原 にせアリバイいちご大福一つ食べ みち代  
 添 いちご大福食べてアリバイ崩れ去る  
 原 口の端あんこアリバイ崩される キヨミ  
 添 口に付いた餡にアリバイ崩される

原 アリバイを残さないよにデイトする こずえ  
 添 アリバイを残さぬように逢つている  
 原 怪しいな昨日の事を喋らない 麗  
 添 昨日のアリバイも忘れたと惚けられ  
 原 聞かれても思ひ出せない三ヶ前 宇乃子  
 添 三日前のアリバイ思ひ出せません  
 「少し工夫すると佳くなる句」  
 原 アリバイを思ひつかない事おきた 美紗子  
 添 アリバイを思ひつかないことばかり  
 原 アリバイがはつきりせずに迷い道 光子  
 添 アリバイがはつきりしない迷い道  
 原 美しい国にアリバイなど無用 昇  
 添 美しい国にアリバイありますか  
 原 何年も経つてアリバイ認められ 武  
 添 潔白のアリバイ既に遅すぎた  
 原 病院にアリバイ残す車椅子 (白) 信子  
 添 アリバイを知る分身の車椅子  
 【佳句】  
 疑われぬよう土産買つてくる 亜希子  
 アリバイを探る小石を投げてみる イセ  
 アリバイを信じて妻は米を研ぎ 藤朗  
 アリバイを頼んだ友も二日酔 孔一  
 疑いをかけられぬよう友と居る 恭代  
 削除キー押してアリバイから抜ける 幹子  
 ケータイの履歴必死に消している 柳歩  
 ニートですアリバイなんてありません 浩三

白酒のアリバイがあるお難さま 柁子  
 アリバイを鵜呑みにされて不眠症 起世子  
 アリバイは流れに任す根無し草 (高) 洋子  
 アリバイの無い日が続く予定表 寅次朗  
 善人にアリバイなどは無くてよい トミ子  
 猫だけが僕のアリバイ知っている 紀雄  
 アリバイから逃れて明日の風を読む 利子  
 【今月の推せん句】  
 街に居てゴルフシューズが汚れない 笠原乃りこ  
 「アリバイ」を詠み込まず「ゴルフシューズが汚れない」という具象の見つけが良い。  
 アリバイはガラス張りですしやぼん玉 木村 徑子  
 シヤボン玉のアリバイはガラス張りという着想が抜群であり、メルヘンのある佳句。  
 アリバイはあるが言えない訳がある 中宇地秀四  
 二云うに言えないジレンマとミステリアスまで伝わつてきて、納得させられます。  
 アリバイのある時何も起こらない 藤本 直  
 単刀直入に意表を突かれる佳句です。  
 【私の句】  
 アリバイに私の鱗落としとく  
 アリバイを知っているのはお月様  
 (登載洩れの方には役員が添削して返送します。)

# 秀句鑑賞

同人吟 仁部 四郎

— 4月号から

知らぬまに変わってましたみどりの日

三宅 保州

旗日には旗を掲げた家がある

志田 千代

「連休をふやして内閣一つ去り」という句を5月号の一路集あてに作った。

いつの頃からか、「可動式連休」とでも言いたいものもあるが、連休は学校には迷惑である。授業時間割担当者の心労というものがあつた。授業時間割担当者の心労というものがあつた。授業時間を、土曜日からの三連休とどのよう

に組み合わせるか、御存知ではあるまい。

「知らぬまに変わって」しまふ「旗日」とは、いかなるものであろう。その時その時のお上の意向であり、時の流れと言えはそれまでのことなのか。

八月十五日を「終戦の日」として、休日・祝日・祭日になぜしないのか。私には全く不可解なことなのだが、三宅さんや志田さんのお考えはどうだろうか。

私の心をゆさぶる二句である。

利子代りティッシュと暦もろてくる

江見 見清

暦までもらつてきたとは素晴らしいことと言ふべき。よほど顔が利いている人らしい。

年金生活者として日銀総裁の顔に注目して

いる人は、川柳塔の詩友・同人にも多からう。せめて、コンマの左に利率を表示する数字がゼロではない日が来ることを私も待っている。

ところで、下句の「もろてくる」は、「むしり取り」とも読めるかもしれぬ。そんな失礼な想像もしてみたい句。

不祥事が起きて制度が改まる

永峰 宣子

制度も法律も、それまでのもので充分なはずと思つている人は多い。心さえ入れ替れば、不祥事は予防されるのだ。この句の直線的な表現には深い諦めもあるのか。

うまいもの何かと問えば卵飯

板山 まみ子

炊きたての白い御飯で卵飯とは、まことに御同慶の至りである。国民学校の少国民にとつては憧れであった。

手本にはされず見本になつて

山田 葉子

「橋の孤丁稚に見せてあれだぞよ」を思い出し、下句でわが身を照射された。

川柳歴は三十年ぐらいいなる。川柳観を問われたら、腕を組んで宙を見つめることになろうが、「うがち」と「社会性」という言葉を答えて用意したい。

その二つのこのうち、「社会性」についていろいろ発言すると、あまり歓迎されない。「だからお前の句は生煮えが多い」と言われる。新聞の三面記事も、おもしろおかしい表現で川柳に仕立てることも、「社会性」の一環ではあるが、私には模索したいものが他にもある。七十五歳のこの期に及んで、戦後民主主義の長所を主張したい元高校社会科の教員のクセが抜けない。

題詠の選にくらべると、当然、雑詠の選はとでも難しい。同人吟と水煙抄の毎月の秀句鑑賞を、眼を洗われる気持ちで読んでいるが依頼を受けて居すまいるを正す思ひであり、聞き直るような気持ちでもある。

一句一句に、背景なり歴史があると思う。他人から見れば、軽い句でも、作者としては大仕事である。しっかりと読みたい。

歳ですと言われてからの万歩計

岩崎 公誠

二度三度とつくづく読んだ。「ピンピンコロリ」とはいくまいし、医療費は高くなるばかり。せめてもの自衛策は万歩計ということになるが、それも家人の監督下でのこと。

スケスケのドレスで冬の謝恩会

津守 なぎさ

つい先日、この光景を見かけて驚嘆した。テレビの女性アナの服装にも感心しているが「前あきのスカートに組む強い足」は私の旧作で三十年は経過している。

辛抱た大人になれと酌がくる

藤井 正雄

昭和三十三年までは、午後五時前の職員室で酒が呑めた。教頭の席は別室にあったわけではない。

その酒は、宿直室へ続くことが多かった。職員会議の総括がそこで完了した。

むかしむかしの神話である。

この豆も遠い国から来たのかな

堤 植代

わが佐賀県は農業県で、地産地消を官民ともども大声で叫んでいる。有明海もあるがムツゴロウには御無沙汰で、今夜のソラマメ(三百グラム九九円)は中国産である。

大過なく決まり文句で職を辞す

加島 由一

「ソレデイイノダ」というマンガのセリフがある。いつかの暮参の折に、親がそのことを喜んでくれたような気がしたことがある。

本人にはしばらくは不満が残ることもあると聞くが、私は退職して十年めぐらいに、オヤ不満があるのかと思いついて、一年ぐらいで消えた。

なぜポスト赤いか先生困らせる

酒井 一壺

高校生くらいまでは、そのようであつてもいい。そういう生徒は、大人になつてからの同窓会でも愛される存在になる。

当今のお子様は、ケータイで回答を入手するのがジョーシキであろう。

女難の相と言えば男はちよろいもの

寺川 弘一

知り合いの女性に、すぐ男性にサウル人がある。何かものごとを頼まれそうになつてアブナイと思つていると、サワラレていることが多い。女難の相だろうか。

真つ白なYシャツ今日は大事な日

山口 光久

閣議で総理大臣を迎える際の、起立と同じくらいに大事な心がけの句。上句に賛成。

手を叩く役目の会へ出て来よう

武田 帆雀

失礼な想像を逞しくすれば、結局のところは、途中で、別の用事をつくり出して、出席を取り止めたのではないだろうか。「出て来よう」と決心するまでの心のうちは、私もよくわかるつもりである。

「定年後二年視線の折れる癖」という句を作ったことを思い出したことである。

お通夜に長靴ばかり脱いであり

土橋 はるお

ずっと受け継いできた日本人の心のいとなみが、中七に精妙に表現されている。

設備の整った斎場が、いわゆる片田舎にもあり、クルマもある時代に、この情景が川柳になつたとは、まことに心安らふことである。

お止みなさい監視カメラが見ています

福島 万年

スーパーで買物をすることは私にも珍らしいことではない。頼まれた品物を買うときはカゴを持つて店内を回るが、ぶらりと入つて予定のないモノを買うときには、カゴを取りに入口までは戻らない。その時が、監視カメラのことを思い出す瞬間である。他愛のないことだが、思い当たる人はありませんか。

議場には監視カメラはないそうです。

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—4月号から

田中みね

四角から丸へと愛が駆け出す

宇野幹子

現在進行形の愛のドラマを巧みな言葉の言い回しによって成功しています。上達著しい作者に相応しい一句となりました。

元氣なら笑い飛ばせる事なのに

原田すみ子

身体は正直なものです。健康であれば大抵の事は笑って済ませることも。

ファッションショーつんつん歩くモデルたち

神野千恵子

あそこまで気取らなくてもと思うのは私人でないらしい。その上笑顔なし。「つんつん」がいいですね。

胃の中の四角が溶けぬまま残る

辻内次根

許さねば、忘れなければそんな事は十分わ

かっているはずなのに…。

それぞれの夢が翔び発つ春の駅

加藤権悟

希望の春、巣立ちの春、それぞれがそれぞれの夢や希望を持っていざ行かん。その行く手に幸多からんことを念じています。

夢だったああよかつた胸さする

百田幸

すべての歯がガリガリと音を立て碎けたり、ある時は自転車ごと川に転げ落ちたり、はっと目が覚めああよかつた夢だった。同感！

趣味なのに何故かノルマがのしかかり

高山清子

共感を呼ぶ句。ノルマを感じない人はいないと思う。それも趣味の道で。

子沢山ご飯しっかり炊いてます

山岡紀子

少子化を嘆く時代にあつて何とも頼もしい。陰ながら応援しています。

カレンダー印つけても忘れてる

橋谷静江

まるで私ではありませんか。カレンダーへ赤ペンでしっかり。ところが…。

日が暮れた明日の保障のないままに

原煩箇児

明日の朝、目覚めると言う保障はない。に

も拘らず彼是と明日の用意などして…。

カニツアー飲むより手先忙しい

若月祐作

店側にとつてはお酒やビールもつと飲んで！ところが客はそうはゆかない。何しろ蟹を捌くことに忙しい。この場に至つては無二の友であれ親友であれ、皆な寡黙の人となる。

ロレックス時は同じく二十四時

坂部かずみ

不孝者の僕にもあつた遺産分け

寒川武

前者は穿ち、後者はベーンソス、いい句です。

幸せなのにこの寂しさは何だろ

柏原夕胡

伴せの真つ只中において不安（みね）。夕胡さんも同じ事を思つてられるのですね。でもこの寂しさはどこから来るのか、謎ですね。書くことも口にも出さぬ事がある

村中悦男

この積み重ねがストレスの原因となるのですね。許されるならば思い切り胸の内を曝け出したい。あの世まで持つて行くなんて…。

川柳に遊んでもらう年が明け

上垣キヨミ

これぞ川柳、ひと言脱帽。こういう発想もあるのですね。きっと楽しいお方だと思つて。「川柳に遊んでもらう」心憎いですね。

■各地句会だより

# 川柳塔みちのく

小寺花峯

昭和の最後の年となった昭和六十三年七月三日、工藤吉吉、波多野五楽庵、斉藤劬名氏を発起人として十二名で「川柳塔あおもり」が発足した。その後五周年を契機に「川柳塔みちのく」に改め会員誌も年三回から四回の春夏秋冬に合わせた発行を続けている。題字は当時の川柳塔社（大阪）・西尾菜主幹からいただいた。会の特徴は、毎月の定例会と隣接吟社との合同新年句会や、花見句会、更には茸を食べる句会、忘年句会を開催し作句の勉強と会員の親睦を図っている。定例会は居酒屋で開催し、常時二十人前後の参加者である。句会の後には楽しい懇親会が待っている。家庭や職場で味わうことの出来ない和気あいあいとした楽しい雰囲気包まれる。句会は弘前市内を中心に開いているが、現在の会員は四十名で、県下全域に散らばっていることから、年に一回は弘前市を脱出して開催するように努めている。さらに「超巨玉」

として会員の個人句集（百句集）を発行している。これは、小さな句集を読んでいたことにより、川柳の普及啓蒙と、川柳をやったよかったという自分史の記録を目的に現在までベテラン、新人を含めて十九人の個人句集を発行している。

「小さな柳社には、小さな思いやりがある。小粒なりにスパイスを利かせた個性のある川柳塔みちのくにしよう」が五楽庵・前主幹の口癖で、今後もこの精神に基づき、小さな明



かりをいつまでも灯し続けていきたいと思っている。

今年には川柳塔みちのくが誕生してから二十年を迎える。

二十周年記念句会を六月三日に弘前市に於いて開催します。全国の川柳塔同人の皆様に参加をお願いします。情緒あるみちのくの旅を堪能して頂きたいと願っております。

当日参加者の一句から

一寸ひと言足してびりりと夏大根  
 からみつく金に手錠がVサイン  
 行き付けのネオンの下に妻が立つ  
 良い夢を見た時顔も笑ってる  
 正月だ楽しい夢を見て見たい  
 奨学金で卒えたと燥ぐクラス会  
 嫁ぐ娘に嬉し涙拭いている  
 やんわりと援助断る親の意地  
 自衛隊の援助が決め手雪まつり  
 身も心も逮捕されてる片思い  
 夏祭りみんなの援助ネプタ出し  
 古傷に抱く僕だけの北斗星  
 今宵また慚愧の酒を独り酌む  
 孫が来る逮捕されて馬になる  
 川底でひっそり春を待つ岩魚  
 逮捕するのはよしましよ花泥棒  
 こっそりと貧者の一灯置いて来る

ヒサ子  
 あすなろ  
 成柳  
 てる  
 隼人  
 順風  
 銀波  
 ふさゑ  
 花匠  
 愁女  
 井蛙  
 黙人  
 岳水  
 花峯  
 慕情  
 五楽庵



# 門谷たず子さんを偲んで

浅野 房子

三月二十八日の夕方食事の支度をしているとリリーと電話のベル、それは牧淵富喜子さんからで、たず子さんの訃報を告げるものだった。

えっ！そんなと絶句、そして涙、病気はされていたがこんな急に……こうして私が追悼文を書くなんて、私を書いてほしかった。

思えばたず子さんとの交流は随分長い。女学校四年、五年、そして研究科二年、あとは戦争をへて終戦後から復活したおつき合ひである。

一年に一度はクラスメート四、五人と一緒に国内旅行、それからは海外へもみんな彼女が段取りをして連れて行つて下さった。ハワイ、ニュージーランド、オーストラリア、今アルバムを見ながら思い出は尽きない。

そして、六十歳の時一緒に川柳をしないかと誘つて下さった。女学校時代からの友人四、五人と共にだった。

先ず栞先生の教室で学び、鬼遊先生、薫風

先生に教えていただいた。

先生は一流、生徒は三流と笑ったものである。それから京都の「京かがみ」伊藤人仙先生の句会、一か月置きに京都のあちこちのお寺などでの句会、あとは皆で食事をしながら楽しい一日を過ごした。

それと神戸の毎日新聞社の教室へも通つた。夕方済むと元町を散策し、中華街へ繰り出して皆で夕食、川柳の話に花が咲きそれも楽しみの一つだった。

そして全没でも全国大会や、国民文化祭など、旅行気分で行き皆縁と交流が出来て楽しかった。そしてそこにはいつもにこやかなたず子さんがおられた。

たず子さんは熱心で、私があきらめてさつと出向しても何回も何回も推蔽されていた。決して手を抜かず最後まで川柳塔四月号にも、ちゃんと投句されている。

お通夜も葬儀も終えた今、静かに結婚記念に上梓された句集「花ごよみ」と、その五年

後の句集「花筏」を拝見している。その中から幾つか抜粋させていたたく。

金婚のなさけをつづる花ごよみ  
縁あつてふたりで乗つた花筏

子には子の暮しがあつて車間距離  
立て札どうりに行けば浄土に着けますか

冬の虹恋に恋して女です

甘栗がひからびているひとりだ

多情仏心ラストダンスは決めてある

そしてドラマは二つ残つたためし茶碗

昭和時代の傷とわたしの傷があう

夕陽落つ明日にはあすの絵がかける

この私の一人住む離れから庭の沈丁花が見える。そしてよい香り、親友で無二の友を失つた私はひとり生きるしかない。けれどたず子さんはきつと心配して見守つて下さっていると思う。今は御冥福を祈るしかない。

あの世への旅も誘つて欲しかった 房子  
釋 妙 瑞 合 掌

## 柳 歴

昭和五十四年 福永清造氏(姻戚)に師事

昭和五十五年 京かがみ 会員

平成元年 川柳塔 同人

平成三年 西宮北口川柳会(入会)

句集発刊「花ごよみ」(平成五年)

「花 筏」(平成十年)

## 昔の名前に戻ります

薫風さん新子さんの

若かった頃

棲世改め 早川 清生

古郷へ廻る六部は気のよわり 古川柳  
この句いろいろな解釈があり、いろいろな状況が想定されるのであるが、私は故郷に居づらい事情があつて、全国六十六か所のお寺を廻っている巡礼が、年をとるか病いになるか、何か気弱になることがあり、つい故郷の方へ足が向いていとと解している。私の川柳もむかし清生の名で長い間やつてきて、いわばその名が川柳における私の古郷なので、どこかに気の弱りがあるのか、いつか棲世から清生へ戻りたいという思いが生じていた。

先日、朝刊を開いて時実新子さんの訃を知った。愕然とした思いである。先年薫風さんを送ることがあり、私のはしぎ廻つていた頃の昭和が、音たてて崩れる感じがする。中央公論の編集長だった粕谷一希さんに「作家が死ぬと時代が変わる」の好著があり、書名は同社の社長だった嶋中鶴二さんの言葉に由

来するようだが、この言葉は文芸においてことに直截的である。薫風、新子両氏が去つて川柳における一つの時代の終焉を感じる。

実は新子さんと私は同年生まれ、川雑への初投句は薫風さんが昭和三十一年だが、私はその三年ほど前から作句を始めており、新子さんも同じくらいでなからうか。薫風さんの柳界活動は実に積極的で各社社の句会を渡り歩き、横断的に各社の俊秀と親交を結んだ。

私も呼ばれて堂島にあつたお家へ参上したりして、そこで新子さんを紹介された。薫風さんは彼女が無名の頃から卓越した資質を見抜いていた。余談だがかなりの後日彼女の文集が届き、挿入のメモに「ごぶさたしておりますが、ホントハ、コッパズガシクツテミナイデホシイノデス 新子」とあつた。

句集の上梓は薫風さんが一年早い。昭和三十三年の不朽洞入門だから五年後に句集「有情」が出たのはまさに驚異的な出来事だった。私など句集はあたかも竣功記念碑のように、句業の終わりに総決算として出版されるものと考えていたので、その粋な装丁に驚き、いつの間にそれだけの作品が用意されたのか充実した内容に、いい意味で嘩然とした。彼生涯の代表作になった作品

四面楚歌 故郷は豆の花の頃 薫風  
キリストの肋に似たる昼寝をし

などが見える。早速感想を書いて送つたら、それが川雑の誌上に載り、彼のそのあとの句集「檸檬」と「橘高薫風川柳句集」にも書評を書くようにとの依頼があつた。彼の三部作それぞれにそのような役割を与えられたことを稀有の幸いと感じている。

ことにその三冊目は彼の句業の集大成で、岩井三窓さんとともに図書紹介という形で書評をさせて頂いた。実はまだ薫風子と号していた頃の彼が「新進作家を語る 三窓・新子・清生」と題して、川雑の誌上に作品鑑賞を書いてくれたことがあり、当時気鋭の若手たちの交友状況が活写されていってなつかしい。翌年、新子さんが満を持して柳壇へ放つた句集「新子」はその斬新さ奇烈さが柳壇だけでなく、社会的にも大きな反響を呼んだ。

とかげの背光り夫の手が這うよ 新子  
この家の子を生み柱光らせて

新子さんを迎えて天上では華麗な交流が再開されていると思う。耳をすませば寺尾俊平さんも加わつた彼らの声が聞こえそうで、彼らにエールを送る意味でも彼らに通じやすい昔の名の清生に戻つた方がよいかと思う。

薫風新子昭和の棺は俺も早く 清生

## 川柳雑誌400号

## 特集を読んで

山口 光久

川柳塔950号は平成十八年七月に迎えたがこれを遡ること四十六年、昭和三十五年九月に400号を迎えている。表紙には「川柳雑誌」四百号特集とあった。B列5号の大きさで77頁、多少色褪せているが貴録のあるものである。

光輝ある四百号を迎えての座談会には路郎、葎乃、生々庵、緑雨、白柳、葉、古方の諸先生が懐かしく語っておられる。当時は群雄割拠の時代でいろいろな結社が生まれ、これでは駄目だと「川柳雑誌社」を起こし、ズバツと「川柳雑誌」とされた。ところがこれには自分とこだけを「川柳雑誌」とは憎越だと怒って抗議文をよこした人もあった。路郎は敢然と売れる雑誌を目指し、読んで値打のあるものにした。また、77頁の柳誌には29の企業や商店の広告がある。

川柳雑誌の中でわたしの目に留まったもの

の一つに句評リレーという欄がある。四人の先生方が一つの句についてディスカッションされている。先生は武部香林、田中烏雀、河相すむ、高鷲亜鈍の四氏である。

悲しみに勝つたら無口になりました

蛙皇子

香林——悲しみにうち勝つまでのたたかいが無口にさせた、というのだろうか。「勝つたら」のたりに引つかかった。素直に、勝つてとした方が調子よく、句意にも差支えないと思う。……悲しみのために、無口になってしまうという、自然な観方もある。……この句の勝つは克服の克つと見るべきで、そうすると少し意味を異にする。……

烏雀——普通ならば明るくなりそうなるものを、逆手に無口にしてしまった。そんな場合の無口には一層深刻なものがあつて、作者はその感慨を表現したかったのだろうが「たら……」になりました等と言葉調でやったので、よそよそしく迫力を著しく殺いだ。その為、何か知ら作り上げた感があつて、取材とは逆に真実味に乏しいものになってしまったと云う感じがする。

すむ——意識して「克つ」でなく「勝つ」としたのでしょうか。単なる悲しみによる無口でなく、その間の抵抗、葛藤と云つた心の

動きが、勝つたら無口になりました、の表現になつたものと考えます。なりました、で勝つには勝つたが遂に悲しさを克服できなかつた淋しさと云つたものがただよっている……

亜鈍——以上でこの句評は尽きている。強

いて書けば前期三者の句評に突き当たつてしまふのである。△勝つたらVの字余りを入勝つてVの訂正(香林説)賛成。一字一句慎重に扱つて欲しい好例。(以上原文のまま)

400号には現在も川柳塔で活躍されている方々の作品もあつたので紹介したい。

宮口 笛生

終列車一駅毎の空席よ

ネギ坊主畑の隅まで来てた春

森下 愛論

借りるだけ借りて明日の風を待ち

妻にない魅力求めて街へ出る

遠山 可住

本論に入った頃に時間切れ

海見えて棚の荷物を盗られたり

河井 庸佑

ずぶぬれになつても遠足楽しそう

出来ぬ子の親の期待が大き過ぎ

早川清生(棲世)

茶の師匠散歩の好きな夫待つ

他所者のかなし景色ほめて住む

# 第31回 全日本川柳2007年栃木大会

日時 平成十九年六月十日(日) 午前十時開場  
会場 鬼怒川温泉あさや コンベンションホール華厳

〒321-2598 日光市鬼怒川温泉滝813

TEL 0288(77) 1111

宿題 第一部締め切りました

第二部(当日投句) 十一時十分締切

「刻む」 久保田 元 紀選

「蔵」 小金沢 綏 子選

「少ない」 金子 美知子 選

各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者 塩見 草映・齋藤 大雄・西來 みわ

田中 新一・佐藤 美文

参加費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)

表彰 文部科学大臣賞・参議院議長賞・川柳大賞

大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

お問い合わせ先

〒321-0201 栃木県壬生町安塚924-110

川俣秀夫方 日川協栃木大会事務局 宛

TEL 080(1037) 8980

FAX 0282(86) 1755

\*

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ  
全日本川柳栃木大会実行委員長 高梨 宗路  
全日本川柳栃木大会実行委員長代行 吉本 瘦児

## 自費出版 川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします。

## 美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

# 本社 四月句会

四月七日(土) 午後五時半  
アウイーナ 大阪

桜満開となった夜の句会、あいにくの雨という事もあり90名の参加によって開催された。受付で西出楓楽理事長の句集『天秤座』が自身の手により配られた。

はじめに三月に亡くなった同人門谷たず子さんを偲んで一分間の黙祷を捧げる。

この四月は橘高薫風名誉主幹の三回忌に当たり長男の充氏が父の思い出を語った。

四月号の私の宝ものを読み、父からの宝物は、幼い頃父に連れられて川柳大会やいろんな所と一緒に行き見聞を広げたことだと思ふ。昨年は家族で弓削にある父の句碑を見に行った。亡くなる少し前車椅子の父と花見をしたこと、人の悪口は決して言わぬ父で祖母、母もみんな麻雀が好きだったこと等思い出を話す。今頃はあの世で母と桜見物しているでしょうと結んだ。(義記)

月間賞は藤井寺市の高田美代子さんに輝く。

(司会)昭・美籠 (脇取り)月子・蕉子  
(受付)理恵・五月 (清記)直樹

## 席題 「裏目」 籠島 恵子選

裏目とは良いことですと広辞苑  
大声の連呼裏目になる選挙  
九回裏投手を代えたのが裏目  
正論を言ったばかりに叩かれる  
出しゃばらず妻の裏目で酔っている  
こけた児を抱きおこしては叱られる  
説教が過ぎて笑顔も消えていた  
一言の世辞が裏目に出てしまふ  
あせつたらあかん裏目も我慢しよ  
言い訳のし過ぎにアリバイが揺れる  
裏目から見た世の中が面白い  
言い訳をするほど裏目すけてくる (志)千代  
お豆腐の裏目に答えあるらしい  
跡継ぎが修業先から戻らない  
この裏目どんでん返しにしてみせる  
近道を行つたら工事中の札  
手あみ糸裏目ばかり拾う夜  
前の晩練習しすぎたのが裏目  
言い訳がすぎて裏目になるお詫び  
たつぶりの愛が裏目に出てしまふ  
裏目から見た忠告的を射る  
リハビリに手を貸し医者に叱られる  
本心は裏目にそっと秘めている  
赤ちゃんのポスト裏目にならぬよう  
目くばせが裏目飲み代出された  
四季報をめくると雨が降っている

岳人 紀乃 則彦 希久子 光久 倅子 月子 月子 尚士 倫子 遠野 求芽 紀乃 理恵 富美子 扶美代 集一 東吉 光久 和夫 瑠美子 義

年金分割妻はしなくてよいと言う  
裏目にはならぬ生き方考える  
捨石のつもり裏目と思わない  
ちよいワルを気取りポリスに睨まれる  
早い目に家を出たのにメモ忘れ  
裏目にも損害保険かけておく

佳  
元氣さが裏目になった予定表  
ケイタイが裏目一日縛られる  
反対した意見がいいと役がくる  
いさぎよく裏目はすぐにシユレッダー  
親切で譲つた席が空いたまま

人  
酒煙草やめさせたのにもう逝つた  
地  
衣食住足りて裏目を考える  
天  
一巡りすると裏目も消えている  
軸  
迷つたらいつも裏目のあみだくじ

兼題 「さばさば」 太田 扶美代選  
辞表出しさばさばしたと負け惜しみ  
お局が辞めて明るいパントリール  
さばさばとした性格で親しまれ  
思いつき泣いてさばさば湯の宿に  
専業主婦忘れさばさば湯の宿に  
火葬場の風さばさばと無機質に

弘一 求芽 幸雀 東吉 昭 美籠 楓楽 見清 千里 蕉子 柳弘 能子

好 時雄 庸佑 賢子 シマ子 弘一

肩書も面も外した棺の顔

さばさばとし過ぎてお金残らない

年金を山分けにしてノラになる

離婚会見さばさばしてるのは女

ホームレス明日は知らない高いびき

さばさばとした性格でもっている

さばさばと語る背中が泣いている

年金も分割さばさばした別れ

さばさばとしたが居ないと淋しいな

泣くだけを泣いて明日へ出直そう

バツサリと切って出直す春の髪

奥さんの方はさばさば生きてはる

タンスからみなあ追い出した古昔広

離婚印押ししてさばさば始発駅

あきらめたらしいさばさば飲んでる

さばさばとしての妻にもある嫉妬

ローン終えさばさば気分いい気分

もやもやはその日のうちにみんな吐く

黒髪をバツサリ恋を切り替える

ケセラセラ明日の風に身を任す

しがらみを断つてさばさば風と旅

完敗に敵の腕前褒めてやる

さばさばとしすぎた人で物足りぬ

仲なおりさばさばとして大ジョッキ

竹を割ったようなお人で杜のホープ

さばさばと子離れをしたふりしてる

佳

さばさばといかぬがタバコ止めてます

幸雀

孝一

尚士

利昭

(欠)千代

三喜夫

岳人

倫子

天笑

洋

朱夏

ダン吉

直樹

律子

修

俣子

東吉

月子

柳弘

楓楽

洋

光久

能子

いわゑ

みつ子

(欠)五月

佳

(欠)五月

恐かっただけにさばさばした検査

さばさばと昨日は昨日切り捨てる

さばさばとし過ぎて頼りない男

冗談も出てさばさばと仰直り

遺すもの何も持たない心地よさ

人

ゴースイン検査の結果異常なし

天

さわやかな顔で団塊椅子降りる

軸

さばさばとしたくて一度遠いに行く

兼題 「柱」

太田 昭選

電柱にのぼったことがある女

再建の柱に起用された自負

大黒柱建て替え話聞かされる

遅刻して床柱着に座らされ

柱背に持論を曲げぬ鼻眼鏡

憲法の柱に昭和史の血糊

それなりの大黒柱でおアナタ

妙齡が柱の陰で泣くお通夜

震度六太い柱は耐えました

悠久の歴史を秘めたエンタシス

身長は柱で計るものでした

幾百年栄枯盛衰知る柱

かけがえのない伴侶杖とも柱とも

べんちやらの旨い柱で頼りない

正雄

みつ子

美智子

正雄

理恵

三喜夫

一風

螢

庸佑

(欠)千代

玄也

美籠

ダン吉

賢子

則彦

恵子

弘風

保州

瑠美子

鐘造

俣子

昌紀

天

昔々大黒柱だった父

鉄骨に負けていません木の柱

地

天

三喜夫

エンタシスギリシャの栄華語り継ぐ

電柱のかげに響く闇がある

まっすぐな柱に鬼も同居する

リフオームにも残す子供柱キズ

鉄柱の陰の別れは似合わない

一本の柱が歴史よく喋る

茶柱が立つことはないティーカップ

能登の海柱の悲鳴ない朝

リストラという身勝手な人柱

茶柱がくれた元気で靴を履く

金のない男柱になりたがる

門柱へ最敬礼の午前様

融通の利かぬ柱で頼もしい

野心家の顔に似てくる床柱

美しい国の柱が細すぎる

柱などどこにも居ない蟻の列

音たてて柱が横に揺れている

佳

柱にはなれぬがせめて杖となる

リフオームに邪魔あつかいの床柱

人柱立てねば変えぬ法の壁

贅沢をする柱に叱られる

この家の柱かあさんかも知れぬ

人

好きやねん僕の支柱になつてんか

地

天

昔々大黒柱だった父

楓楽

千里

ふりこ

遠野

見清

岳人

蕉義

直樹

郁夫

ダン吉

則彦

昌紀

和夫

楓楽

たもつ

天笑

倫子

尚士

麗

月子

紀乃

柳昌

恵子

三喜夫

三喜夫

三喜夫

三喜夫

三喜夫

軸

団塊で片付けられる社の柱

兼題 「スマート」 西口 いわゑ選

三回忌師は飄々として薫る

スマートさ引いても余る人間味

スマートなしぐさをまねて腰痛め

スマートな朝の挨拶よき日なり

スマートな人で多くを語らない

やせすぎにスマートなんてよく言うわ

風説にスマートだったらしい妻

スマートな男ストレス溜めている

子ばなれの母スマートに若返る

スマートな方の近くは避けてます

さすがさすがブルーボーイの別れかた

スマートに詫びられ後が叱れない

スマートな別れに夕日赤過ぎる

スマートな祖父の自慢は山高帽

スマートに見える下着を信じてる

言い訳をせぬ引き際のダンディズム

スマートなうちに写しておく写真

実直に生きスマートさには欠ける

スマートになったらお隣ちよつと見え

スマートな頃の背広を捨てられず

スマートの引き立て役をしてみましょう

スマートで背広の似合う男です

スマートな話術本音は洩らさない

スマートな人も残さずたべてはる

風邪ひいたけれど目方はそのまんま

昭

雅明

喜子

能子

美代子

れんげ

昌紀

ダン吉

一風

ふりこ

理恵

五月

千里

柳昌

耕治

幸雀

鐘造

楓楽

茜

月子

恵子

たもつ

扶美代

耕治

天笑

お誘いがスマートでつい揺れかかる

スマートでなくていいんだ君が好き

スマートに死ねたらしいねほつくりと

生き方がスマートならば薔薇のよう

もし私スマートならば翔んでます

スマートになった帰省の子を憂う

スマートに男の美学椅子譲る

佳

ダイエツしたら恋人去っていき

スマートにエスコートされ落ちた毘

スマートに騙してほしい四月馬鹿

スマートな手口でハート盗まれる

スマートにさよなら言おう星流る

人

スマートに年を重ねてきたうなじ

地

スマートに生きスマートに逝くつもり

天

スマートでないが大好きお母さん

軸

スマートな話術にひよいとのせられる

兼題 「減る」 鶴田 遠野選

禁酒とは書かず減酒と書く誓い

減益になって始まる肩叩き

心配はめつきり減った父の酒

欲ひとつ減らすと明日が読めてくる

忙し過ぎてやさしい言葉減ってゆく

体力の落ち目を庇う減らず口

修

朝子

弘一

みつ子

和夫

欣子

郁夫

千代

賢子

保州

尚士

義子

朱夏

希久子

正雄

いわゑ

清貧に生きててもきつちり腹が減る

予算貧乏しいところから減らし

老い二人会話減つても意は通じ

減らず口叩いてやはり負けている

思考力気力能力減る加齢

肩書と一緒に減つていく味方

絵の具皿みどりばかりが減る五月

またひとつ荷を減らしつつ終章へ

幸せで一日三度腹が減る

洗髪たびにだんだん減つていく

体重が減るのを待つている背広

減るばかり増えることない預金帳

ストレスの減るおまじない酒タバコ

減る預金余命延びたらどないしよ

徳利が妻の機嫌で減らされる

キッチン椅子一つ減り二つ減り

口数が減つる今日は淋しい日

目立たないように通帳目減りする

妻の愚痴めつきり減つてきた不気味

腹減つてくるとやたらに腹が立つ

口数を減らせれば妻もいい女

程々と言うが加減がむずかしい

年金が減るたび寿命縮み出す

寝てる間も残り時間が減つていく

長生きをすればするほど減る預金

ありがとうことば減らさず支え合う

佳

減らず口叩いてからの自己嫌悪

減塩に慣らされてきた鬼の舌

柳弘

清生

求芽

ダン吉

舞夢

鐘造

みつ子

公誠

楓楽

光久

月子

弘風

昌紀

美智子

郁夫

千代

能子

三喜夫

幸雀

集一

富美子

たもつ

更紗

耕治

朋月

ふりこ

富美子

朱夏

頑張って頑張り過ぎて減る味方  
体力気力下降をたどる棒グラフ  
五臓六腑ひとつ減らして退院す

人  
悲しみを減らしてくれる千の風

地  
減量無用そのうち土に還ります

天  
減つてゆく命へ悔いのない笑顔

軸  
切り捨てる福祉で目減りする命

兼題 「突然」

河内 天笑選

人生の卒業式は不意に来る  
突然に来たわけでなし七十二  
百歳で突然死する予定です  
四月一日妻が突然別れましょ  
偉い人食事時分に来んといて  
突然の誘いに有無を言わせない  
命日を突然聞かれてうるたえる  
快調な風が突然吹いてくる  
絶頂期とつぜん神が嫉妬する  
欠席裁判会長職を任せられ  
辞令一枚突然茶生狂わせる  
朝起きて妻の名がふと出ぬ不安  
突然にとちらさんかと妻が聞く  
ひと言の断りもなく震度六  
突然にマグマ吹きたす定年日  
つい昨日遊び回っていた遺影

希久子 美籠 哲男 楓楽 たもつ 朝子 好 希久子 順子 昌紀 利昭 能子 瑠美子 寿子 富美子 哲夫 一風 則彦 賢子 柳弘 朋月 幸雀

神様のいたずらしいハブニング  
突然に検査入院せよと医者  
突然の妻の正座に身構える  
突然に妻が年金聞いてくる  
離婚してくれと突然迫られる  
突然の帰省で老母を喜ばす

いきなりの結婚ど肝抜かされる  
ゴルフから帰ると妻が消えていた  
恋という奴に突然襲われる  
突然に逝くかも知れず整理する  
突然の客にスツピン盗まれる

好きな女連れて突然孫がくる  
ドタキャンの方が断りやすいから  
突然にスーパ―が建つ田舎道  
タミフルを飲んでないのに飛び出した

佳  
虚をつかれ一部始終を吐かされる  
突然が牙むいていた曲り角  
代役のチャンスは逃さない役者  
あさはかなことを突然考える  
突然にお好み焼きが食べとなる

人  
前ぶれはあつたと今にして思う

地  
からかつていたら突然泣きだした

天  
突然という神様の隠し芸

軸  
突然の報へ心臓鍛えとく

神様のいたずらしいハブニング  
突然に検査入院せよと医者  
突然の妻の正座に身構える  
突然に妻が年金聞いてくる  
離婚してくれと突然迫られる  
突然の帰省で老母を喜ばす  
いきなりの結婚ど肝抜かされる  
ゴルフから帰ると妻が消えていた  
恋という奴に突然襲われる  
突然に逝くかも知れず整理する  
突然の客にスツピン盗まれる  
好きな女連れて突然孫がくる  
ドタキャンの方が断りやすいから  
突然にスーパ―が建つ田舎道  
タミフルを飲んでないのに飛び出した  
佳  
虚をつかれ一部始終を吐かされる  
突然が牙むいていた曲り角  
代役のチャンスは逃さない役者  
あさはかなことを突然考える  
突然にお好み焼きが食べとなる  
人  
前ぶれはあつたと今にして思う  
地  
からかつていたら突然泣きだした  
天  
突然という神様の隠し芸  
軸  
突然の報へ心臓鍛えとく

楓楽 弘風 楓楽 ダン吉 集一 朝乃 紀子 幸雀 見清 ルイ子 昭 一風 修 扶美代 月子 美籠 朱夏 恵子 義子 志千代 時雄 高田美代子

川柳2500年記念  
新潟市政令都市誕生祝賀

柳都全国川柳大会ご案内

日時 6月24日(日) 10時~17時

会場 新潟グランドホテル

会費 3000円(記念品・昼食)

宿題 各題2句 11時締切

命名 札幌・進藤 一車

解ける 東京・松井 文子

号泣 鳥取・新家 完司

ときめく 仙台・零石 隆子

両隣 大阪・久保田半蔵門

ボケット 岡山・西原 知里

特別宿題(1句) 11時締切

筆 主幹・大野 風柳

講演 演「江戸しぐさ界限」柴田 光榮

賞 各題特選・秀句他

3月25日の能登半島地震の被害に遭われた方へ御見舞を申し上げます。

川柳塔社

# おどろき話

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

## サークル檸檬

吉田あずき報

ちくはぐな会話で解る老夫婦  
 好きだから時にボタンをかけ違う  
 右足を出せば左が背く日々  
 凡人も期待されたら血が騒ぐ  
 内緒です時計ときどき止めておく  
 ちくはぐの世をかたくなにする老い  
 ちくはぐに待ち疑心暗鬼におそわれる  
 ちくはぐな夫婦金婚へ歩が揃う  
 生き甲斐はあるものじゃない作るもの  
 保育室世のちくはぐを知りはじめ  
 ちくはぐなモードに慣れて雪月花  
 ほころびを縫いつ友情続いてる  
 苛立ちが自分の影を踏んでいる  
 とりあえずハイと答えて策を練る  
 ちくはぐに振り回されている絆  
 人間の道にがまんの坂がある

## 和歌山三幸川柳会

喜田

准一報

飽食の街に賑わうコマーシヤル

さち子

賑やかなファッションさはと老いる

賑やかな他人同士の鍋の中

賑やかにロビー外交きな臭い

茶柱が立つた女姦しい

三世代てんやわんやの一つ屋根

中傷へ鬼千匹が舞い上がる

体育系の孫に着付ける賑やかさ

賑やかな子等たしなめて電話口

三姉妹話尺さなない旅の宿

炒り豆が弾けるような三次会

一丸となつて賑やかブナしめじ

それにしても賑やかすぎないか地球

カラフルな露店見ながら初詣で

賑わつた頃を知つてる石畳

うりん坊抱いて未来を疑わず

いのししの勇氣ほめたい回れ右

猪突猛進するから罨が待つている

猪に負けず走つて来た誇り

五段目の猪にもらつた今日の運

瓜坊を連れているから見逃そう

いのししもドレスアップで初詣で

猪口オナ孫にバソコン指南され

身の内の猪をなだめるシューベルト

猪が団体さんで来たポスト

雪が降る君待つ夜のぼたん鍋

団塊の猪山を下りてくる

討入りをしそうな猪の息遣い

畑荒らす猪とする知恵比べ

章子

美子

義雄

イセ

昇

起世子

碧

宏夫

当代

登美代

幹子

保州

一步

次根

公子

町子

孝子

幸

美枝子

武

みね

徑子

朱夏

和子

桂香

純子

八重子

孝義

## 川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

海山の命たつぷり膳に盛る

仏とも鬼とも握手した右手

童顔に戻るふる里母の駅

干涸びた脳に潤おう趣味と生き

お墨付き貰いルンルン内視鏡

指切りで絆深める幼なき日

表札の手前悪人にもなれず

悔しさの涙をそつと見せにくる

満面の笑み合格のVサイン

茶柱で四方丸ごと吉とする

大笑い出来る倅せ孫主役

鏡見て粧おう彼女機械なの

## 東大阪川柳同好会

森下

愛論報

不器用な男の汗を信じたい

不器用に生きた分だけ優しくして

不器用でこれ一筋と言う匠

片隅で残り火守り苦勞性

残された道にまだまだ花咲かす

一言が心に残る父の喝

ペコちゃんの人気無残に崩れ落ち

繁昌亭落語アームに火を付ける

文化財になり通天閣の人氣

コンビニの明かり優しい塾帰り

コンビニがつぶれ静かな夜となる

残業同士コンビニで会う夫婦

スーパリーの棚から人氣落とされる

放任

ひかり

八重子

賢

かおり

寿々女

あきら

いさむ

貞月

初恵

よしみ

弘

丹吉

風子

敏子

ばっは

美弥子

朝子

美子

秀夫

太郎

和代

やす夫

シマ子

和子

アイドルの散歩も恋もままならず  
鶴橋のおモ二のキムチよく売れる  
髪型を変えて女は過去を捨て  
共白髪同士と思う半世紀

髪切つて尺度を変えていきてみる  
黒髪に妓の芸が生きている  
仏門へ決意邪心の髪を切る  
髪型を直し女の朝になり

三重子 克己 八郎 高尚 良子 湖風 太一 愛論

口一ス川柳会

山崎

君子報

貪欲に笑い袋をふくらます  
今もなお童女になって雛飾る  
運不運お内裏様も船送り  
母が居て祖母も居た日の雛祭り

ふきのとうほろほろにがい春の味  
ケースの中袖触れ合せて内裏びな  
弥生うまれの娘がいます内裏びな  
二番手にいと後もよく見える

二月カレンダーめくつて春をさそい出す  
さくら咲く母校まほろし友ら何処に  
流し雛春に背押されゆらゆら  
待ち合わせお寺の鐘は二つ鳴る

哲子 藍 みつ子 孝一 トミエ 美籠 いわゑ 武庫坊 年代 義子 君子

竹原川柳会

時広

一路報

進め進め進めと妻の笛が鳴る  
天辺を見据え尺取り虫進む  
食進む母は今朝から七分粥  
出発進行船先は沖へ向けて待つ

蘭幸 淑子 万年 静風 栄恵

龜の歩で進む青空ある限り

私を宥め論して進む道  
まだ若い自分に言い聞かせています  
元気でね看護士さんがほほえんだ  
ストレスをさらりと捨てて元気です

プラス思考元氣印で老いはない  
朝日グングン元氣元氣と四股を踏み  
子供らの素足元氣な寒稽古  
お元気ですかと病院の帰り道

百歳の元氣に拍手惜しまない  
この元氣冷凍保存しておくぞ  
母さんが元氣をくれた誉めことば  
元気ですかとウグイスが来る鳩が来る

夕焼けす今日元氣をたたみ込む  
大根抜く土の元氣をいただきます  
赤ちゃんも一緒にホッとすお風呂  
春近しい赤い絵具を補充する

どうなるの赤いポストのひとりごと  
星野ジャパン金メダルへの血が滾る  
女のいくさルージュは赤と決めている

川柳塔唐津 仁部 四郎報

船と鞭貸す祖母が居て丸い屋根  
弱る脚納絨帳で巡る冬  
はき物を揃えるだけのことですよ  
鞘当てはキリンサツポロ冷蔵庫

子が巣立ち妻はせつせと羽繕い  
暖冬を喜ぶ人と嘆く人  
文明に参加カードで金を借り  
歯車が時々さしむ夫婦独楽

厚子 千枝 規代 笹舟 節生 幸子 汎美 貞子 慶子 敬子 笑子 比呂子 史子 一路 房子 輝恵 千代美

晴翠 勝視 正實 蜂朗 水笑 四郎 輝夫

佳句地十選 (4月号から)

市丸 晴翠

期待され嘘少々もまふしつづ  
恋人を探すがごとく古書を選ぶ  
老春の少し艶めく一行詩

順序などだれも知らぬ枕  
子も苦労したのか語尾が暖かい  
前進をしたくて辞書を離さない  
生いたちは何も語らぬ冷凍魚

頭打ち汗流す他ないだろう  
夕やけこやけ払ってほしい給食費  
土に還るときめて慌てることはない

引き出しの奥にしまったままの夢  
わかあゆ川柳会 松本はるみ報

どたん場に立つと閃くものがあり  
作法教室でしびれきらしたの昔  
生き方をかえていそいついてゆく  
人並に横一列の青りんご

人並に妻母女やっています  
人並な事が出来ない木守柿  
人並と言う物指しが見つからぬ  
いそいそと出掛けはんやり一人呑む

人並な余生をつづる紙芝居  
高槻川柳サークル卯の花 龍本きよし報

編笠が片手で拝む遍路杖

泰雄

いわ糸 昭 正剣 藤重 正美 重人 遠野 丹吉 義 たもつ

高明

後任を拝み倒して押しつける  
三拝九拝した日もあつた夫婦著  
拝む蠅打たぬ一茶を子に教え  
幼い日覺えた歌は忘れぬ  
幼子は泣き声変えて自己主張  
幼稚でもゴリ押しでくる北の策  
幼児の目線に合わせ土筆摘む  
願いごと叶えた絵馬が風邪をひき  
風邪三日神様からの休業日  
二世帯を風邪も行ったり来たりする  
傘寿過ぎ風邪引くなよが合言葉  
妻の風邪治り掃除機音高く  
ぐうたらな暮らしを狙う風邪の神  
神様が少し休めと春の作業服  
風邪の熱蹴散らす父の作業服  
断りにクシヤミも入れる電話口  
休日のパパにべつたりひとりつ子  
街角でべつたりするのはやめとい  
べつたりも何時か離れる小さな手  
スキャンダル脂きつる顔に浮く  
年金の親にニートがへばり付く  
上品に畏まつるフルコース  
上品に喋らん方が和みませ  
上品にしようとするばけつまずく  
物忘れひとり芝居が多くなる  
いそいそと叱られに行く母の趣味  
古稀迎え最後の恋と紅をひく  
残照に抱かれて影も温かい  
ひよひよいと渡る男の迷い橋

昭二 美龍 昭 勲功 庸佑 求芽 郁夫 とし子 活恵 葉子 義一 公子 武史 尚士 萬一 照子 治三郎 美義 乃りこ 幸雀 重人 重人 典子 宏章 祐作 比ろ志 秀夫

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

絵心を誘う山茶花淡い雪  
大山の雪解け水が地に還る  
除雪車も暖冬異変あくびする  
さわやかな露天風呂から雪見酒  
占いのとおり今年は雪不足  
雪もなく春の声聞く路のとう  
雪乞いも届かぬ天がじれつたい  
雪のない冬で何だか気味わるい  
雪降らぬ山の童話が枯れていく  
雪予報信じて旅のプラン変え

川柳ふうもん吟社 夏目 一粋報

振るだけの尻つぽに主張などはない  
キャンセルに行きます夕日落ちてから  
悪党の群れに一匹蝶が居る  
資金ぐり損んだ浮輪異だつた  
悪党も母の愛にはかなうまい  
キャンセルをしたい噛む犬吠える犬  
おつちらと蟹食つとりやあ無あなるで  
古里へ夜汽車で向かう資金ぐり  
キャンセル後静かに法話聞いている  
おつちらとしての娘が家におる  
すぐ来いと言うがおつちら薄化粧  
おつちらと煙草くゆらす場所がない  
ストレスをキャンセルでできる壺を持つ  
とりあえず今日飲む金をひねり出す  
徒歩五分わたくし用の墓地を買う

豊枝 智恵子 信雄 弘子 鈴枝 公美枝 和代 静江 正光 雄々

洋々 善夫 昌鼓 一瑤 重忠 蟹郎 毅 諏訪男 あしび 孝男 かをる 春名 無限 圭一郎

川柳塔まつえ吟社

三島 淞丘報

向こう岸キャンセルされて力沸く  
モラルには反するけれど君が好き  
資金ぐりの目処立たぬうち家は建つ  
出馬する資金は妻の知恵借りの  
キャンセルに世界の空は狂い出す  
悪党の振りしてすねているんだね  
悪党を一正飼っている強み  
キャンセルの中に運命の岐路がある  
うちにまでよほどの事が資金ぐり  
資金ぐりついて大きく明日を描く  
子守唄聞かせ育てた児は素直  
おつちらとこの世の幸を詰めて逝く  
悪党も誰かに救い求めている  
キャンセルに親兄弟をみな使い  
戦略も資金ぐりまで来て詰まる

休日の方が多忙な割烹着  
いい休日空の青さを知りました  
雑用が休日待って攻めてくる  
休日の髪の毛の乱れに客が来る  
里帰りそんな言葉は反古になる  
休日が休日にならぬ上天気  
無欲ならとうに仏になっている  
少子化へ歯止めの意欲からまわり  
私利私欲 川の流れは不透明  
紺碧の海へ我欲を捨ててくる  
世を憂うあの手この手の私利私欲  
あれこれと欲をつめてる壺の中

行男 美雪 由美子 茂登子 益子 一京 雅女 金祥 義徳 美恵子 節子 志げ緒 はつ江 宗明 一粋 叮紅 幸子 幸 紫見 多賀子 政子 蘭水 たけし 房子 和歌子 博子

甘酒ものんでうらうら難まつり  
城下町ゆつたり甘いばてはて茶  
煙草やめ氷砂糖をなめている  
少しだけ甘い夢見たシャボン玉  
類濡らす雨はちよつぱり甘い味  
いつまでも耳に残っている甘味  
別れ道迷いがあった進めない  
指切りをしたのに友は永久の旅  
別れ際表情だけが語るもの  
さようなら涙さそって別れ旅  
春三月別れの涙美し  
六道湖に夕日落ちたら別れよう  
机だけ派手に揃えた入学児  
果たせない約束がある古机  
廃校の机の傷が懐かしい  
机上論だけは賑やか若い衆  
年頃の子の机には近寄らず  
ペンの音機は僕の気分知る

長柳会

村上直樹報

腕白も消えた日本に迫る危機  
腕白は腕白のまままでいてほしい  
腕白見還暦過ぎて泣くを慕う  
腕白の度が過ぎて師く四面楚歌  
温暖化桜の花も狂い咲く  
賑やかな集い話に花が咲く  
雑穀が流行り鳩麦出世する  
桜咲き独り占めするうちの庭  
一輪を咲かせて香る沈丁花

知恵子 ちえこ  
螢  
日出子 多喜 蘭 邦代 たえこ  
柳歩 英子 きみえ  
浜丘 礼子 桂子 静恵 茂美 薫 注湖  
直樹 正博 明信 輝子 靖子 もこ たけし 英美

すべり止め高い私立のサクラ咲く  
同窓の腕白見える喜寿の顔  
腕白も頭丸めて今社長  
ばらばらの心まとめる鍋の湯気  
腕白な僕にもあつた淡い恋  
それぞれを咲かせた父母の丸い背な  
故郷はあの腕白が今町長  
腕白が消えてブランド風委せ  
腕白の日に還るのか認知症  
咲く花も散る花もある人生路  
古木でも咲かせてみたい恋の華  
年金で清く正しく咲いている  
道端に落ちた種から花が咲き  
腕白も卒業式は畏まり  
カルチャーで古木枯木に花が咲き  
腕白が木の上で見たでかい夢  
腕白も恋に目覚めてから弱気  
雨に咲くバラに謀反の匂いする  
矢の尽きた腕白たちの縄のれん

川柳ささやま

遠山可住報

当てにしていた年金が減りする  
老境へ弱音は吐かぬ絵筆達  
残り火を大切に待って待つチャンス  
追憶は心の弱気灯を点す  
機械音痴読むが分らぬ説明書  
頼もつか祖母の財布がふくらんだ  
算数に弱いまままで八十路過ぎ  
約束は予定あるのと見栄を張る

正子 正一 マサ 史 芳野 和代 敬二 三和子 幸雄 不二雄 靖博 富美子 良男 武男 淳司 一慧 正美 けい子 和子  
精一 純子 二英 文子 美紗子 靖子 多美子 開子

孫からの内緒話に弱い祖母  
雲晴間今がチャンスと富士拝む  
八十路にも予定いっぱい盛つてある  
御祝儀へ先ず押えとく大安日  
消費税上げるチャンスを狙っている  
寝に帰るだけの仕事の鬼になり

川柳塔鹿野みか月

土橋

唇が大きく笑う春一番  
くちびるで一生涯を手に入れる  
唇が私を指名しているよ  
唇をいつも尖らす癖がある  
くちびるの今日は恋びと色になる  
くつきりと唇マーク持ち帰る  
唇の紅はやさしい言葉生む  
唇に紅ひきながら夢をみる  
くちびるがもうくちびるを欲しがらぬ  
屈辱へ口唇囁んで忍一字  
唇がほんわか緩む喫茶店  
几帳面もほどほどでいい肩が凝る  
てくてくとしたい出掛う母の里  
おっとりとした総領で気が急げる  
冬こもりチェックしているテレビ欄  
三猿も欄間を抜けて遊びたい  
欄干に牛若丸と孫だぶる  
欄干にもたれ余生をととのえる  
欄干を頼っていつも踏み外す  
勝った負けたとスポーツ欄は賑やか  
欄干を赤に塗り替え客を呼ぶ

照代 かほる つや子 富美 哲男 可住 螢報 みどり 保子 八重 はるお かおる 諷人 孔姜子 永子 石花菜 弘子 睦子 幸枝 彩子 蟹郎 くに子 武子 菊乃 久枝 節子 実満

蓄きて大事にされる欄に置く  
欄外にポツと載つてくれている善意  
アルバムを夫をしばらく見ていない  
アルバムに産湯している初ヌード  
アルバムに閉じこめられたままの夢  
まだゼロの刺に反応してしまっ  
てくると泣いて笑つて卒寿まで  
戦争を知らない子等が頼りない

川柳大坂

長井

善純報

出す時は出すとしぶちんボンと寄付  
しぶちんを自認してが残らない  
しぶちんが妻の保険をかけている  
かくし事一つ悲しくなつてくる  
真実をかくしもつともらしく言う  
かくさずに酒の肴になる話  
金婚式まだかくしてる事がある  
隠さず持つ持つと言う国がある  
かくしてはいないメガネが見つからず  
ヒロシマの地獄のあの日話せない  
情報のアンテナ常に張つて待ち  
常勤になれたと息子からメール  
常識を捨てるもつと飛べそうだ  
酒一合我が生涯の常備菜  
四月から常に離婚を覚悟する  
今日もまた同じ味する御味噌汁  
常温の酒は世渡り丸くする  
税関を無事にパスした常備菜  
無意識に大きい方を選ぶ癖

富久江  
宣子  
きみ子  
汲香  
公子  
盛桜  
茶子  
登

一風  
青道  
一步  
笑風  
美花  
利昭  
紀雄  
柳昌  
ダン吉  
鉄心  
五月  
重人  
柳弘  
勝弘  
珠生  
孝一  
美籠  
かよこ

偏差値の比較が格差生んでいる  
比較され曲つたきゅうり売れ残る  
ママの腕比べあつてはお弁当  
寝顔見て比較するのはやめました  
鬼とみる仏とみるも心掛け  
ゲーム機も脳年齢を比較する  
よその子と比較されてる子の痛み  
常日ごろ僕を支える妻がいる  
せつちは常に笑いの種を撒き  
申告書なんにも隠すものがない  
しぶちんほど儲け話には弱い

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

東吉  
花笑  
いづみ  
芳香  
川童  
和  
朝子  
すがお  
福世  
まつお  
善純

人生は迷路達観して生きる  
寂聴の法話迷路を解いてくれ  
動いたらますますわからない迷路  
北極のクマも迷路へ温暖化  
躰いて原点探しゆく迷路  
人生の迷路で鍵を見失う  
生きてますピンと胸を張つてます  
張りつめた会議とます蓬餅  
胸張つて歩く財布が軽いので  
寸刺を宿した襦袢張り替える  
欲張つて何ひとつ得ぬ未完の絵  
今が旬お膳で威張る菜花漬け  
根を張つて岩を砕いて生きてゆく  
欲張りて捨てたい物は何もない

言い張つてパツと弾けたシャボン玉  
鉛筆の長さへ人の命など  
4BとHを使い分け生きる  
色鉛筆全色使い春便り  
生きてきたペン一本を道連れに  
鉛筆を砥めなめ計算書き替える  
B4で綴るソフトな青春譜  
七転び八起きもゲームだと思つ  
真実かゲームか好きと囁かれ  
ラブゲーム男が下手な芝居する  
家庭崩壊ゲーム機を買つてから  
嫁姑ゲームオーバー仲なおり  
ゲームだと流し人生楽しもう  
ラブゲーム泣いたあの日が懐かしい  
菜の花の迷路で君を見失う  
人生の迷路で父の遺書を解く

登美代  
大輪  
保州  
輝子  
裕美  
准一  
和  
あきこ  
紀久子  
智三  
英子  
よしこ  
和子  
克子  
朱夏  
怜

帝都には雪の降らない平和な日  
雛飾り無事に仕舞えて広い部屋  
漫然と妻の話を聞いた罪  
タミフルをリレーのように飲む家族  
自販機の迷い同時に二つ押し  
徳利にまだ残つてる恨み節  
可能性広げ旬待つ親心  
居心地がよくて仲間にあるがどう

三男  
稚代  
三喜夫  
小雪  
紀子  
さち子  
夕胡  
東吉  
愿  
千代子  
富美子  
徑子  
順子  
豊太

大原川柳社

山本 玉恵報

信念は決して曲げぬ父の首  
リストラと甘い言葉で首を切る  
あたたかい紅茶で和むいい仲間

あすなろ  
たつ子  
みさえ

首を振り母の主張に答えれず  
 玉の奥ののにあの娘は首を振る  
 指図する夫に首だけ振っておく  
 横に振る首に一つの主義がある  
 首縦に振りさえすれば良いものを  
 父頑固とても頷く首でない  
 団欒の温み集めて飲む紅茶  
 思案するロダンの首もくたびれる  
 首一つ賭けて男が立ちあがる  
 据え変えた首でも出口見当らず  
 思慮深さ皆まで言わぬ首を振る  
 失言へまた大臣の首が折れ  
 首ひねる祖父の決断待っている  
 紅茶飲む夫婦に策がまだ見えぬ  
 無理承知孫には首を縦に振る  
 暖冬で春が一足早すぎる  
 温もりを知らぬ少年人を斬る  
 特攻の少年花も咲かず散る  
 三婆が寄って紅茶とおしゃべりと  
 少年の羽ばたく空はまた広い  
 首枷を外されそっと覗き見を

西宮北口川柳会

黒田

能子報

美佐子 巴子 喜美子 悦子 辰江 妻子 南花 地佳平 はじ芽 さち夫 敏夫 あやこ 文代 とめの 恵潮 絹子 静子 己吉子 エミ子 夏真 玉恵 恵子

五月 忠 曙蝶

深追いはしません妻の長電話  
 深読みをしすぎて皆に笑われる  
 懐の深さへやすんじて抱かれ  
 深酒をさせる相手に会いにゆく  
 一病一災夫婦の絆深くなる  
 深追いをすると結び目固くなる  
 テーブルをたたき悔しさつづける  
 テーブルナリ気になり食べた気がしない  
 成功も失意も知っている机  
 古テーブル思い出の疵あちこちに  
 丸テーブル本音で語り合えそうだ  
 やさしさを詰めた袋の蝶結び  
 テーブルマナーお婆ちゃんにはこれと著  
 リボン結んであなたに上げるのはころ  
 いくたびも結び直してきた夫婦  
 靴紐をかたく結んで春の野へ  
 こころだけ結んで妻子の居るあなた  
 なぞなぞの答え出ぬま手を結ぶ  
 助演賞主演もあつて妻の役  
 幽明を越えて師弟にある絆  
 友は今上昇気流老いざかり  
 団塊ですと男が白い息を吐く  
 手袋が両方落ちることがない  
 土の香が身体の芯にある親父  
 結局は素っぴんになるうまいもん

京都塔の会

都倉

求芽報

正和 朋月 求芽 耕治 奮水 千代 江美 折杭 いたる 章子 わこ 萬的 光久 歳子 晴美 富喜子 哲子 松煙 直 美穂 二英 哲男 孝一

ふりこ 美義

しっくりと両手になじむ匠技  
 声のトーン上がりしっくり仲直り  
 しっくりと世間を渡る粋な風  
 しっくりと着物が似合う母の背  
 辻褄をしっくり合わすのが詐欺師  
 いい点を取れと言つても親が親  
 練りに練り正攻法をとつた父  
 ジョーカーとわかつていても取るカード  
 取り調べられ無い経験ありません  
 取り得など無い我が家の笑い声  
 片方の耳は状況掴んでる  
 お喋りと無口夫婦のヤジロペー  
 不整脈続いています片思い  
 アメとムチ孫に片寄る甘い顔  
 事故を見て通る片側一車線  
 幸運をつかむ片手は空けておく  
 片方の手みんなのためにあけておく  
 片想いしていた人が孫と来る  
 片手落ちぐらいで泣かぬ肚の虫  
 片頬に阿弥陀は笑みを絶やさない  
 言い訳はしないわたしの片手落ち

川柳塔なら

坊農

柳弘報

福子 典子 とし子 牛延 綾子 庸佑 益子 和友 百合子 きよし 欣之 克治 輝美 啓子 満子 宏子 則彦 求芽 葉子 昌乃

六助 利昭 章久 茂雄 博一 ふりこ

初アート記念につけたキスマーク飾るものなし定年の冬木立連絡を待った日もあるくすり指逢うた日の日記にはさむ箸裏私だけ届いていないご招待命拾いの記念になった火傷痕僕の負へ雪が飾ってくれている連絡船里でおふる待つている人ひとり許して記念の修二会の方絆縫う母は飾らぬ木綿糸糸切り歯キラリ野心を覗かせる写メールでVサインくる発表日友の計を連絡しあう日の氷雨纏れ糸ほどけば風が手にのこる一本の電話で母は安堵する赴任地から今日も夫の一通話記念日をちゃんと覚えていた平和一本の糸に責任感がある修飾語溢れる街でまた転ぶとまどいを隠した母のお赤飯ゴールまで飾る余力は溜めてある生みの親育ての親をたぐる糸千の風になったのですねお父さん誕生の足形天を蹴っている

岸和田川柳会

土橋 房枝報

弘風 良一 惠美子 真理子 俊彦 和夫 千梢 洋子 富子 一風 秋雄 恭昌 隆盛 道子 積子 國治 朝子 義美 寿美 美千子 孝子 義久 のりこ 理恵 東吉 洋子

うすうすと浮気知つての知らんふり兄が居て古里がある安堵感母の苦勞娘にもうすうす分かりかけおにぎりに母の顔浮く梅の種すみせん亭主を跨ぐ狭い部屋苛めっ子もストレスのある寂しい子舌先でうすうす解る隠し味今の世は嫁に負けます苛め膳一本釣り小魚迷がすエチケツトエチケツト守らないのを威張る馬鹿あの二人仕事でわかる深い仲間と飲む肴は母のことばかりてきばきと兄取り仕切る遺産分けボロを出すにわか仕込みのエチケツトエチケツトだけ教えた父の背吸る音たてたてないエチケツト兄ちゃんと呼ばれる僕はまだ二歳産んだ子を苛める親の顔見たい弱い者苛めた後の自己嫌悪喧嘩して兄叱られて私泣くお下りのポツケにあった兄の恋

ほたる川柳同好会

水野 黒兔報

植代 香枝 房枝 守 和美 ゆい 仁緑 浅子 けい子 寿海 泰弘 ダン吉 俊昭 淳子 岩夫 昭 淳風 笑司 珠子 ふみよ 蛙城 柳童 美智代 幹治 肋骨 桂子 宇乃子

煮物にと貰うた野菜天婦羅に奥の手を見せぬ手強さまであまし煮返してだんだん亡母の味になる京町屋奥の細道行く如し煮焚きして老化防止をしていますわいわいと言え仲間が一人増えひとり居て何か空虚な喉の奥奥まった路地に聞こえる三味の音福の神慮慮深く奥の席ちよつとに今年是新子高いんよ期限切れ煮ても駄目かと思案する

尼崎尾浜川柳会

山田 耕治報

契子 雪子 春代 蛭柳 禮子 長一 勇治 信男 黒兔 見清 勝 義子 晴美 きよし 比ろ志 朋月 五月 美代子 亀与子 孝一 耕治 里江 よし子 正治 靖真 求芽

奥さんと呼ばれておかんおかんむり夕焼けの奥に潜んでいるロマン熱爛にプリの煮凍りたまらんね煮るなと焼くなど勝手にせいと尻まくり暖冬へわいわい花も木も虫も香りたつ杜氏の意気のみ新酒会

洋ランを置いてテール春気分  
夢を追う少年の目に力あり  
耳許に春の命の音を聞く

あかつき川柳会

山本

柳昌報

満開のままで散れたらなと思ふ  
私を咲かすに少し赤ワイン

遅咲きの桜のんびり家に居る  
玉手箱の中で咲いていた時間

逃げるなど星の空から母の声  
ピアノノナタ響いて冴える冬銀河

シャープペンが力抜いてと言つて  
鉛筆の芯から長い物語

虹を書く色鉛筆が欠けている  
鉛筆の先から溢れ出る無限

消しゴムに消され鉛筆身をけずる  
日本海の波は怒りを忘れない

荒海へ船先を向けることもある  
波風がたつと喜ぶ週刊誌

波乗りは巧い男で友がない  
波かぶる覚悟しつつかり手を挙げる

忌が明けるマニキュアをして波に乗る  
一票でおもい知らせる日も近い

遠くから進軍喇叭らしき音  
戦没の兄貴もさつと千の風

出荷する時に商う期限切れ  
不祥事を横一列で頭さげ

金属ドロ金属の値がよくわかり  
産科医の不足に産めと言われても

江美 全彦 美籠

保州 アキ

蕉子 義

グン吉 楓楽

美花 柳弘

見清 集一

美智子 朱夏

たもつ 善純

一歩 重人

啓子 尚士

修 朝子

章久 美世子

利昭 東吉

闇僚はその後起立をしますか  
年度末談合裏金引継いで  
陽の言葉風の言葉を聞く畜  
少年の歩幅たくまし木の芽吹く  
初対面気の合う人はすぐわかる  
小犬一匹花の余生を振り回す

南大阪川柳会

吉川

寿美報

卒寿では灰汁も出ないと見放され  
世渡りに灰汁を上手に使い分け

年頃は灰汁を集めてニキビ面  
斬られ役灰汁の強さが光ります

灰汁抜いたわらび御飯に母想う  
灰汁揚げがして来て少女殻を脱ぐ

孫連れて百円シヨップ廻りする  
薄いのにかけてくれぬ理想髪店

人情の薄れ空しいなと思う  
年金で普通の暮らし出来たはず

空しさは負けて相手とする握手  
空しい日私語がなぜか多くなる

下手な嘘残して帰る見舞客  
虚脱感抜けずオカリナ吹いている

美しい国呼ばわりは言葉だけ  
アングルを変えて昨日を裏返す

昨日より今日の素顔を光らせる  
忘れられ昨日私の誕生日

昨日なら一緒にしたと憎いこと  
磨かねば昨日の僕が錆びてくる

昨日より一日老いた顔洗う

勝弘 紀雄 桂子 富美

シマ子 扶美代

憲太郎 福世

忠昭 榮子

志華子 集一

三男 尚士

太郎 雅洋

千里 柳伸

あや子 東吉

柳弘 更紗

勝弘 弘風

洋 たもつ

愛冷めた背中を北風が抜ける  
絶好を冷くメール無情なり  
熱冷めた時は心の旅に出る  
親切を冷めないように手で包む  
早よ頭冷ませと財布から悲鳴  
冷めた目に裏の裏まで見透かされ  
不平不満言わぬ子供で冷めている  
かあさんの冷めてもうまい握り飯  
死んだふりしようほとほり冷めるまで

川柳花の輪

妻谷

重風報

今思う懐深き父のこと  
親子別ふところ貯金秘密です

懐がぬくいと母ちゃん機嫌よい  
あの笑顔ふところ大きい父でした

幸せを入れるふところ空けておく  
懐をさらけ出してもこんなもの

改革の声はすれども懐手  
堂々とするのも悪事の隠れみの

喜寿を舞う威風堂々の父ありき  
堂々と喋つた嘘が首しめる

自伝にはよいことばかり堂々と  
堂々の身重の後にやせ亭主

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

七光りだけで育つた芽が弱り  
人の芽を摘んで喜ぶギャンブラー

木の芽吹くみんな自信のある姿  
春近し球場通いもまた楽し

弘泰 叡子 初太郎 郁夫

重人 ばっは 昌紀

楓楽 隆子

ミヨノ 一笑

やすの 善栄

一幸 隆盛

勉一 音成

一幸 重風

重風 昭三

矢薫 武庫坊

忠

杖ついでころばぬように八十路坂

道連れは同行二人と決めている

楽しみを拾い集めて老いいる

この道を行く絶景が待つている

道づれに誘われるまま迷い道

花の香に誘われ先に逝き

生きてゆくのに診察券がまた増える

早春の香りを湛え独活届く

歳月のマジック哀しみが消える

腰のばせお喋りインコがいじめます

水滴がポトリポトリと記憶喪失

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

光るもの知らずに老いた母の指

言えぬ事指人形に喋らせる

神様のくれた十指で読む点字

あの人を私を避ける何かある

葉漬け避けで通れぬ副作用

先送りばかりしている重いツケ

本音避けた話堂堂巡りする

女二人ニコニコ話すあさがし

良い事があつたな顔に書いてある

退院にナースの笑顔ありがとう

にこにこ挨拶したが人違い

にこにこやつてくるから騙される

金儲け主義へベコちゃんしよげている

倒木の意地でにっこり横たわり

啓蟄やガスのおいもして起きる

千恵

宏一

幸子

東園

ゆき子

寛之

年代

純

紀乃

和子

芳子

泰子

りつえ

六子

真一

一壺

重人

ダン吉

喜久子

狭杏

章司

正子

みつこ

みつこ

美代子

美喜

駅に来てガスの元栓気にかかり

ふるさとの海に浮かんだガスタンク

少子化に国の未来に暗い霧

民話抱く湖ガスに包まれる

ガス抜きのはずが里から戻らない

ガス欠の補給いつもの縄のれん

城北川柳会

小谷 集一報

割り切れぬ奇数は愛で解いてゆく

操作した数字はいつかポロが出る

数字には淡白徳が寄つて来る

勇み足なれた段差にけつまずく

もう一段三人官女は登れない

各国の段差ひろがる新世紀

帰つておいで敷居も低くしているよ

春の陽にキラキラ段差水泳ぐ

シャボン玉命短し千の風

風よりも僕は浮いてる雲がいい

一本の電話に晴れた浮かぬ顔

追伸に浮き浮きさせる花言葉

くすくすと笑う女が翔んでくる

ここだけは鬼もくすくす縄のれん

懐に含み笑いを二つ三つ

思うようにならないものは子と病

堪えていた涙溢れる発車音

まだまだの未来があると翔び回る

領収書あつめ忙し年度末

赤ちゃんをポストに入れる福祉国

いい朝になんとも丸い玉子焼

志洋

耕敏

庸佑

惠勇

いさお

志華子

東吉

雅文

千里

弘風

求芽

麗

一步

高栄

利昭

朝子

典子

はじめ

睦子

柳弘

昭子

ひさ乃

ルイ子

福世

倫夫

郁夫

現役でないのに金が要りますね

折角のお風呂が冷めた頃帰る

好転に酒一合が守られぬ

逃げ足の速度は落ちぬ古希の坂

いつまでの命と思う旅プラン

飲み足らぬぐらいで丁度よいお酒

補聴器を付けると深くなる疑惑

言い訳のように夫の服も買う

日の丸を貶し日本に住む不思議

八尾市民川柳会 宮西 弥生報

滑つたり転んだりした回り道

へん出しルックにカミナリ雲から滑り落ち

早春に白い揃いの靴を買う

早春に白い揃いの靴を買う

ときどきはひとり芝居のお姫さま

ガタビシの雨戸へ油を塗ってみる

ホワイトデー胸ふくらませ姫は待つ

回転の落ちた頭へ潤滑油

草に寝て命の満ちる音を聞く

路地裏のベージュに若い僕がいる

小手毬の白は言葉飾らない

イラクにも憲法九条届けたい

子や孫へ濁らぬ川と澄んだ空

透明な心で君に逢いに行く

透明なところが嘘を許さない

みんな風の子だったね過ぎ去る風

しくしくと泣いた日があり今がある

奪われるための命は産んでない

叡子

克衛

ただし

達子

集一

昭

明子

順三

欣之

耀一

浩三

朝子

あかり

ますみ

宏至

扶美代

加央里

民

秋雄

紀雄

いさお

まつお

一風

定男

芳香

賢子

受験子に禁止スキーもスケートも  
しくしくに男弱いと赤い爪  
胃が痛む割り勘だけは飲んでる  
すすり泣き出方待ってる孫二歳  
何もかも白に戻してみたい悔い

川柳塔のぞみ

播本

充子報

権悟

雪ゆき雪きつと豊作かも知れぬ  
恋をしたつもり別れがつからくなり  
筆取って紙の白さへ怖くなり  
和やかに老人クラブ鶴を折る

不景気はティッシュペーパーくれぬ街  
急降下紙ヒコキも青ざめる  
風と雲予報どおりに動かない  
浄土への心づもりがまだ出来ぬ  
六法全書合点している革命家

ストローの先から虹のシヤボン玉  
ストローで下戸がストレス持て余す  
掃農してストローハットよく似合う  
ストローの中程にある羞恥心

しゆるしゆると孫の背丈が天を突く  
しゆるしゆると夢に出てきた焼夷弾  
しゆるしゆると解いた帯に絡む嘘  
しゆるしゆると手作りの風よく伸びる

胸の内届けしゆるしゆる観世送り  
ストローも恋の予感の喫茶店  
ストローの先で春呼ぶシヤボン玉  
シヤボン玉ストローで描く大宇土由

今将に幕下ろされるピエロの死

柳伸

いつふみ

ダン吉

はじむ

弥生

権悟

きみ

リッ

あやめ

哲代

清

哲男

義子

慕情

方子

シマ子

充子

喜子

やすお

乃りこ

宣子

しゆるしゆると義理を果した帯を解く  
しゆるしゆるしゆる私を伝って逃げる愛  
むらくも川柳会

毛利

幸報

定子

幸

美保

彰

信夫

英男

蘭水

瑞枝

俊夫

秀夫

愛子

嘉寿子

恵美子

義美

秀良

梅一輪ほろりと咲いてとおしい  
老いなれどかしく生きるわが余生  
幼子のこれ何とさく掘り炬燵

川柳クラブわたの花

山本

宏至報

食べる人いて俎板のはずむ音

主人褒め子供褒めてる嘘上手

とそ祝い姿見うつる笑みの顔

褒められてサイフの紐がゆるみ出す

姿より気立てを選ば嫁さがし

康子

扶美代

幸報

定子

幸

美保

彰

信夫

英男

蘭水

瑞枝

俊夫

秀夫

愛子

嘉寿子

恵美子

義美

秀良

美子

清子

妙子

ひとりでも反対ですと手をあげる  
ストレス解消ベットの愚痴聞かせ  
破壊する地球を守るオゾン層  
行間に本音隠して日記書く  
路地裏のページに若い僕がいる  
絵手紙が春の便りを連れてきた  
過ぎし日の苦労をバネにジャンプする  
定年後妻に指示され動く僕  
政治家はしがらみを断つ勇氣いる  
広告の目玉を競う見せ処  
たけしが語る宮崎知事の心意氣  
大臣がついに女性を機械にし  
妻の愚痴テレビの音を上げて聞く  
キツチンの女が覗く褒め上手  
スパーに仲良く並ぶ多国籍  
露の墓頭出したらまだ睦月  
ライバルの気炎圧力かけてくる  
ピンチには堪える金庫が小うるさい  
おぼろげに君の姿が白梅に  
半額と聞けば飛び付く悪い癖  
病床の日記にやつと春が見え  
他人なら腹立つことをする愚  
こんなにも子供が映えるひとつ誉め  
席ゆずる小さい勇氣出して立つ

知佐子

美代子

莊治

博子

俊子

たえこ

正春

浩三

幸枝

晴美

宏

美はる

欣子

ふりこ

義明

いつふみ

宏至

はじむ

一風

ますみ

ミツ子

君江

耀一

民

知佐子

美代子

莊治

博子

俊子

たえこ

正春

浩三

幸枝

晴美

宏

美はる

欣子

ふりこ

義明

いつふみ

宏至

はじむ

一風

蠟梅が咲いて季節がまわりだす  
 ひとつかみ扉に向けて鬼は外  
 昨日に追われているお多福の面  
 手作り私の好きな部屋にする  
 みかんまで温くなるこたつの輪  
 どの木にも白い花咲くぼたん雪  
 暖かいな熊も冬眠忘れたる  
 平穩にすぎる暦のありがたさ  
 宝くじ当てびつくりしてみたい  
 渡り鳥無事を折って送り出す  
 歳ごとに何故か税金重くなる  
 ふきのとうまたかまたかと目をこらす  
 しんしんと無心無人の雪つもる  
 子宝を宝と知らぬばちあたり  
 雪椿雪の窓から見る風情  
 本人も驚くそのまんまシヨック  
 紅少し添えて古雛のいい笑顔  
 平和つてないもの強請りかもしれぬ  
 温暖を愚痴るリフトの大あくび

川柳ねやがわ

森

日枝子 瑞枝 那珂子 田鶴子 晶子 亞弥 玲子 恵子 初枝 寿々子 ゆき 富美子 章江 千代 紫泉 蘭 すみゑ

ガン告知凍結しての二十年  
 凍結を恰好つけて先送り  
 まっ白な壁へいたずらしたくなる  
 いたずらに判り余計に腹が立つ  
 いたずらに時を過して未だ一人  
 いたずらに歳ばかりをして人科  
 いたずらに歳を重ねて黄昏れる  
 徒に飲んで飲まれてたそがれる  
 利口ぶる割には口が軽すぎる  
 お利口に出来るだろうか保育所で  
 隙見せぬ利口な奴は黙ってる  
 黙っているだけでお利口だと言われ  
 利口すぎきつとストレスためてはる  
 マスメディア利口に使い選挙戦  
 お利口の子がキレやすい変な世に  
 利口より心優しい人が好き  
 風上にもいつも利口な人が居る  
 隣国に埋めた歴史がそのまんま  
 修二会の火男口マンの血が滾る  
 面倒な事は忘れた事にする  
 忘れたらあかんと言いたメモ忘れ

岬川柳会

八十田洞庵報

麗 勇太朗 典子 あやめ 亜成 一笑 洋 たもつ 仁清 頂留子 さち子 修 恵子 朝子 かずみ 一炊 弘一 柳弘 利昭 弘風

こつこつと積んだ八十路の砂の山  
 よその子は驚く早さで成長し  
 こつこつと続ける趣味の難しさ  
 頑なブランド溶けて檜風呂  
 書いた文字驚くほどにのびのびと  
 背に南受けてヨモギ夫と摘む  
 陽焼けした親父の顔が持つ魅力  
 夫婦愛日々積み上げて岩と成る  
 いつ返す友情の灯消えぬ間に  
 バラの花魅力の影に光るトゲ  
 ベコちゃんの魅力も賞味期限切れ  
 こつこつと愛を編んでる夜更けまで

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

蛙城 和香 茂平 桜琴 洋吉 東吉 富美子 廣作 みやこ 貞男 洞庵 正坊 タミ 石舟 慶人 重人 庸佑 高栄 和子 啓生 満寿巳 則彦 美智代 志津子 巴子 寅次郎

驚きの素顔を見合わす露天風呂  
 武骨でもやさしさ見せて驚かす  
 始球式有名人が盛り上げる  
 目かくしをした手ぬくい手あなたの手  
 ひそやかに五分咲きほどの恋でした

しと同じ値段のSサイズ  
暖味に笑つて誤解生むタイプ  
お百度の不思議ふみます母の背な  
人はみな平気な顔で生きている  
太陽とあしたを語り月に寝る  
いかなごを持ち友が来る春が来る  
軸足はもう決め球の位置にある  
あせらないそのうちきつと花は咲く  
古い服破れないから捨てられず  
末吉のみくじで決めた妻といふ  
何にでも目を丸くする幼い子  
温暖化次々不思議な事が起き  
頼られるうちが花だと思いつつ  
百度まいる決まったように母の脚  
正義感強いタイプでよく転ぶ

川柳塔打吹

野口

節子報

命日を忘れた我が身叱りつけ  
物忘れ忘れな草を食べてから  
浮世絵に酔つて画廊を抜け出せぬ  
ほろ酔いの父がポロリと本音吐き  
下戸なのに酔つたふりする逃げ上手  
美術館傑作ぞろいに酔いしれる  
酔えばまた昔ばなしがはずみ出る  
酔つてままだ言いつつ舌がはずみ出る  
酔眼で見ればなとも皆素敵  
酔つばらい人のボロ靴はいていた  
花に酔い風に酔う丘花回廊  
念仏に酔つて菩薩になつてゆく

宇乃子 幸雀 都代子 比ろ志 美義 蕉子 求芽 早人 玲子 勇治 萬夢 千代 郁子 楓楽 和枝 満子 幸子 孝恵 玲坊 たけ代 やえ 美知江 和子 重忠 龍枝 登

古希を過ぎ時計の針がよく進む  
旅の夜ねむれぬままに時計見る  
二十四時計の針のラブシーン  
全速力を求める時計休ませる  
古里に居ると時計が逆回り  
腕時計外すと笑う山がある  
しずしずとこの世の花もやまん婆に  
艶やかに十二単衣でシズシズと  
シズシズと残雪融けて名水に  
朝早く静寂破るホーホケキヨ  
しずしずと法話聞いているロバの耳  
シズシズと天目茶碗回し飲む  
シズシズと物忘れの虫忍び寄る  
シズシズと泥棒様のお出ました  
シズシズと若葉マークのバックギア  
生き返らぬようにしずしず霊柩車  
婆ちゃんシズシズ預金帳ひらく  
しとやかになつた時にはもう仏

川柳塔おとり

福田

登美報

ふくらむ芽開花予想をはずませる  
遅れ芽へ出来る限りの愛注ぐ  
かりんの芽一ミリほどの自己主張  
芽吹くの芽吹かせ春の精が来る  
完熟の恋がしたいと芽が伸びる  
すぐあきる性分正し芽を出そう  
さらさらになるまで父の靴みがく  
さらさらの時過ぎて今いぶし銀  
広島にさらさら光る落し穴

美美子 京子 石花菜 みち子 芳光 照彦 克枝 貴恵 和郎 楨元 善江 義人 紀美恵 清 滋 完司 玲子 節子 由多香 風和方津 以花 芳光 雄々 ヒロ子 真一 知恵 小生

岩美川柳會

石谷美恵子報

考えの甘さで招く迷い道  
驚に來いこい來いと梅の花  
一言が招く誤解に気付かない  
さまざまに生きた二人の友招く  
おにぎりや桜の花見客招く  
眼に悩むわたしを招く春の音  
趣味の会なのに勝負が気にかかる  
趣味一つ持つて人生輝やかす  
脳司令テンポだんだん遅くなる  
妻の行くテンポに合わせ平和なり  
川柳に合い司令塔活気つく  
認知症テンポ合わせてボランテア  
ウォーキングテンポ同じは三日間  
ワンテンポおくれていても辿りつく  
てのひらが乾く足の裏も乾く  
子が巢立ち親父が乾ききつている  
温暖化あんまり乾き過ぎないか  
考えの甘さに乾くふところ手  
乾いた脳にびつくり水を打つてみる  
バレンタインチョコらない乾いた咳をする  
街が乾いてにんげんどもの乱続く  
老いて二人無味乾燥にならぬよう  
絵でがみの乾くの待つて春の町  
乾燥機よりも乾くやっぱりおてんとさん  
舌の根も乾かぬうちにまた無心  
心まで乾いていない歌がでる  
年金のお蔭で口が乾かない

艶子 登 幸次郎 清子 道子 登美 孝男 孝子 和枝 たぬ 幸枝 菖子 幸安 雅女 完司 睦子 はるお 登 一瑠 よしえ 忠良 節子 圭一郎 公乃 和子 かつみ

ホーホケキヨ平和な春をつれてきた  
 苦と楽を平均すればいい余生  
 風ほけの平らな海に漁がない  
 畔平ら今年こそはとキヤベツ播く  
 しょうからで泣き虫だった恋人よ  
 拍手して褒めてやめさす聞き上手  
 価値観の差で平等が採めている

高知川柳社 川竹 松風報

悪友が俺の過去まで握つてる  
 友来る一升瓶をぶらさげて  
 ライバルと共に励んだ趣味の会  
 友情の絆が続く年賀状  
 年毎に手書きの友の減る年賀  
 世界中皆友達になれたなら  
 良心も一緒に捨てたゴミの山  
 良心がちくりと痛む親不孝  
 出世欲すぎて良心見失う  
 良心を論す動語が懐かしい  
 良心がチクリ宴の食べ残し  
 良心を買う野菜の無人市  
 良心というブレキが効き過ぎる  
 良心の呵責に悩む出来心  
 疑わず良心市へ品ならべ  
 良心に添えてくれる神が居る

川柳さんだ 北野 哲男報

重忠 茶子 蟹郎 稔 一京 清帆 美恵子 正躬 功 美恵 野風 典雄 和江 千鳥 まさ子 良雄 美々 てるみ 幸子 暖 美智恵 松風 京子 美紗子 雅司

木の芽時妻のお出掛け多くなり  
 手遅れに近い体に胚芽米  
 ストレスを飛ばすプランコ漕いでいる  
 今日揺れなせかふしぎに心地好い  
 プランコがゆらゆら千の風と知る  
 涙なくあつけらかんと卒業  
 欲張らず雀の涙ほどの幸  
 頬伝う涙も一度ありがとう  
 床柱内緒話を聞いている  
 年寄りも犬のふぐりも日向ぼこ  
 人間は地球に巣くう癌である  
 伸びすぎた髭シェーバーをくぐり抜け  
 百歳の長寿喪さえ笑み浮べ  
 川柳で錆びた女が甦える  
 朝風呂でカニの匂いを洗う旅  
 梅終り桜待つてる車椅子

川柳塔みちのく 小寺 花峯報

手作りのチョコを手渡す日の至福  
 裂織のアイトでほろが甦る  
 おくるみの嬰子そつと手渡され  
 御点前の天目茶碗欲しくなる  
 臍繰りをそつと手渡す嫁へ娘へ  
 一碗を母とまあるく食べる幸  
 巢立たせて茶碗ふたつになる四月  
 古稀過ぎて夫婦茶碗も穏やかに  
 母の趣味編んだ帽子を手渡され  
 はなびらがばらばら散つた万華鏡  
 バラバラの手足も入るオモチャ箱

和代 朋月 開子 章子 藤朗 光久 紀乃 順子 歳子 修 二英 好文 キヨミ 正和 哲男 美鈴 洋子 きよし 成柳 一呑 順風 銀波 ふさゑ 花匠 愁女 井蛙

逢うて来た火照り湯呑の底にある  
 ドナーの善意で今の僕がある  
 夫婦茶碗欠けても丸い陽が昇る  
 意味深にメモを手渡すロゼワイン  
 首飾りないが自慢の腕二つ  
 入山は無料小鳥のコンサート  
 朱の腕が二つ夫婦をしています

富柳会 池 森子報

肝腎な時に失敗してしまふ  
 ありがとう乗せてデイサービスのバス  
 要る物は何でも揃うゴミ置き場  
 二幕目妻を要に書くコント  
 練炭が見得切るわが家あつたかい  
 サービスか僧侶のお経長すぎる  
 身中の虫一匹がいのち乞い  
 納得のいく真ん丸はまだ未完  
 久しぶり焚火の匂い人恋し  
 要注意発火しそつになつてます  
 究極のサービス笑顔なんだろう  
 額縁の裏に隠してある要  
 サービスも過ぎると足が遠くなり  
 凜としてあやつり糸のもつれなく  
 鬼と豆仲良し春がころげ出す  
 絶頂の運氣に潜む落とし穴  
 いい笑顔介護サービス受けてから  
 お疲れと妻へ日課のマッサージ  
 マネキンを脱がせても客まだ迷う  
 掌の上で転がされてる夫

黙人 岳水 花峯 慕情 一花 五楽庵 アキ 奏子 深雪 鐘造 彦次 澄子 紅紫朗 欣之 千華 浩吉 ダン吉 佳子 冬虹 登子 和子 隆彦 よりこ 高鷲 伸雄 淳司

要するに老化ですかと念を押す  
要項を読めと言うけどちっちゃな字  
母はもう枯れない花になつて  
善人の喜ぶ顔に仏住む

我楽多の山から発芽する頭腦  
綱渡りするたび肝は太くなる  
オカリナを聞きたくなつた冬の耳

要にはなれぬ男の太い指  
肝心要生きているのを忘れかけ  
誓うものあつて五感を研ぎ澄ます

川柳藤井寺

高田美代子報

イナカ町のクイズでブタが賞品で  
近過ぎてあなたのクイズまだ読めず  
クイズ解けず昼ごはん抜くと言う妻  
テレビ局梯子しているクイズ狂  
飴なめて前頭葉を働かす  
はしやくのは早いクイズが解けてから  
終点が見えてクイズがまだ解けぬ  
○×で暮らすと決めた定年後  
過去などはふりむいてなどいられない  
聞き聞かす父にもあつた青い過去  
崖つぶちの犬よお前の過去に何  
好きでしたスーツとスーツと前のこと  
神に誓う妻に内緒の過去はない  
二十円貸してあげたの憶えてる  
巻き戻す顔がほころぶ金婚譜  
絶やさない笑み暗かつた過去らしい  
済んだ事しよがないねといつも妻  
ストーブよあつち行つてとチョコレート

あかり 巳代一 扶美代 宏 至 信子 ひろこ 萩乃 鬼焼 美代子 森子 栄一 昭子 耕策 東吉 アヤ子 弥生 みつこ 美代子 静子 龍一 シマ子 六点点 いさお 光男 惠勇 葛清 見清 喜代子

ストーブを囲めば懐かしい話  
ストーブって不思議心も温まる  
ストーブのやかんの蓋が踊つて  
ストーブの芋が匂えば三時です  
お難様出してストーブ廣議る  
ストーブで抱き合つて居る焼けた餅  
青春キップは駅のストーブ忘れたい  
雪の日はストーブよりも君の愛  
あの日の時から動かない振り子  
執刀医声の綺麗な人だつた  
落ちていた五円も足してお賽銭

翠洋会

谷口

帯きりり何があつても通す意地  
帯解いてああ一日の今日もとく  
夜が明けてほどいた帯が結べない  
携帯を切つて妻かいた雲がくれ  
浮いた世辞まともを受けて馬鹿を見る  
助けたい子等へとかぬ浮袋  
浮き沈みあつてこの世はバラダイス  
浮き沈みして来た祖父の古カバン  
輪の中で一人浮いてるくそ真面目  
浮き沈み泳いで運を追いかける  
喋り過ぎ浮いた自分にハツとする  
年金がセールのチャンス狙つてる  
セール見て買いたい頃が華だつた  
閉店の淵でセールの旗を振る  
バーゲンの春の帽子がよく似合う  
閉店セール始めて五年経ちました

淳司 シルク 政男 絹枝 扶美代 鐘造 重人 瑠美子 一筒 雅枝 義報 理恵 尚士 捷也 舞夢 集一 恭昌 正雄 照子 日の出 千梢 桃花 みつ子 昭

春日背に杖つく人の立ち話  
聞き流した噂が胸に引つかかり  
見過した溝を侮り溺れてる  
ゴミの日に溜めた不満も捨てました  
いつもの座に今日も元気な味がある  
遊ぶひまあるのにおひいたしを買い  
裏金作り上手に妻も習ひたい  
花の下りもわたしも高齢者  
おでこ撫で熱の具合を診る笑顔  
さくらさくらフランス志向になつて  
戸を叩け助ける人はきつといる  
良心に居留守つかわすことがある

倉吉川柳会

竹信 照彦報

桜咲く便りがほしい卒業生  
子育てに桜の切絵障子張り  
夜桜の花影ちらちら亡母の顔  
人の目は気にせず咲く山桜  
赤ちゃんの顔桜色まぶしいね  
幾星霜惜しまれて散る桜花  
占いではとつくに死んでいるはずだ  
美しい国よりおかしい国みたい  
ヒゲ男さつきトイレに行つたきり  
おかしい何を食べても太らない  
おかしいな足元見れば右左  
あるあるとやせる納豆おかしいな  
おかしいなこの道さき来た道だ  
霊安室出ると葬儀屋さんか来た  
あげる顔思いの旅の荷を解く  
卒業の前に就職決めてる

水昇 富子 すみ子 志華子 孝一 孝と美 絹子 千歩 満作 蕉子 楓楽 賀寿恵 日出子 克枝 玲坊 和子 節子 鬼一 次男 泰輔 美津恵 貞露 風露 悠子 螢

春見つけ早速食べた落の臺

早速のお返しに来る大大根

万札は来ても即座に家を出る

気が知れず早速浴け込めぬ

美容液早速ためした効果なし

我慢してやがては千の風になる

老人は言いたい事も我慢する

横に振る首は我慢を強いている

母さんの笑いに解けた子の我慢

十二支の外で我慢の猫がいる

我慢した六文銭の灸の跡

唇を噛んで我慢を閉じ込める

波風が立たない距離で我慢する

桜の木お神酒を飲ませ切り倒す

### 津山市芸術祭

## 第29回津山川柳大会

とき 6月3日(日) 1時から

ところ 津山市総合福祉会館

題と選者 (締切11時30分)

「千」土井哲秋・「奏でる」池 森子

「降る」中川 一・「耳」辻 嬉久子

「切手」石部 明・「狂う」片野智恵子

「坂」墨作二郎・「禁じる」森中恵美子

会費 千円欠席投句拝辞

6月2日(土) 市内文学碑巡り

問い合わせ 津山市教育委員会文化課

TEL 0868-321-2121

龍枝 よしえ 茶子 秋草 由紀子 石花菜 幸子 玲子 康子 重忠 京枝 照彦

## 第十二回全日本川柳誌上大会

(文字は本社同)

平成柳多留賞 岐阜 加藤友三郎

国境に活断層が伸びている

川柳大賞 秋田 加藤 星花

ふるさとをすてた螢を笑えない

NHK会長賞 広島 部 帆子

スクラムを組んだ家族と癌退治

日本青少年育成協会会長賞 東京 河合 成近

ばあちゃんの青春にいるプレスリー

全日本川柳協会会長賞 大阪 中田たつお

国境の羊に混じるテロリスト

全日本川柳誌上大会賞

茨城 櫻村 日華

揉むほどに灰汁がひろがる星条旗

青森 三浦 幸子

水を撒く泣いてる花のないように

兵庫 岩原 隆子

アメリカの牛が揉み手でやってくる

東京 播本 充子

月面にたつぷり花の種を蒔く

山口 藤中 公人

頂点に人間という癌組織

(秀句) 井伊東吉

## 川柳二五〇年 平成万句合

締め切り 6月25日

発表並びに表彰 8月25日

課題 「太陽」 投句無料

賞 大賞 10万円 1句 他

選考委員 脇屋川柳・磯野いさむ・大

川幸太郎・大野風柳・尾藤

三柳・斎藤大雄ほか

投句先・問い合わせ先

〒114-0005東京都北区栄町38-2

川柳二五〇年実行委員会「平成万句合」係

後援 文化庁(予定)、東京都(予

定)、(社)全日本川柳協会、

朝日カルチャーセンター他

川柳二五〇年 協賛募集のお願い

川柳発祥二五〇年を祝す諸事業を通じて川

柳の文化を広く社会に訴えていきます。日頃

より川柳に親しむ皆様のご協賛をお願い申し

上げます。 一口二〇〇円

口座名 川柳二五〇年実行委員会

口座番号 00150-5-668834

# 柳界展望

畑金治氏(92歳)は3月11日逝去、同23日ロイヤルホテルにて偲ぶ会が行われ、前たもつ副理事長が出席した。



を得て活用されている旨の報告が同人加島由一氏よりなされた。

○木本朱夏さん(常任理事)は「上方芸能」誌にエッセイ「風に吹かれて」を執筆。

○藤井則彦氏(同人)のエッセイが2月21日付産経新聞「夕焼けエッセー」欄に掲載された。

## ▽同人動向△

○4月1日、第7回春はくろほこ川柳大会出席のため、天笑主幹他3名鳥取県倉吉市行。

○奥田みつ子副主幹は、神奈川県大教授の復本一郎氏と、往復書簡を交わし互いの川柳観を語り合った。(「華音」)

○門谷たず子さん(同人西宮市)は、3月28日病氣のため死去。享年85(追悼文96頁)30日エテルノ西宮で行われた葬儀には西出楓楽理事長、奥田みつ子副主幹他同人多数が参列した。

○台湾川柳会では「川柳しませんか」の小冊子が好評

## 新同人紹介

池原天馬

—公弘・洋々・天笑推薦

中宇地秀四

—公弘・洋々・天笑推薦

はこ卒寿すぎても。

4月号87頁2段13行目、シユ・ミレーター↓シミュレーター。4月号129頁3段21行目、和歌山県三幸川柳会↓

和歌山三幸川柳会。

常任理事会4月7日(土)出席16名①第13回川柳塔まつりについて—選者推選②特別常任理事会の開催について③大阪川柳大会会計報告④定例確認事項—各地川柳

## お願い

郵便事情により、「川柳塔」の配達が遅れる場合があります。27日の発送日から一週間過ぎて届かない場合は事務所へ連絡下さい。

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳さんだ	15日(火)午後1時から 軒(いびき)・男・偲ぶ	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
高槻川柳サークル卯の花	17日(木)午後1時半締め切り 青い・地団・ゆっくり・魚 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
岸和田川柳会	19日(土)午後2時締め切り 甘口・営む・うやむや カタログ	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
岬川柳会	20日(日)午後1時半締め切り はっきり・甲斐性・手応え	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳ねやがわ	20日(日)午後1時半締め切り 熱い・分析・暗黙・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳藤井寺	20日(日)午後2時15分締め切り 葉・ふたつ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
もくせい川柳会	21日(月)午後1時半締め切り 真似る・立場・いずれ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南大阪川柳会	21日(月)午後6時から 今・ガード・ふくらむ・自由吟	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブわたの花	25日(金)午前9時半から 運転・艶・ベテラン・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
和歌山幸三川柳会	26日(土)午後1時から シャツ・タイミング・染める	勤労者総合センター4F 会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市川柳同好会	26日(土)午後6時から 裁く・サイズ・喜び・弱	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市川柳会	27日(日)午後2時締め切り 腕・呆れる・ぼたぼた 「ニート」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	27日(日)午後2時締め切り ターゲット・しかし・特ダネ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
川柳塔みぞくち	28日(月)午後7時半から 降る・河童・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京都塔の会	28日(月) 35周年記念大会 条(事前投句)・柳・押す・ 錦・堀・高	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

## 5 月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	4日(金)午後2時締め切り 油断・光る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	5日(土)午後2時締め切り 浴・形状・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	5日(土)午後2時締め切り 一流・音・こえる(超える・肥える・ 越える・乞える・請える・恋える)	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津	7日(月)午後1時半から 地球・ひたすら・脱ぐ	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火)午後2時締め切り 壁・競る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から 肩書き・細工・救う	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳塔 なら	10日(木)午後1時から 嬉しい・塾・殊更	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口徒歩5分) 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
堺川柳会	11日(金)午後2時締め切り 軒・知恵 「ドイツ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
城北 川柳会	12日(土)午後1時半締め切り 細・補う・ばたばた・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 打吹	12日(土)午後2時締め切り 雲・怒る・シトシト	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-1 3 牧野芳光
川柳塔 みちのく	12日(土)午後5時半締め切り 認知・持つ・忙しい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 まつえ	12日(土)午後2時締め切り まっすぐ・帯・予定・誘う	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島滯丘
川柳塔 わかやま	13日(日)午後2時締め切り 無邪気・拭・カーブ・「楽器」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	13日(日)午後1時から 花壇・ぐったり・追う・雑詠	山本コミュニティセンター3F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 棚・告白・こぼれる・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

# 編集後記

☆先月号の特集には、素晴らしい宝ものをたくさんの方から披露して頂きました。珠玉の一篇それぞれに感動しながら、読ませて頂いた次第です。

☆川柳塔では近年同人諸氏により、あちこちで新しい川柳会や勉強会を立ち上げていただき次々軌道に乗せていただいています。

四月にはまたひとつ「めだかの学校」が開校しました。六甲川柳会という勉強会で初心者参加を呼びかけています。

「めだかの学校」とは三田市の人北野哲男さん発案による名称で、誰が生徒か先生か／の歌詞通り、特に先生はいなくても皆で一緒に楽しく学びましょうと言う意味だそうです。

☆こうして熱心な同人の努力により初心者交えて、あちこちで句会や勉強会が生まれ育っています。

川柳を愛し、広め、ひいては川柳塔の更なる発展を願うところこそ川柳塔の宝に他ならぬと思っています。

☆めだかの学校ではなく、私の住んでいる市の小学校では、登校、下校の小学生の安全を見守る「子供見守り隊」なるボランティアが活動をされています。

学校と地域住民との連携により登下校の小学生を、事件事故から守ろうと言う自主活動のひとつです。犯罪を未然に防ぐ抑止力にしたいという目的です。グリーンのジャンパーと帽子、老人会からの参加が多いのですが、子供達に声をかけ、子供達も挨拶を通して通る光景は心温まるものです。(希)

## 遅い目覚め

番傘本社の近江砂人先生が上京され句会が開かれると聞き、物珍しさに友だちと見学に行ったことがあります。

大勢の参加者の肩越しに先生のお顔を見るのがやつと、という熱気の中、不思議な呼名の数々と場内の雰囲気驚きの連続でした。早速に近江砂人著「川柳の作り方」を買いました。

その頃からの川柳塔誌友です。

初歩教室の添削欄を卒業するまでに数年もかかったという、我ながらのんびりした超カメ型人間です。

京に「川柳塔のぞみ」が出来てから……。スロースターターのため年齢的に余裕がありません。川柳上達請負人様の指導のもと「のぞみ」の会員の方々と仲良く楽しく、励みたいと思っています。

(根岸 方子)

## ひとこと

◇野性の福寿草を一度は見たいと思っていたところ、ニユースで京都大野原森林公園で咲いているとのこと、早速行ってみた。

◇入山するのに管理事務所、住所氏名を書く手続きがいった。事務所で地図を貰い説明から、険しいのは一カ所だけ四十分位とのこと、歩き出したがなんと坂道ばかり。見逃してしま

に聞かなければ行き着かなかったであろう道であった。◇やつと辿りつくと、監視の方が三人おられた。雪の降る中苦勞な事である。こうして対面した福寿草は木の根本だったり、石ころの間だったり本当に何気なく咲いているのである。縁起のよい名前と花の少ないの願いだ。やさしくやって行こうとする気配を社会に感じるのは私だけだろう。

延びるに違いない。そんな未来は見たくない、子供や孫に残したくないのが心から願いだ。やさしくやって行こうとする気配を社会に感じるのは私だけだろう。野生とはいえ監視をしかか。

(惠)

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)

地名

都道府  
市

姓  
雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



# 檸檬抄投句用紙

「痒い」 (5月15日締切)

7月号発表

松本 文子 選 — 共選 — 川上 大輪 選

B A

--	--

地名

市都  
道府

姓  
雅号

B A

--	--

地名

市都  
道府

姓  
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい







## 作品募集

7月号発表(5月15日締切)

川柳塔(8句) 河内天笑選  
水煙抄(8句) 奥田みつ子選  
愛染帖(3句) 新家完司選  
檸檬抄「痒い」(2句) 川上大輪共選  
松本文子選

一路集(3句) 「地球」濱野奇童選  
「ひたすら」鈴木公弘選  
「脱ぐ」志田千代選  
初歩教室「浴衣」(3句) 三宅保州担当

8月号

檸檬抄「促す」  
一路集「器」「プール」  
「傷」  
初歩教室「泳ぐ」

## 本社5月句会

とき 5月7日(月) 午後5時半開場・6時半締切り  
開催時間、締切り時間に注意下さい。  
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛  
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
おはなし  
兼題 「いとしい」 津守柳伸  
「艶」 北野哲男選  
「ルーツ」 板東倫子選  
「励ます」 水野黒兔選  
「味方」 井伊東吉選  
河内天笑選 (各題2句以内)(切手可)

会費 1000円  
投句料 500円

## 本社6月句会

7日(木) 午後5時半から  
兼題 「そこそこ」「骨」「マナー」  
「役立つ」「流儀」

## 第25年度 夜市川柳募集

第12回「天」小島蘭幸選  
ハガキに3句 5月20日締切  
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

## 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇七年(平成十九年)五月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)6291691四番

振替(098)0412984七九番

いのちある句を創ろう

### 川柳塔のぞみ三周年記念誌上川柳大会 御礼

北から南からご協力、ご投句まことに有難うございました。皆様方の熱いエールにより大変充実した大会になりました。心より御礼申し上げます。

選考結果(特選◎ 準特選○)をお知らせ致します。発表誌は追ってお送りさせて頂きます。

#### 「ひらく」

##### 赤松ますみ 選

◎ 氷上の開脚補聴器は透明 岡崎 一也

◎ 烏賊の腹ひらけば海の夜想曲 中村みのり

◎ キムタクに似ている鯛指で裂く 播本 充子

##### 五十嵐 修 選

◎ 視野無限ひらけば響く千の風 松下比ろ志

◎ 核ゼロへ平方根が開けない 播本 充子

◎ 小学校の門がひらいてるように 小島 蘭幸

##### 三宅 保州 選

◎ 視野無限ひらけば響く千の風 松下比ろ志

◎ ひらいたらみなひらいてくるころ 土田 欣之

◎ 握り拳ひらいてみたら芽が出てる 安土 理恵

##### 河内 天笑 選

◎ 新しいページをひらく人に逢う 遠藤那珂子

◎ 両の手をひらくと溢れ出る海よ 興津 幸代

◎ 掌を伸ばす愛には要らぬ武器 永藤 我柳

#### 「雑 詠」

##### 前田美巳代 選

◎ 桜の木ゆうべの嘘をどつと吐く 内田真理子

◎ あいまいな言葉の裏の猛吹雪 小林 有子

◎ 赤い帽子の女が夕陽連れて来た 木本 朱夏

##### 岡崎たけ子 選

◎ 好きだから無理難題を言ってみる 福田 好文

◎ 生かされて生きる命の無限大 御園 孝子

◎ 子を生んで女は城を守り抜く 若竹 重子

##### 坂根 寛哉 選

◎ 春の町なのに淋しい灯が点る 福力 明良

◎ 二番目に来たのはボール紙の馬 井上 一簡

◎ 咳ひとつ北のページを閉じていく 高橋 宏臣

##### 新家 完司 選

◎ 大氷河ゆるむわたしのうたたねに 畠山 軍子

◎ 欠点を見つけて人は寄ってくる 早川 盛夫

◎ 定年の夫が話しかけてくる 高島 啓子

三周年という節目を(ひらく) 1135句(雑詠) 1139句のご投句で飾って頂き、感謝 感謝でございます。共選の醍醐味、発表誌の反響を楽しみにしております。

### 川柳塔のぞみ

代表 播本 充子